

紅月の下、世界は赤く染まる

夕闇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

軍事研究施設でクイーンヘトドメを刺したのち、自決した主人公が早期に目覚め、クルスでなくクイーンと歩んでいるi.f.。いわゆる強くてニューゲーム。

続きものですが、今作の時間軸は原作。不定期更新。イラスト練習のため、絵を挿入する都合上時間がかかります。  
改修中、時期未定。

目

次

1	裏	裏	1	2	1	0	裏	9	8	閑話	7	6	5	4	3	2	1
3	2	1	2	2	1	0											
134	123	108	94	85	74	65	53	48	42	34	29	23	16	10	5	1	

世界に突如現れた屈強なバケモノ。それに対抗する手段として、人類は不死の戦士吸血鬼を生み出した。

バケモノは吸血鬼達によつて追い払われたが、吸血鬼には欠陥があつた。血を啜り人間性を保たなければ暴走し、無限に復活する異形の存在と成り果てる。

それゆえ、血の乾きを克服するべくQ・U・E・E・N・計画が進められた。けれど、計画は失敗。一番適正率が高い人物、Q・U・E・E・N・計画の被検体となつた少女が暴走した。

各都市に巨大な黒石の棘が地表から隆起したことで街は破壊され、何処からともなく瘴気が振り撒かれ、人類の半数が命を落とし、文明が破壊された大崩壊という厄災となつたのだ。

人々を救いたいという想いから名乗りを上げた少女であつたが、同胞を殺戮する化け物となつては討伐するしかない。何せ、殺しても無限に復活する墮鬼を操るのだ。少女を止めなければ、バケモノを絶滅させるより前に人類が滅亡してしまう。

その後、クイーンと呼ばれるようになつた少女を倒すため、死者も含め、多くの人間が吸血鬼化することとなる。吸血鬼の欠陥は以前のままであり、墮鬼となる者が後を絶たない負の連鎖だが仕方のないことだつた。

そうして、破壊を撒き散らした少女は、多くの屍を築き上げたのち、討伐された。

破壊の権化と化した少女を討伐したのは、一人の女性だ。その女性の名は”カミラ”。けれど、カミラはクイーンの瘴気により墮鬼になりました。クイーンとの戦闘中、浄化マスクを失い、吸血鬼特有の血の渴望に苛まれたのだ。

カミラはすぐさま自決を決断。最期は仲間が見守る中、自ら心臓を破壊して己の命に終止符を打ち、未来を仲間に託してこの世から消失した。

——はづだつた。

カミラは日数を経たずして蘇る。殺したはづの女の姿で。復活した場所は故郷から遠く離れたロシアだ。

それから月日が流れ、約10年の歳月が経過する。色々とあつたが、遂に故郷の噂を耳にすることのなかつたカミラは生まれ育つた国へと帰ることを決意した。

紅月の下、灰色がかつた上着を取り、何処までも広がる白い地表を歩く。そして、懐かしの故郷に到着すると、生まれ育つた国は強大なドーム状の赤い霧で覆われていたのだつた。

『真つ赤だねー』

カミラの中に寄生する、内なるクルスの素直な感想。もつと言えば、外見クルスの中身Q. U. E. E. N. ゆえに、もうひとりのクルスというほうが適切だろう。目は青く、白球体は黒い。本来のクルスは宿らず、カミラに移つたのは破壊の権化の方だつた。

「これ、霧の牢獄よね。遠目で見た時には目を疑つたけれど、何でこんなものが展開しているのかしら?」

『さー?』

「しかもこれ、維持し続けているのよね。悪戯にしては過激すぎるし、この広範囲、国単位で動いていると考えるのが妥当かしら? 出力からの威力を思えば、大抵の生物は死ぬものね」

『さー?』

「投げやりね」

『だつて、わたし納得してないし。こんな国なんて放つて置こうよ、絶対面倒ごとになるつてー』

カミラとクルスは互いの感情がわかる。考えが読めなくとも、カミ

ラはクルスがもう一人の自分、シルヴァの娘に遭遇したくないのだと理解していた。言葉を重ねても、表情では嫌がっているようなものだ。

ついでに、傍から見れば独り言。虚空に向かつて喋つている様。クルスの声はカミラにしか伝わっていないのだから当然である。

『あ、じゃあじやあ、これ壊そ？ そしたら、ぜえくんぶ解決だよ！』

〔I M G 6 5 8 1 7〕

「何も解決しないし、喧嘩を吹つ掛けているだけじゃない。クイーン討伐戦のリベンジをしてどうするのよ。それと、久方振りに殺氣が滲み出ているけれど、それってなんなの？」

『だつて、この霧。何かに混じつて、アレの力を感じるし』

「……あら、シルヴァの娘が生きてる？」

『生きてるというか、使われてる感じ？』

「ん、確かに最期、石化したのよね……よし。このままここで推論立てたつて、わかりはしないし、中へ突入してみましよう」

『え、えーーーーっ!!』

脳内に響く大音量のボリュームに、カミラは辛そうな表情で片手で髪を搔きあげ、頭を押さえては頭痛に堪える。

「いいから、私の我慢に付き合いなさい」

『うへー……はーい、はいはい、わかりました。わたし、良い子だからカミラの言う事に従いまーす』

カミラは未だ残る頭の痛みに眉をしかめつつ、意見を押し通す。いつもの強引さに、内なるクルスは頬を膨らませ拗ねた。けれど、邪魔することはしない。カミラが赤い霧の前に立つと、カミラを中心不可視の球体の防壁を展開する。

「ありがと、私に優しくしてくれるクルスが好きよ」

『いっくーだつ！ そんな言葉で懐柔されるほどチョロくはないんだ

から！……あとで、膝枕からのマッサージを要求するよつ！』

言葉で怒りつつも、滅多に言われることない話文句に尻尾を全力で振るクルス。最後の要求は嬉しさを隠し切れないせめてもの抵抗だった。

「安全に寝られる場所を見つけたらね……カモフラージュも完了つと」

カミラは冥血を消費し、姿を光学迷彩のように透かす。

『看破されることはまずないと思うけど、目元隠さないと騒ぎになるよ』

「まためくら生活に振り出しね」

『自業自得う』

「いつにも増して辛辣だわ」

カミラは目元を布で隠す。それから、赤い霧に触れ、クルスの防壁が何者かの鍊血に耐えられると判断。

「それじやあ、突つ切るわよ」

『嫌なのに……あ、ー……』

内なるクルスは未練がましく反感的であるが、カミラが行動体勢へ移ったのを見るに意識を切り替える。そして、二心一体の彼女達は赤い霧へ突入。濃霧の中へと姿を消した。

あらゆる生物を苦しめ、死へと至らしめる赤い濃霧を突破したカミラ。目元を覆った布をずらしてみれば、その霧を抜けた先は約10年前とほとんど変わらぬ景観であつた。林立するビルの一部は倒壊しどとの窓ガラスは割れ、舗装された道はひび割れている。審判の棘が隆起し、世紀末さながら乾いた大地の街並みのままだ。

カミラは景色を目に焼き付けると、布を元に戻す。

「昔と何も変わらない懐かしい景色ね。けれど、何か違和感。外の空気と違うのかしら」

カミラは同意を求めるように内なるクルスへ話しかけるが、当のクルスは困惑した様子だつた。

『……あれ？ んー？』  
「どうかしたの？」

珍しくカミラの問いに返答せず、小首をかしげて唸る。何かを探る様に、カミラはそれ以上問い合わせず待つ。

『あ、大変、大変！ カミラ、早く鍊血を解いて！』  
「え、ええ……？」

弾けたように慌てはじめた内なるクルスに、面を喰らうカミラ。カミラは内なるクルスに急かされた通り、人目のない廃棄されたビル内でカモフラージュを解き、不可視化を解除する。けれども、内なるクルスの焦燥感は燻つており、不安を覚える。

『大丈夫？ 大丈夫だよね？ ……うん？ ……よしつ、たぶん、バ

してない！』

内なるクルスは、右よし、左よし、上下後ろよしと、周囲の気配に氣を配り終えると胸を撫で下ろした。しかし、内なるクルスが良くても、力ミラの疑念は解消されない。

「一体何なの？」

『ちよつと、移動しながら話そ。アレに気づかれても面白くないし、力ミラも困るよね？　あとあと、冥血の使用は禁止だから……！』

力ミラは穎然としないまま移動をはじめた。霧を突破した現場に背を向け、疾走。軽快に建物へと跳躍して飛び移り、宛てもなく突き進む。

力ミラ達は風を切りながら会話を続ける。

『こここの空気は惑星が青い時のままだつたから氣づけたよ。結局の所、わたし達って瘴気を生み出す存在だからね。限りなく匂わないようになってきても、微量に纏っているし』

「つまり？」

『冥血放出する系はアレにわたし達の居場所がばれる可能性が高いってこと。ロシアと違つてここ狭いし、最初から吸血鬼の存在知つてノウハウあるし。どうしても時は使うけど、正体ばれ嫌だつたら冥血使用はできないかな。……はー、どーしょ、肅清の棘撃てない、絶対フルストレーシヨン溜まるつてえつ！』

「長距離遠征もあつて、身軽な物しかないのだけど……血武器は使用できるの？」

『微妙かなあ……。肉体変化のブラツドヴェイルならまだいけるかもだけど、専用防具もないんだし目撃者を必殺していかないと面倒なことになるよ』

「なんて難儀なの……いきなり攻撃制限なんて。荷物入れでも持つてくるべきだったわね」

『アレが一箇所に留まつてゐるならまだしも、あつちこつちか細い根を張つてゐるからねー。あと、致命傷とか負つちゃ駄目だよ。気配から特定されちゃう』

「また遠回りね、被弾制限か。未知が既知になるまでなるべく争いか  
ら遠ざからないといけないわね」

『だから面倒ごとになるつて言つたのにいゝ』

「ふう、ぐうの音も出ないわ。それはそうと、シルヴァの娘は使われるようだつて言つてたけれど、より詳しく教えてくれないかしら』  
『もー、仕方ないなー。なんか、幾つもにバラバラつて感じ。あ、そこの道路右に行つて。たぶん、地下かな？　その場所にヤドリギがあると思ふ』

カミラは内なるクルスの示す方向に従い、20メートルのビルを飛び降り、落下の浮遊感を楽しむ。この感覚が好きなのだ。

地面が近づくと、くるりと1回転して着地。道を屈折し、落盤した道にできた穴を発見しては滑るようにして飛び降りた。

無事地下へと下りると、目の前は灯りのない道の先は鬱蒼として暗い。けれども、カミラ自身、視覚に頼つて行動をしていいないのでなら問題もなかつた。

『バラバラね、5年前にクルス言つていたわよね？　貴女の左半身は私に融合しているらしいじゃない。それよりも細かく分割されたつてことかしら？』

『たぶんねー。わたしほど濃い自我が残つてゐるわけじやないんじやないかな？　でも、わたしのように誰かの中とか、アイテム化で所持されてたりとかで、所有者に影響が出るはずだよ。そうなると面倒事だけどねー』

『ふうん、例えば？』

『絶対わたし達と敵対関係になる。だつて、当時に人類を殺戮して1億人以上の人を不幸にしたわたしだよ？　まだ自我の残つていたア

レを肉体的にも精神的にも散々苦しめだし、復讐でなくたって、トラウマから襲つてくるかもねー』

「……社に祀られたりして、安置されていることを願うわ。というより、個人所有していないと確証を得るまで、シルヴァやジャックに会えなくなつたじやない。特にシルヴァなんて娘の形見を持つていたいでしようし」

『全部わたしの憶測だけどね』

「そう自信たっぷりに話されたら憶測でも会えないわよ。再開早々、戦友達との殺し合いなんて嫌だわ」

会話の区切りになると、カミラ達はヤドリギの前に辿り着いた。急制動したことにより、暴風と砂塵を周囲に撒き散らす。風圧に幾つもの赤い実が実つたヤドリギが揺らされた。

カミラは内なるクルスからヤドリギの色形を知る。気になつて目元の布をずらし、ヤドリギを一瞥した。

「あら、こつちのヤドリギもクルスが創造した木と似たような見た目なのね。でも何かちょっと違うかも」

『淨化機能の他に、施ししかないからだと思うよ。他者を養分にしてーとかないっぽい』

「ああ、言われてみればそうね。シルヴァの娘はOne for all、私達はAll for oneで性質が真

逆ね。ヒロイックに対するヴィランのようだわ」

『あ、待つて——ううつ、また別人……！　きもちわるーっ!!』

「どうかしたの？」

『なんとなーくで薄つすらとした氣配を追つてたんだけど、アレと一緒にこのヤドリギを誰かが支えているっぽい。しかも霧を維持している人とはまったくの別人、わかつていてもすつごい奇妙な氣分……！　うー、あと、なんか気配が薄過ぎる気がする。たぶんキヤパオーバーだ。ひよつとすると探知能力なんてないのかも』

『なら、あの実をもぎとつても居場所を特定されないのでないのね』

『わたし達用に調整してないし、味気ないとと思うよ。でもでも、血を振り掛けちゃ駄目だからね。ヤドリギから気配が伸びてるし、気づかるかも』

「ヤドリギの付近での傷負いはNGと。どんどん行動制限が増えるわね」

『ちなみに、昔と違つて浄化作用に新たな能力が更新されてまーす。墮鬼を追い払う防虫剤みたいのがあるよ。嫌いな臭いつてだけだから、殺し合いになると効力はないと思うけど』

「私達は平氣よ？ 不快感もないわ」

『だつてこの身体リニューアルしてるもん。あんだけバケモノをいっぱい食べたんだから別物になるよ……んー？　あー、悲報です。バケモノの特殊能力も駄目だから。浮遊とか衝撃波とか。察知されじやなくて、超能力のない世界で無条件で力を行使するとわかるよね？　鍊血じやないって気づかれた時に大変なことになるよ』

「……もう戦士として戦う選択肢以外ないじやない。第二世代の吸血鬼なのに、できることが第一世代の初等の頃に戻っているわ」

『そなんだ』

「冥血という概念は吸血鬼が生まれてから後に確立したものよ。ところで、こんな辺鄙な場所に人の気配が近づいてきているのだけれど、対話できると思う？」

『うーん、まあ……、運かなあ？　今度は殺伐としないといいね！』

レツツ　コミュニケーション、駄目なら殺っちゃえ』

情報収集のため人との接触はするが、二人は自ら会いにいくか、ここで待つか法廷を開催。決議の結果、逃走用経路を確保して待つことに決定した。

それからカミラ達は待機。複数いた気配は次第に減つていき、しばらくすると一人の吸血鬼がカミラの前に姿を現す。それは比較的引き締まつた体をしており、顔にガスマスクを装着し、血塗れた大きな槌を担ぐ青年だった。

カミラと接触した吸血鬼<sup>レヴァナント</sup>はオリバー・コリンズという名の人物だ。物腰柔らかな青年で良い人柄もあって、出だしから友好的に振る舞う。オリバーはマスクを外し、顔を晒した。

「えーっと、初めまして。俺はオリバートていうんだけど、君ってここで暮らしている人？」

「ええ、そうね」

カミラは平然と嘘をつく。

「いきなりで悪んだけどさ、その血涙を分けてくれないかい？　君の繩張りだってことはわかっているんだけど、俺も生きていくのに必要なんだ」

相手を刺激しないよう心掛ける。武器を地面に置き、敵対する意思はないと示し、ヤドリギの実を指差した。

カミラ達は血涙という名称を知らないが、ヤドリギを指差しているのを見て、状況的にヤドリギの赤い実の名称だと気づく。

「構わないわ」

端的に答え、カミラは仕方ないわね、といった演技でヤドリギへの道を開けた。

オリバーは緊張をほぐし、「ありがとう」と感謝を露わにする。ただ、オリバーは移動しながらもカミラを目で追つてしまう。浄化マスクや、武器にブラッドヴェイル。どう見ても必要な装備を所持してい

ないのだ。オリバーはカミラがどうやつて生きてきたのか不思議でならなかつた。

しかし、注視し過ぎたため、オリバーはカミラの冷たい雰囲気に打たれた。まさか自身の挙動がわかると思わず、愛想笑いでその場を誤魔化す。

それからカミラに背を向け、ヤドリギから垂れ下がつた血涙をもぎ取つて回収。その数は全体の2割程度。巨大なヤドリギという訳でもないので数も少ない。オリバーはそれらを懐に入れてある布袋に血涙を収めた。

「一人分にしては些か多いような気がするけれど、もしかして貴方、家族でもいるの？」

布の袋をしつかり閉じるオリバー。けれど、その表情に嬉しさはなく憂鬱が浮かぶ。

「家族なんて上等なものじゃないさ、むしろ無理やり働かされている奴隸だよ。本当はこれだけ持つて逃げたいんだけど、今地上では戦いの実力者が見張りをしてて逃げられないしね。下手すると仲間に逆恨みもされるしさ。だつたら秘密にして血涙を持つていかない方がいいんだけど、余裕がないのも事実でね。ごまかしはするけど、他の人がここを見つける前に君も他へ逃げた方がいいよ」

「奴隸ね。それつて法的に許されるのかしら？」

オリバーは溜息をついて、疲れた様子で血涙の入った袋を掲げる。

「中世のような契約売買なんてないけど、実質許されているよ。労働奴隸みたいなものさ。各地のヤドリギが徐々に枯れる中、これを、血税を納めるために、力の弱い僕らは強い吸血鬼に屈服して生きていかなきやならない。力弱い者から死んでいく。シルヴァアが統治しているのはそういう世界だ。っていうか、子供ですら血涙のために殺しや

騙し合いもしているのに、君は知らないのかい？」

「死んだと思ったのに蘇ったのよ、人の記憶のままね。混乱もするわ」「なら、君はよほど運がいいんだね。どこもかしこも秩序が崩壊して、無法地帯となっているよ。人殺しをしたって治安部隊に現場を抑えらなければ罪にならない。監視下にある法の下に入りたかったら、こみたいな血涙の泉があつて、かつ墮鬼ロストがほとんどいない場所を臨時総督府に報告するんだ。そうすれば、身の安全と血の乾きに困らない程度には安定した生活ができるはずだよ」

「ここでは駄目なのかしら？」

「こいつが豊穣でもないし、難しいラインかな。それに僕達を奴隸化しているグループを蹴散らしつつ、目立たないけど周辺に点在する強力な墮鬼を倒さないといけない。碌に食事を摂れていないから俺達に決起する体力もないし、グループ全員の力を合わせたつて強力な墮鬼の前にはどうしようもないしね。この際だ、他に聞きたいことはあるかい？」

「そうね、お言葉に甘えさせてもらおうかしら」

そうして、カミラはオリバーからこの世界の常識を語つてもらう。オリバーはこの世界の理不尽にを知らせるためか、普通は人に語ることではない一つの家族を死に追いやる話もある。友人の話だと言つてはいたが、まるで自身が見てきたかのように出来事を語り、後悔のごとく吐露する様は懺悔に見えた。

命の価値が軽いこの世界では、通貨の価値が重く、血税の未払いは重罪で、安全地域から追い出され、化け物が徘徊する棲み処で這い蹲るよう生きるしかない。強い吸血鬼はその安全地帯での暮らしを維持するため、交代で力無き者を奴隸のように扱っているとのことだった。

他には、ヤドリギというものは血涙の萌芽を指す用語なのだが、そこから成長して『血涙の泉』になる奇跡の植物だと教えて貰えた。その泉のことをヤドリギというのはクイーン討伐時期に血涙の泉がなかつた第二世代に時たま見られる癖だということだ。今の第三世

代・第四世代では、まずいない。

「色々と知らないことばかりだから助かつたわ。ありがとう」

「いや、俺の方こそありがとうございます。話を遮ることなく聞いてくれて。こんなすつきりとした気分は久しぶりだ。今の俺の立ち位置だと仲間を暗い雰囲気にできないからね。あと、これをあげるよ」

オリバーは手にしていたマスクをカミラに差し出す。

「瘴気を浄化するマスクだ。持つてないんだよね？　俺は大丈夫。帰り道に手に入る場所があるからさ」

「必要ないわ、自分で付けていきなさい」

「えっと、気持ちが悪いなら、手に入る場所から持つてくるけど……」

首を振つて頑なに断るカミラに、オリバーは少々困惑した様子を見せた。どこからどう見ても、カミラは浄化マスクを持つていないのだ。ここ地域は瘴気が濃くないとはいっても、浄化マスクなしに行動すれば血の乾きが加速する。

「それも必要ないわ。お人よしもいいけれど、ほどほどにね。この地下には貴方以外の仲間はないのよ」

「……ごめん、知つてたんだね。君に仲間でもいるのかい？　……いや、忘れて。聞かない方がよさそうだ。まあ、でも、相方の形見を回収するだけだよ」

「ちよつとした覚悟が見え隠れしているわ。既に化け物化しているか、成りかけているのではないからさ？」

「堕鬼化には数年かかるのもいるからさ、ははつ…………はあ……」

オリバーは笑つて誤魔化そうとしたが、目の前の女性に冷ややかな視線を浴びさせられると観念する。

「サイコロを振るような行為はよしなさい。それよりも貴方、フルネームは？」

「オリバー・コリンズ」

「なら、コリンズ。地上へ行つて。私も今日中にここを引き払うから」「ええっと、あまり濃くないとはいえ、淨化マスクなしての行動は身の破滅だから気をつけてね」

「ええ、堕鬼化なんて笑いものよ。《ほんとにね》……無事に戻れるよう祈つていてるわ」

会話の途中で内なるクルスのちやちやはあつたものの、オリバーはそれじやあとと言つてカミラから離れ、カミラは手を軽く振つてオリバーを見送つた。

オリバーの姿が見えなくなると、内なるクルスはのんきな口調でカミラへ声をかける。

『わたしを倒したのに、生活は苦しくなつていく一方みたいだねー?』

(文明が発展していると予想していただけに、さみしいわね)

『悲しいとか残念とか寂寥感の思いがあるだけで、動く気もないカミラは何をするの?』

(含みのある言い方。私が身勝手なのは今更じゃない? それよりも、シルヴァの娘の存在が気がかりなのよね。彼女の力は今後、貴女の不都合にならないかしら?)

『あ、心配してくれるの? んふふー、嬉しいんだー。そうだね、大丈夫だよ。今のわたしは昔と別物。混じりあうことも同一化することもない。かつてのわたしの残滓がわたしを求めて、もう遅い。その機会はとつぐに過ぎ去つてるから』

内なるクルスの絶対の自信がカミラに伝わる。で、あるなら、カミラは内なるクルスを信頼するだけだ。

(なら、あとは実家の跡地を見るくらいかしら。後の予定はそれから

考えましょう

『はーい、じゃあ、カミラの懐かしの実家に帰宅だね』

(いえ、寄り道をしていくわ)

『あれ、何かあつたつけ?』

(迂闊にも忘れていたけれど、淨化マスクを回収するわよ。意味ない  
とはいえ、目立ちすぎるもの)

『さつきの男の人が話していたマスクを回収かー』

(そんな中古品より、もつといい品質が欲しいと思わない? )

『お? 殺し合い?』

(奪い合いのご時世らしいもの、場合によつてはね。とはいえ、一般的な吸血鬼の強さもわからないこともあつて、最悪、壊れた物を別の場所で入手になるかもね)

その時、内なるクルスが閃いた。

『あ、はいはーい! だつたら、カミラが直接動くよりもつといい方法があるよ!』

(あら、良い考えが浮かんだのね。それじゃあ、期待させて貰おうかしら)

『まつかせてー! 攻撃はできなくとも、操作や指示はできるんだから!』

そうしてカミラ達は、吸血鬼の強さの指標を測りつつ、オリバーの飼い主から物資を奪うため、行動を開始した。

オリバーは血涙を持つて横柄な吸血鬼の下へ帰還する。まずは他の者達に武器を取り上げられた。それから、横柄な吸血鬼と数少ない言葉を交わし、血涙の入った布袋を差し出す。飼い主からの労いの言葉はなく、当たり前のように血涙を持っていかれた。搾取されるいつもの日常だ。

用が済むとオリバーは歩かされ、他の奴隸達がいる地下牢へと押し込まれた。地下牢は正方形の広いフロアといった造りである。出入り口は天井より上にある一ヵ所のみ。出る時は上から落とされる折り畳み式の梯子を利用して出入りする。

オリバーはこつそり隠し持っていた血涙を仲間に渡し、決まつた順番で皆が回し飲んだ。飼い主達に知られたなら当然折檻がある。だが、こうでもしないと奴隸生活に耐えられない過酷な環境だった。

また翌日になれば、オリバーは他の吸血鬼を連れて血涙が実る血の泉の探索へ赴かなければならぬ。辿り着くつもりはさらさらないが、いずれは発見されるだろう。オリバーは地下で別れた女性が無事に逃げてくれるようとに祈つた。

一方、横柄な吸血鬼。彼はオリバーが持ってきた血涙に気分が高揚し上機嫌だった。実る血涙の在り処は、オリバーが必死に墮鬼から逃げて碌な道順を覚えていないとのことだつたが、他の奴隸達に探させればいいのだ。焦る必要もなかつた。

今日はもう休もうと、手に血涙の袋を持ち、最低限整理整頓された廃墟へ向かう

「ううん、ここんとこ枯れた血涙の泉と、碌に血涙を持つてない奴等ばかりだつたから助かつたぜ。いつも襲つて勝つ、連戦連勝なんていかないしな。ただ、ちいつとばかし3番が有能すぎる……アイツを中心奴隸共が纏まつてきてるし、勿体ねえが死んでもらわないと厄介そ

うだ

3番とはオリバーのことである。彼らにとつて弱い吸血鬼は消耗品と変わらず、ゆえに個々の名前を覚えるつもりもない。番号で十分だった。ついでに言えばオリバーは自分ら並に強いと知っている。ただ、オリバーの人の良さを利用して、仲間という鎖を繋ぎ、くびき輜くみを打つたのだ。

「最近、よりによつて、クイーン討伐で生き残った女を労働奴隸にしまつたし、体調と鬱が治つたら怖いんだよな……かと言つて、そこらにほっぽり出すのも後がこえーし。勝手に死んでくれると嬉しいんだが……グループはまだこのままだな」

労働奴隸はグループ単位で分けている。全てをまとめた場合、反乱の可能性が上がり、怖いのだ。従つて、グループ内で頭角があり、優秀すぎる者は間引いている。

そんな横柄な吸血鬼の元へ、銃剣を担いだ仲間が汗水垂らして飛び込んできた。

「おいつ、ここから逃げなきややばい！ 狂い咲く毒蝶共が攻めてきやがった！」

「……は？——はあっ!! あの化け物は滅多に棲み処を動かさないじやねーか！ 何でこの場所を襲つてくるんだよ！ ここは一時保管庫だぞ！ 何のためにここにあるヤドリギを最低限維持したと思つていやがる!!」

「んなもん奴等に聞いてくれ！」

切迫した二人を余所に、体長3メートルを超える白い胴長の化け物が大鎌を構え、奇襲を仕掛けてきた。命を刈り取る形をした刃先で二人の吸血鬼を狙う。

しかし、二人の吸血鬼は腐つた性格をしていても戦闘技術は高かつ

た。しつかりと殺意を感じ取り、凶刃を回避する。

「ちくしょう、危ねえつ！……あ、あ、つ!? こいつ、どこぞの集落を潰したバケモンじやねーか！ 次から次へと何なんだよお!!」「だから逃げる、言つただろ？ つーかりーダー、武器はどうした!!」「んなもん、メンテの得意な奴に預けちまつたよ!!」

言い争っている間にも、化け物は二撃目を上段から振り下ろす。二人の吸血鬼は互いに逆の方向へと避け、左右に分かれた。

化け物の大鎌が地面に突き刺さり、軽い地響きを起こす。小粒の石がそこらに飛び散った。引き抜く隙ができる。横柄な吸血鬼はチャンスとばかりに、化け物に背を向け走り出した。

「寝床に予備武器を隠してあつから、そいつは任せたぜえ!!」「はあああああっ!! テメエ、ふざけんなっ!!」

わざわざ危険を知らせにきた味方はリーダーらしからぬ横柄な吸血鬼に置き去りにされ、自然と化け物に狙われてしまつた。

仲間を置き去りにした横柄な吸血鬼は廊下を駆ける。数段飛ばしで上階の階段を上り、簡素に整えられた寝床へと飛び込んだ。廃材で作られた寝台の下から吸血機構のある小振りの剣と幾つかの薬品を取り出す。

「はんつ、最低限だがコイツと吸血牙装で雑魚共なら蹴散らせるか。さつきみたいなでけえ奴は無視だがな」

一旦気分が落ち着くと、今回化け物達が襲つてきしたこと、が不可解だつた。腹が減つていたのか、ただ暴れたいだけなのか判断つかないが、セーフティードの襲撃は初めてのことだ。

しかし、今は避難第一だろう。仲間は逃げるために自分を呼んだ。不安だが、本拠点目指して逃走すれば他の味方と合流できるかもしね

ない。

「来た道を戻つたところで厄介な化け物共がいるし、窓から飛び降りるのもありだな……」

横柄な吸血鬼は剣を持つて立ち上がり、窓を覗こうとして歩みが止まる。背中から衝撃がきたのだ。

横柄な吸血鬼は何が起きたのかすぐに理解した。人の腕ほどのオウガ型の模した籠手が自分の左胸から突き出ている。自身の鼓動が聞こえない。心臓が裂かれたのだと気づくと一気に体温が下がった。手から小振りな剣が滑り落ちる。

イノチの零れる感覚。横柄な吸血鬼はもう助からないと自覚する。胸から手が引き抜かれ、横柄な吸血鬼は膝から崩れ落ちた。

「（ごほつ……）おいおい、暗殺してくる個体がいるとか聞いていねーぞ……」

吐血した後、怨みがましく咳き、心臓を破壊されたことで蘇生することもなく死亡した。

カミラは膝を付いた横柄な吸血鬼を蹴りつけ、床に転がすと、頭をザクロのように踏み潰した。男の崩壊を早まり、横柄な吸血鬼は肉体が瓦解し、物だけが現場に残る。

特に何かされた訳ではないが、カミラは相手を容赦なく殺害した。手に付着した血液を啜り、口に含んで、嚥下する。

「ん、吸血鬼でも人間と味の大差はないわね。でも、そのせいで駄目。どうにも男の血は私の好みに合わないわ。若い女性か少女がいい」  
『ふえつ、味知りたくてリスク負つてまで殺したの？ 埋<sup>ロスト</sup>鬼に持つてこさせればいいのに』

「劣化したものより新鮮な血が欲しいじゃない。それに体感的にここ

の吸血鬼でもご馳走になるとわかつたのは僥倖よ」

クルスの言い分はカミラとて理解はしている。けれども、警戒されてから襲撃するつもりはなく、押しきれると判断したので自ら動いたのだ。もしも、横柄な吸血鬼が闇討ちを気づく素振りがあるのなら撤退していた。

『まー、下手にヤドリギを探すより駒使つて吸血鬼を狩つた方が安全かもね』

「それはそうと、手軽な物だけ回収してオリバーに恩売りね』

『えー？　あいつ等、役に立つかなー？』

「強さというよりは、彼の性格ね。顔は繋いであるし、人間関係の活用の時のために種を蒔いておきたいわ』

『あー、年数経ちすぎてカミラと関わり合いのあつた人が友好かどうかわからないもんね。身辺を洗うのもわたし達だと難しいし。そもそもクイーンの姿だし』

カミラはもつともだと同意した。その後、内なるクルスに堕鬼の指揮を任せ、人の怒号や悲鳴が飛び交う中、現地にて手持ちの装備を整えていった。

オリバーは天井の穴からうつすら響く殺し合いの音で瞼を開ける。刃が交じり合う剣戟や人の怒号に気づき、まどろみから覚醒した。冷たい床から飛び起きて、起きていた憂鬱そうな女性に何があつたのかと質問する。

「堕鬼が襲ってきたんじゃないの？　よくわからぬけど」

「それは不味いね……、ここでの俺達は武器がない。浄化マスクがあ

るから血の乾きから墮鬼化することはないだろうけど……うん、まではみんなを起こそう」

「…………そうだね」

憂鬱 そうな吸血鬼は氣だるそうに同調した。それから、彼女はゆっくりと、オリバーは精力的に動き、疲れて眠っている他の者達を順次起こしていく。全員が目覚めても争いの騒音は鳴り止まなかつた。オリバーは6名全員を一ヵ所へ集める。

「聞こえているだろうけど、地上では俺達を酷使させる奴等がおそらくは墮鬼に襲われてる。理由はこの際どうだつていい、今は見張りがないだろうし脱出しよう。少なくとも、今の使われて生きる生活よりはましだろ？」

「ああ、それはもちろんだ。だが、どうするんだ？」

訳知りな吸血鬼がオリバーに問う。

「俺達で足場を作る。そして彼女に梯子まで跳んでもらうんだ。悪いけど、協力してもらうよ」

オリバーに指名を受けた憂鬱 そうな女性は不満気ではあつたが、顔を縦に領いた。

梯子の位置は高く、10メートル。フロアの中央にある。壁は使えない。オリバーを含めた7名は1名が飛び、1名が初めの段となり、5人で組んだ2段目で届かせる算段だ。

憂鬱 そうな女性が勢いをつけ、一段目でレシーブされて飛び、2段目で押し出されて一番手前の梯子の手すりに届く。試みは成功し、全員が歓声に湧いた。しかし、虚しいかな、梯子の手すりが折れて、彼女は手すりごと落ちてしまう。

2段目のグループの下へ落下し、土台が崩れて地面に転がつた。憂鬱 そうな女性は静かに口を開く。「…………私が重いんじゃない」と弁明。

その後もグチグチとネガティブな発言をしていった。

元々梯子に老朽化もあり、物自体が長年手入れされていないので皆も理解している。それからも、憂鬱そうな女性が続投された。本人は不満そうだが、みんなで励まし、チャレンジさせる。けれども、手すり一つ分がどうしても届かなかつた。

全員が血涙探しで疲労した体に鞭を打つ中、地上から一つの血涙が転がり、オリバーのいる地下へと吸い込まれる。真下にいた一人の吸血鬼が危なげに血涙を受けとめた。誰かが梯子付近にいる。それに気づくと、オリバー達は息を潜めた。

血涙を投げ入れたと思われる主は梯子を蹴つて展開させると、手紙を一つ置き、重しを乗せて立ち去る。

オリバー達は降つて湧いた幸運に困惑しつつも、オリバーが先行して地上を確認しに行つた。梯子を登りきつた先には誰もおらず、手紙だけがあつた。

オリバーはその手紙を取り、一文を読む。

——地下にある血の泉はご自由にどうぞ。数名分は残つているわ。

オリバーは手紙の内容で梯子を降ろしたのは誰なのか察しがついた。地下にある血の泉に血涙が残つてることも。せめて一言お礼を言いたかつたが、本人がいないのでどうしようもない。しめやかな気分に浸つていると、離れた場所から堕鬼の歓喜が響いてきた。地上にいた吸血鬼達が負けたのだろう。

オリバーは次に会つた時に感謝を伝えると心に決め、地下にいる仲間へ脱出を呼び掛けた。

カミラ達は横柄な吸血鬼達から強奪した品々を持ち、ヤドリギや血涙の泉がマッピングされた地図を片手にかつての実家を目指す。場所は遠く現地点から離れているので、まずは街を抜ける必要があった。

争いの現場から離れた今、急ぐ理由もなく、堕鬼の気配が進路上にいるなら指示を飛ばして移動をさせる。目立った障害がないと思われたが、内なるクルスは妙な気配を感じした。

『うーん？ アレのにおいがする。けど、すごく弱っちい感じ。どうするー？』

（向こうから何かしらのアクションをしてこない限り放置。藪をつつかなくともいいわよ）

『でも、進路的にぶつかるよ？』

（なら、一度接触してみましょ。これで大丈夫なら、人の集まる場所へ行き易くなるから）

『じゃあ、わたし、じつとしてるね』

（ええ、お願ひ）

内なるクルスはサーチを中断し、大人しくする。カミラは歩調をゆるめ、手に入れたばかりの無骨な造り女王討伐隊の剣の感触を確かめた。使用感はあるが、しつかり手入れされている。

しばし舗装のはげた道を進み、横から出てきた二人とついに出会った。

カミラは目を布で覆っているおり詳細がわからない。なので、内なるクルスより教えてもらう。相手は少女と子供の二人で、少女は姉、子供は弟といつていい外見だそうだ。内なるクルスが言うアレのにおいは弟の方である。

弟はニコラ、姉はミアという。金髪の姉弟だ。

ミアとニコラの方もカミラの存在に気づき、足を止めてカミラをじつと見つめる。顔半分を覆う浄化マスクはいいとして、目元を布で覆う女性は珍しい。特にこの殺伐としたご時世で目が見えないというのは致命的だといえる。ましてやマスクをしているのだ、鼻の利きも悪いだろう。

なにより目を引いたのが、桃太郎のごとく腰に結わえた布袋であった。透けて見える訳ではないが、膨らんだ布袋が何かしらあるのだと確信できる。

ミアは困っていた、血涙の残りに。日々弱っていくニコラのために幾らあつても足りないのだ。そして、目の不自由な女性が持つのは近接武器で、自身が扱う銃剣ブローディアであれば優位に戦える。言い方は悪いが、取引して世話になつた吸血鬼を見捨てたこともある。ミアはニコラのためならば幾らでも人の道を踏み外せた。

ニコラは困った顔を見せるが、ミアは止まらない。

カミラはまっすぐ進み、二人の姉弟の前をゆっくりと横切る。ミアはニコラを避難させ、カミラから距離を置いて後を追う。カミラの足の速度は常人より遅い、詰め過ぎないように気をつける。ミアはこの場にいるのが二人だけだと確信した時、カミラの背中へ静かに銃口を向けた。狙いは心臓だ。

ミアは冥血を消費し、血液を弾丸にして射出する。凝縮された血が弾丸となつて回転し、カミラへ襲い掛かかる。

カミラはミアの攻撃に反応。手荷物を捨て、振り返り、剣で弾き軌道を反らした。弾丸が建物の壁に衝突し、煙が立つ。

(いい射撃手ね、完全に私の心臓を捉えていたわ。ところで、殺意があるのは姉の方なのだけれど?)

『うん、弟は困るばかりで気づいてないっぽい。でも、あいつ吸血鬼じやないよ。姉は普通なのにね』

(あら、子供の姿は擬態? 少女が精神支配を受けている可能性はあるかしら?)

『特殊能力が強いパターンとかあるかもだけど、存在がほんと弱いんだよ。たぶん、大人の人間にも負ける程度』

（で、あるなら、姉の方を捕まえてみましようか。糸があれば助けに、ただの消耗品であれば脱兎のごとく逃げるはズよ）

『いいんじゃない？ どう転がるかな』

日常とは違い、殺し合いの中ゆえに高速で脳内会話を済ませる。力ミラの体勢は最初に弾丸を弾いたままだ。

一方で、ミアは危機感を持つ。必殺の弾丸は剣技にて対応された。今まで倒してきた吸血鬼とは毛並みが違う。相手の間合いに入つてはならないのだと理解した。

ミアに距離の優位はあるが、銃剣ブローディアはマシンガンのように連射に優れた銃器ではない。猟銃程度の間がある。彼女は先ほどまでは倒す自信があつたのに、途端に余裕がなくなつた。

ミアはより多くの冥血を消費し、銃剣による強力な連續射撃を繰り出す。ただ撃つより血の消耗の激しい技だが、近づかれるよりは、と考えたのだ。

カミラは真っ向から対抗、剣豪さながら斬り捨て突撃。スピードのトップギアが速い。爆発する速度にミアは悲鳴をあげた。

「眼帯は飾りつて訳!? こんなのは初見殺しじやないつ!!」

バックステップをしながら射撃。命中精度は落ちるものなの、それでも弾丸はカミラの体を捉えていた。けれど、ジグザグに回避、もしくは切り捨てられる。ミアは鍊血で地雷を設置したのだが、カミラは踏むことはない。僅差射撃でも射線を読まれて駄目だった。

ミアは今後の継続戦闘を捨て置き、全力の攻撃に賭ける。されど、もう間もなくカミラの攻撃範囲になる。冥血も空となつた。ミアは射撃からブラツドヴェイルの展開へ切り替える。

「これならどうつ!?」

背中より鋼鉄の蠍の尾を形成し、尾を長く伸ばす。ステインガー型のブラツドヴェイルだ。変幻自在に軌道が変わる尾でカミラの機動力を奪うべく足を狙う。たとえ突きを外したとしても、足に絡みつかせることができる。

カミラはミアから突き出された尾を女王討伐隊の剣で地面に叩きつけ、先端を踏んだ。次に剣を地面に捨て、両手でブラツドヴェイルの尾を掴み、それに繋がるミアを力づくで上空へ持ち上げる。

「うつそおつ!?」

まさかのパワーファイトにミアは泡を食う。

ミアは180度の半円を描く中、地面への衝突を避けるためブラツドヴェイルを脱ぎ捨てる。だが、対応が早く、カミラはすでにブラツドヴェイルから手を離しており、すかさず剣を拾い直していた。カミラは投げられた状態のミアとの距離を詰め、自由落下する片足を掴み、強制的に地面へと振り下ろす。

頑丈な吸血鬼とはいえ、ミアは容赦なく頭ごと地面に叩きつけられた。一息、前後不覚となり、頭部から出血する。

立ち上がりなれば殺される。けれど、上体を起こしたもののが体勢を立て直すほどの力は入らず、吐き気がもようされた。そこへ、銃剣を拾い上げたカミラがミアの背中を蹴り飛ばし、再び地面に這い蹲らせる。

うつ伏せに倒れたミアを横に転がし、仰向けにして腕を踏む。それから女王討伐隊の剣を心臓付近へと突き立てた。詰みである。左胸に刃物がわずかに刺さる感触を感じたミアは、目を閉じ、せめてニコラが逃げ出してくれるよう祈った。

けれども、いつまでもトドメがこない。ミアは薄目を開ける。カミラとて、今現在殺す気はないのだから絶命させはしない。カミラはミアを見下ろし、顔を固定したまま隙を窺う弟に銃剣の銃口を向けた。冥血は消費できないのでハツタリである。

「そこにいるのでしょうか？ 姉を殺されたくないからではらつしゃい」

「えつ、待つて！？ こつちに来ちや駄目え！！」

『あー、これ悪役だ…………お？』

姉の心臓に剣を突き立てられる寸前である。どう見てもカミラが優位だ。ニコラは手に持った石を捨てて大人しく姿を現す。

「お願ひ！ 僕ができることなら何でもするから、だからミアを開放して下さい！」

「話が早くて助かるわ。開放は君次第よ。それで、君つて何なのかな？ 普通の吸血鬼とは違った存在に感じるのだけれど？」

「それは、ミアより早く目覚めたからだと思う……」

「賢い子供ね。でも、口舌戦をするつもりはないの」

カミラはそう言つて、ミアの胸に突き立てた刃をわずかに埋める。ミアは胸から血が滲み、痛みで呻いた。

ニコラは迷う、男の約束だからだ。だが、今まさに世界よりも大切な姉が死の目前まで迫っていた。そうでなくとも、弟を想い、姉が自ら死ぬ可能性もあった。

ついでに、内なるクルスが何か気づいたことがあつたようで、カミラへ耳打ちするようにして伝える。

「ねえ、君に魂がないのはどういうことなの？ 誤魔化しても無駄よ。オカルトな話、私、そういうものを知覚できるの」

もちろん嘘である。彼らが納得しやすいよう言葉を選んだだけだ。

信じた訳ではないが寝耳に水といったように、ミアがそんなことはないニコラは本物だよね、とニコラに目で訴え、同意を求めた。だけれど、ニコラは姉の真摯な目を直視することができない。秘密にする

ことはできても、絶対的に信頼しているという、姉の問いかけには耐えられなかつた。

ニコラに視線を逸らされたミアは呆けた。なぜか弟は肯定してくれず、寝言を言う女の言葉を否定できない。言われたから反応し、ニコラへ訴えかけただけなのに、否定が返ってくるとは思わなかつた。

「今のやり取りで物語つたわね。観念して、君の知っていることを洗いざらい話してくれるでしょう？」

短い沈黙の中、ニコラは折れ、首を縦に傾いた。弱いもの虐めである。人の弱みに付け込んで獲物を喰らわんとする捕食者に、ニコラは強い苦手意識を持った。

敵ならば子供でも容赦しないあたり、カミラは破壊の権化に好かれた人物である。

カミラは呆けたままのミアから、身包み全て剥がして薄着だけにする。正気に戻ったミアは抵抗したが、あれよあれよと脱がしていくた。

流石に浄化マスクを取り上げはしなかつたが、多感な年頃の少女を薄布一枚で野外露出させる行為は鬼畜の所業だろう。

もちろんニコラも薄着である。カミラに言われ、自分で脱いだのだ。隙ができるのを嫌つたカミラが、ミアの左胸に銃剣を突き付けつつニコラを脅したのだから、ニコラは唯々諾々と従うしかなかつた。

その後、ミアとニコラがカミラの前を歩く。もしも今、堕鬼に襲われでもすれば、武器も冥血のストックもないミアは柔肌ごと蹂躪されだらう。カミラとしては、隠れた場所で話すことができればいいので、適当な建屋へ誘導する。中へ进み、3人+1はひとつつの部屋に腰を落ち着けた。

カミラはミアとニコラに名前など当たり障りのないことを喋らせた後、ニコラへの尋問に入る。すっかりカミラが苦手になつたニコラは借りて来た猫のように大人しく従順だつた。

「君、姉より早く目覚めたつて言つていたけれど、どの程度早かつたの？」

「2年くらい前です」

ミアはそれも聞いていないといつた様子である。ニコラはどうとでも捉えられるような話で誤魔化していたので罪悪感に身を削られた。

「君に魂がない理由つて何かしら？」

「それは今の僕が分身で、本物の僕は別な場所にいるからだと思う」

「姉に秘密にした理由は？」

「きっと正直に話してしまえば、ミアはぼくを探しにくるんだと思ったんです。でも、ぼくはミアと同じ時間を生きられないから……」

それからニコラは事の始まりについて語る。けれども、まずは前提からだ。

世界の人々を困らす悪い奴をジャックという人と仲間達がやつづけた。だけど、悪い奴を倒せるだけでこの世からいなくなりはしなかつた。何度も倒しても蘇る。

そこで、困ったジャック達は悪い奴を細かく分け、“神骸”という名で持つて封印した。唯一の方法だそうだ。けれど、封印には人柱が必要であり、悪い奴をその身に封じ込めなければならぬ。封じる人を“繼承者”といい、ニコラはそれに志願した。ミアが生きる世界がなくなるのは困ると思つたからだ。

そうして、本物のニコラは封印された。あらゆる情報が遮断された場所で。今ここにいる分身は繼承者となつた力で発現させたものである。しかし、本物から離れた現在では人柱となつたニコラがどうしているかわからぬそうだ。

壮大な話にミアは言葉がでない。一方で、カミラは別のことを考えていた。

「結構な話ね。けれど、まだ足りない。魂がないのもあるけど、君の有り様が希薄なの。弱いのよ。その隔絶された地からよく、姉の元に辿りつけたものだわ。誰かの手でも借りたの？」

「分身は作っちゃ駄目だつて言われてて、一人でミアの所まで來たんです。あの時は繼承者の力があつたから何とか辿り着けたけど、今は毎日を生きる力しかないです」

「力の衰退から思うに。君は命を繋ぐのに必要な補給ができるていねいのね。人間なら食事を、吸血鬼なら血液を、君は何かしらね？」

「少しづつ力を使つていつかはいなくなる。そういう風にできてるか

ら必要な食べ物とかないんです……」

「そう、雪みたいね、君」

続けて、カミラはニコラに「血涙は意味あるの?」と問い、「本當は必要ないんだ」と顔を伏せて返された。そして、「だ、そうよ」とミアに話題を振れば、「何も知らなかつた……」と内罰的に自信を攻めるミアの姿が見て取れる。その苦悩する様は何も知らなかつた人そのものだ。

重い空気になるが、カミラは気にしない。身内でもなければ、赤の他人。至つて冷静であつた。

ミアの取り巻く環境は見えない事情が積み重なり、面倒なことになつているとカミラは思う。何せミアはニコラが人柱に志願してまで守りたかつた人物だ。政治も絡んでくるかもしれない。まさか施設で保護され眠り続けていたミアを放置することなどないだろう、人道面で悪意がでてくる。

話に聞くジャックがカミラの知る人物と合致するかはわからないが、総督府の人物であるなら、国内における最高機関だ。本人に告知せず、足長おじさんのように支援し、相応の待遇を施せるように思える。だがしかし、ニコラという継承者が守りたかつた人物はここにいて、日々の生活に苦しんでいるという。

家族が会いに来たならミア何が何でも抜け出すのはわかるが、総督府の管理がおざなりすぎないだろうか。一方でニコラはおそらく深く物事を考えていない。子供だから当たり前だが。姉が淋しがり屋だから会いにきた。それだけだ。当時、その後の展開など予測もしてないはずだ。

今のニコラが現状どう思つているのか知らないが、満足感は得ているのだろう。姉に世話を焼いてもらつていることに。姉もまた、ニコラとの暮らしが維持できれば求めるものは少ないとわかる。

心中、思うことはある。けれど、カミラは部外者であり、彼らの事情に口を挟んでも得することはない。言葉を飲み込んだ。

「なら、この話はお終い。最後に一つ聞くわ。この部屋に私達3人以外いないかしら？」

「あつ、えつと、いないと思います」

唐突な質問をぶつけられたニコラは面を食らう。

「貴女は？」

「いないと思うけど……墮鬼でも潜んでるの？」

「二人が見えないなら私の気のせいよ。音に敏感なの」

マイペースに喋り、不意に内なるクルスについて問うてみた。が、ミアとニコラは不安げに周囲に気を配るばかりでカミラを気にしない。

息を潜めていたクルスが自由に動いているものの、何ら指摘もなかつた。で、あるなら彼らに聞くことはないだろう。

「そして、もういいわ。貴方達を開放します。武器も返すから好きにしなさい」

カミラは銃剣ブローディアをその場に刺し、腰に下げた袋から血涙を一つ取り出す。「それから」と言つて血涙の詰まつた袋をミアに投げ渡した。

「これが欲しかつたのでしよう？ 持つていきなさい」

用は済んだカミラはさようならと言つてミア達に背を向けた。カミラの足音が遠のく中、ミアは袋を開けて中を覗く。そこには十分な血涙があつた。二人で分け合つても1年以上持つだけの量だ。先ほどから容赦のない対応をしていたこともあり、冷酷な人物だと印象を受けていただけに目を疑う。

手痛い仕打ちを受けたが、親切も受けた。ミアはお礼を伝えようと

顔を上げ、視線でカミラを追いかけるも、既に退室しており、二人の前から立ち去った後だつた。

早々にミア達の前から早々に姿を消したカミラは内なるクルスと会話する。

『血涙、一つで良かつたの?』

(私達にはそれほど必要なものでもないもの)

『そう?』

何か勿体なーいと呟くクルス。

(それはそーと、移動している間に棺の気配を忘れたりしないでしょ  
うね?)

『うん、あの子のおかげで棺の場所をちゃんと記憶できたよ』

カミラはニコラと喋りつつも、内なるクルスへニコラと同様のものを特定できるか頼んでいた。結果として、分身ニコラより強い存在を感じできてしまう。これは同じ存在ゆえにできた芸当だつた。

(移動している神骸が2つに、一定の場所から動かない神骸が6つ。ヤドリギや血の泉、霧の監獄に神骸と継承者の気配有りと。対処するには何とも面倒ね)

だが、優先は無き実家に立ち寄ることだ。大崩壊が起こる前は水辺の付近に建つ、景観の素晴らしい邸宅であつた場所である。そこは大崩壊の影響で海が干上がり、巨大な海溝を見る場所でもある。

今は厄介ごとを棚上げし、カミラ達は故郷へと歩みを進めた。

街を抜け、荒野を過ぎ、ようやく海の街へと到着したカミラ達。かつての海辺は剥き出しになつた岩や窪みだけが形を残していた。

カミラは自身の欠落した記憶を元に、海辺を一望できる高台へと赴く。

『んくくく、到・着！　でも、何もないね。時間が経ちすぎて風化しちゃつた？』

カミラが住んでいた邸宅は瓦礫や残骸ばかりが散乱し、代々続く栄光は朽ち落ちたと言わんばかりだ。

「クイーン討伐時代からよ。バケモノの出現と大崩壊が続いた結果だわ。吸血鬼として目覚めて、ここに訪れた時にはこんなものだつたわね」

『あつ……ごめんなさい』

「謝つてくれるのね。いいわよ、許します。ただ、間違えないで欲しいのは、クルスに謝罪をさせるために訪れた訳ではないってこと。ようやくあの生活にも一息ついたもの、生まれ育つた故郷を目にしたかったの」

それからカミラは内なるクルスを元氣付けた後、思い出の残滓を見て回る。干からびた水遊び場に、無人の守衛所。どれも形を無くしており、指摘を受けなければ判別つかぬほどだ。

さみしさとある種の満足が満たされる中、枯れた庭園へ足を伸ばす。すると、地面に突き刺さったマチエットを発見した。不自然にも、瓦礫を集め、それを台座として支えにした刺さり方だ。内なるクルスは斬新なオブジェクトだと言うが、カミラの記憶にない。趣味の悪いオブジェクトは名前を忘れてしまつた家族の好みに

当て嵌まらなかつた。

突き刺さつたマチエットの前に立つて見れば、剣は手入れがされていなかつたことで腐食し、破損も目立つた。とてもじやないが振り回すのに適さない品質である。だが、そのマチエットの柄には紐で吊るされた半透明のポリ袋がぶら下がつており、手紙が入つていた。

カミラは戸に注意しながらポリ袋を開く。中に入つてゐる防水を施された手紙の包装を解いて、ざらついた紙質を手に持つた。中身を確認してみれば、達筆な文字が書かれてある。

——〇〇〇〇〇、元氣かい？　あんたがクイーンと相打ちになつたと知らせを受けた時は悲しくなつたもんだよ。あんたとは関わり合ひが薄くとも、母親とは仲が良かつたからね。寂しくなるもんさ。

——だというのになんで、あんた宛に手紙をしたためたか不思議かい？　そりや、あんたの性格の悪さを知つてゐるからね。殺される終わるとは想像がつかないもんだよ。年寄りの勘つて言うのかね？

当たつていたら、あたしも冴えたもんだ。

——前置きが長くなつた。あんたの遺品はあたしらが受け取つた。今となつてはあたししか生きてないけどね。ともかく、あんたが生前残した遺品はあんたの母親が好きだつた場所に置いといたよ。私たちが管理していた場所だ。クラゲの思い出と言えばわかるかい？

それから、報奨金も出たもんで、あんたの多少は荷物を増やしていました。その場所だつて、もうあたししか知らないから、少しは安心して足を伸ばしな。

——これで最後になるが、あんたがこの手紙を見つけた時にはあたしは生きていなかつたんだろうね。少しばかり生きるのに疲れちまつた。子供を二人拾つたんだけれど、その子達もいづれあたしから巣立つちまうしね。二人の姉弟でさ、ミア・カルンシュタインとニコラ・カルンシュタインっていうんだ。生きる術を教えたが、その分扱使つてやつたよ。

もし、あんたが良ければ、その二人の姉弟を気に掛けてくれると嬉しいよ。

しい。あんたは母親と間逆で一人だつて生きていけるけど、あの子達はまだまだひよつこなんでね。なあに、ちよこつとだけ親切をしてくればいいさ。頼んだよ。

——カーミラより。

追伸で二人の姉弟の特徴が書かれていた。

『この手紙、カミラ宛っぽいね』

「そうね、貴女を殺して死んだとなると私くらいしかいないもの。それと、一番に気になるのが○○○○○つて名前ね。私のことだと思うけれど、クルスは覚えある?」

『ないかなー。カミラがわたしと殺し合つた時に、一緒にいる味方に呼ばれてた呼び名が後輩ちやんだつたり、新人だつたりだもん。ピンとこないよ』

「そう……一度は結論が出ていたものね、愚問だつたわ。んう……、遺品を受け取りに行きましようか」

『素直に受け取っちゃうんだね。名前、変えちゃつたりする?』

「改名はしないわ。昔の名前だなんて、トラブルの元でしかないもの。私が知りたいのはお母様との思い出よ。大好きな人の名前を欠落させたままなのは寂しいじやない」

『お母さんつ子だもんね』

「もちろんよ』

カミラは誇らしげに答えた。奥さない愛情表現に、内なるクルスは嫉妬と羨望の念を故人の母に送る。いつものことだ。

そして、手紙だけ回収したカミラは実家の跡地を出発する。滲む寂寥感から背中を引かれるが、次の目的地へ足を運んだ。

来た道を引き返して高台を下り、瓦礫と舗装が捲れた道を歩き、干乾びた海辺に戻ってきた。海辺に面した建物は風化しているものの、かろうじて読める程度の看板はある。内なるクルスは看板の文字を言葉にする。

### 『水族館?』

「ええ、今では海が干上がつて鑑賞する生き物もいない吹き抜けばかりの建物だけれどね」

### 『お宝探しだね!』

内なるクルスはちよつとした遊びに目を輝かせる。流石のクルスも未知な物になると早急の発見は難しい。強い存在を放つものならまだしも、無機物だ。

館内に入ると、中は無人であつた。ガラスが散乱しているが、荒らされた形跡もなく、埃は少ない。吹き抜けにより埃が積もり難いのだろう。また、電気がなくても明るい。

「ここも懐かしいわね、ゆっくり探索しましようか」

カミラは目的の物に思い当たる場所があり、近道ができるがクルスが楽しみにしているので黙つておく。中は広いが海に面した水族館と変わらず、カミラが思い出を語りながら施設内を順次に巡つていつた。

その思い出語りの中、内なるクルス気になつたことを呟く。

『普通にスルーしてたけど、ミアとニコラつて、少し前に会つた姉弟のことだよね』

「あら、あの姉弟の事が気になるの?」

『気になるつていうか、その子達のいる方角がおおよそわかるから、どうするかなつて思つて』

「恐らく嫌われているでしようし、私達からはアクション起こさないわよ」

姉弟間の問題もある。彼らの関係を乱れさせたカミラとしては手を出すつもりはなかつた。それに、今は大事な時期だろう。部外者が

介入して負のイメージが増えても手間だ。

クルスはカミラが気にしないというならば、姉弟について興味を失つた。

『こここの水族館、結構歩くね。B4Fって普通なの？』

「普通かどうかは知らないけれど、この地の観光名所ね。残念なことに、今となつては断崖絶壁に建つ建物。経年劣化も相まって、危険を冒してまで物取りをする輩はいないようね」

『ほえ、職員用エレベーター？』

「ええ、ここから更に地下へ下れるのよ。個人の発信力もあつて知られているけれど、大々的に公表をしていない場所ね」

カミラは手をオウガ型に変質させると、エレベーターの扉をこじ開ける。奥深くにうつすらとした明かりが差しいていた。それから、暗い闇へと飛び降りる。異形と化した片手で壁を引っかき続け、負荷の掛かった手の先は赤熱し火花が飛び散る中、落下の勢いを減速させた。

エレベーターの底には人が乗り降りするかご室が瓦礫と共に埋まっている。深さにして大フロア3階分。カミラはかご室の上に降り立つ前に、横にある開いた乗り場扉に飛び移った。

『人が入つた形跡があるね。ほんとは梯子で降りるのかな？』

「それ、上り下りだけでも相当手間よ。どの程度の荷物を持ち込んだのか判断つかないけれど、運搬者には頭が下がる思いね」

カミラ達は周囲に注意しながら先へ進んだ。内装は鑑賞よりも休暇で過ごす、をモチーフにしたフロアが幾つも見受けられる。

探索を進めていくと、幾つものトランクケースが積まれた場所を発見した。トランクを開け、中身を確認する。中には以前カミラが所有していた品々があつた。見慣れない衣装もある。察するにカーミラの好意だろう。

「私の日記もあるわね」

辞書のような厚みがある。それを慣れた手つきで日記を捲った。いつか記憶を失うのだと危惧し、重要なことからくだらないことまで日記に記していた。一度読み終えると、再度始めから読み直し、時間を忘れて何度も熟読する。その間、クルスは大人しくしていた。ちなみにカーミラはカミラの親戚だと判明した。

カミラは大事な記憶を取り戻す。しかし、指を硬化させると、指を鳴らして火花を飛ばし、日記に着火した。紙媒体の記録用紙から煙が上がり、徐々に激しさが増していく。

『うええええええっ!? すつごく燃えてるんだけど、大事な物じやなかつたの!!?』

「もう一度忘却でもしたならそれまでよ。この日記、少しばかり重くてね」

『わたし가殺した人、たくさんいたから……?』

「なんにせよ、大崩壊の一件で人の怨みを買い過ぎていて、贖罪する気なんてさらさらないもの。都合の悪い人間関係はここでリセットするわ」

『うん……でも、極端な事をしなくてもいいからね？ カミラの心が傷つくのは好きじゃないから……』

心配するクルスを前に、カミラが手についていた日記は燃え尽き塵と化す。続けて、似た作業を繰り返し、他の情報媒体も順次に燃やしていく。少しづつトランクケースにあつた物が減り、比例して、燃え滓が積もっていく。残つたのは家族の写真と少ない荷物ばかりだ。

「ふう、これでケース一つだけ持つて、何処へなりに逃げられるわ」

『……あの、それでこれからどうするの？ 今から予定を決めるんだよね？』

「継承者とやらがいる棺を見に行つてみましようか。そう遠くなかったわよね」

『あ、観光気分だ。割り切りがすごいね。アレとあいつ等なんて放置してて良くない?』

「好奇心は猫をも殺すというけれど、未知をそのままにするのも怖いものよ。気がかりもあることだしね」

『うん、じゃあ、海の中かなあ。距離的に深い場所になると思う』  
「ありがとう。それと、今日はここで一泊ね。都合よく水の湧いている場所もあるし、身を清めたいわ。洗濯して、身なり整えて、それから向かいましょ』

『なら、別の服に着替えようよ』

「…………えつ?』

カミラは絶句し、目を瞬かせる。内なるクルスはカミラの驚き具合に首を傾げた。

『今この服だつて、特別な能力とか防護機能がある訳じゃないし、着替えても良くない?』

「……待ちなさい。私、大きな子供がいる年齢よ?』

『歳を取ることないのに何か変?』

内なるクルスは箱入り娘である。カミラやシルヴァの娘から得た知識と、カミラが築いてきた人間関係とその生活くらいだ。また、トルンケースに入っている衣装はどれも丈の短いスカートタイプ。自分の母親がミニスカートや同程度のワンピースを着たと想像するなら、そのキツさが理解できるものだが、母親という概念を感覚でわからない内なるクルスはカミラの感性を理解できなかつた。

子供のような純粋な想いでカミラに懇願する。

「……私の気持ち的に難儀なことなのよ』

『え、見たいのにー。わたし、我慢してカミラの我儘に付き合つてる

のに、わたしの我儘聞いてくれないんだ～？』

こうなると、カミラにとつて辛い。一つの体に二つの心だ。パーソナルスペースなんてあつたものじやない。四六時中、頭の中でリフレインする子供に似た癪癩はカミラの精神を非常に摩耗させる。この先、敵地に侵入するのにここで消耗したくなかった。

トランクケースにある衣装類が目に映る。

「…………断腸の思いであるけれど……まず、これらの衣類を洗つて……乾かして……それから決めましょう……」

カミラは苦渋の決断で幾つもの衣装を手に取った。内なるクルスは喜悦して喜ぶ。カミラは鈍重な足を動かし、この階にある湧き水場へ向かう。

かくして、現在の服を脱ぎ、服装を一新することとなつた。

クイーンがカミラに寄生し“クルス”と名前を騙つた時期よりずっと前、物心ついた幼いカミラは物静かな子供であった。また、有数の名家の下に生まれ、上にはそれぞれ年の離れた二人の兄もいた。

その家に初めて生まれた女の子ということもあって、母親はカミラに付きつ切りだ。その母親に人を惹きつける魅力があり、人に好かれやすいこともあって、カミラは人の縁にも生活にも何不自由することはなかつた。

情操教育の一環で絵本を多く与えられたりしたが、母親の横で絵本を眺めるカミラの心情は特殊であつた。

(この人魚さん、仲良くもなく、守つてくれるることもないのに、何で男の人のためにこんなに泣きたくなることを我慢できるの？　何で誰の目のないところに連れていつて看病しなかつたの？)

所詮は身内でない者。自分の行いが知られてないというなら死んでしまつても誰も咎めないので。男の子が手に入らないなら、どうなるうと構わないのでないか。と利己主義であり、共感性が乏しく、罪悪感が芽生え難い歪な精神だった。

そのことを端的に母親へ伝え、母親は驚き、カミラを優しく諭す。カミラは母親に遠回しに叱られるのだと気づくと悪い考えなのだと学び、以降、悪いことだと思われる行動や思想に注意していった。善悪の区別をつけることで、身に降りかかるだろう障害を回避しようとしたのだ。

母親が真つ当な人物で育成環境も良いこともあり、カミラは愛情というものが頭で理解できるようになる。すると、乏しい感覺でも肌で人のぬくもりを感じるようになつた。

心に異常性があるものの、それ以外の感性はゆつくりではあるが豊

かに育つていく。喜んで、怒って、泣いて、笑つて。けれど他者を傷つける罪悪感は薄くて。カミラが感情ある大人として育つたのは、ひとえに母親のおかげだろう。カミラが母親を大好きとマザーコンプレックスを憚らないのはそういうことだつた。

さて、視点が自身の内面を隠しているカミラから親戚であるカーミラへ移る。

人の縁が多ければ冠婚葬祭の機会だつて多い。ましてやカミラは名家の生まれだ。カミラは親に連れられ、一族の集まりにもよく参加したものである。

その一族の集まりで、カーミラは子供カミラに気を掛けた。子供カミラの母親をカーミラも気に入っていたからだ。子供カミラの上の兄だつて、内面母親に似て、優しく穏和で爽やかな感じの良い少年達である。あくどい小僧の父親に顔は似てしまつたが、好ましく思つていた。

カーミラは子供カミラを紹介されると、きつちりとした礼儀正しい子というイメージを受けた。ただ、母親のような無条件で人を惹きつける魅力はないよう見受けられる。母親とそつくりな女の子だが、全てが生き写しになるのではないのだろう。

それでも、子供カミラが子供に交じつて遊んでいる姿を見れば何か面白い発見があるかもしれない、カーミラは子供カミラの様子を興味本位で様子を窺つた。

「うーん。しかし、どうにも家族と性格が似なかつたようだ。厭味つたらしいあの父親とも違う……落ち着いてはいるが、人見知りしないし、主張の強い子ということでいいのかねえ？」

だが、何か違和感がある。テーブルゲームの遊びに夢中になつてゐる子供達を眺めていてもわからず、カーミラはその場を離れた。が、その一瞬、背中に探るような視線を感じ、すぐさま子供達の輪に再び顔を向ける。けれど、様子は何ら変わつてはいなかつた。カーミラは疑念を胸に、子供達を眺める行為をやめてその場から離れた。

子供カミラが学園へ通うようになつた頃、カーミラは子供カミラの母親が心労で倒れたと聞いて、家へお見舞いに行つた。噂では、若い男の使用人に手籠めにされそうになつたのだとか。真偽のほどは定かでないが、若い男ともども古くから仕える使用人が目減りしていた。

普通ならばそこで話は終わりである。けれども、姿を隠したという噂の若い男が報復するのではないかと心配し、お節介を焼いた。辿り着いた結果として、男と手引きした者は自殺していた。父親が追い詰めたのだとわかる。あれはそういう男だ。

特に自殺した男の状態は酷いものだ。頭部や首に大怪我の跡があり、両眼を失い、生殖器もなくし、足の健を切られて真つ当な生活できなかつたようだ。病院に運ばれた時点で生かさず殺さずの八つ裂きだと聞いた。同時に、子供カミラが緊急入院したのも気になる。

子供カミラの母親が襲われた理由は復讐と思われた。当事者の身辺を洗うと、若い頃の父親がやらかした被害者だ。復讐者達は幸せな家庭を破壊しようとしたのだろう。

それから、子供カミラの母親が襲われたシチュエーションも予想がついた。当日、兄や父親は特別な用事で外にでていたそうだ。家の中は、子供カミラと母親の二人。加えて、普段より数の少ない使用人。家の中にある監視カメラの電源は落とされていた。手引きした女中が人を遠ざけ、若い男が子供カミラの母親を襲つたのだ。

ただ、どうやつて助かつたのか。カーミラは脳裏に嫌な考えが過ぎる。「まさかねえ……」と呟き、言葉が静寂に呑まれると他の使用人がどうにかしたのだと聞かせ、もう終わつた事件として全てに蓋をした。

とある親族の集まりで、カーミラは集まりに来ていた子供カミラを散策に連れ出し、話をする。まず、何てことのない雑談から始まり、聞きたいことへとシフトしていく。

「怪我、良くなつたんだね。入院してたそしだが、何かあつたのかい？」

「あるにはありますが、痛い時のことと思い出したくもありません」「ああ、悪かつたね。他に聞かせて欲しいんだが、○○○○○の家、ある時期を境に使用人がめつきり見なくなつたんだが、何かあつたのかい？」

「どうでしよう？　お父様がお決めになつてることなので、お父様にお聞きなさればわかると思います」

「あんたが思つたことでいいさ」

「お仕事大変ですね。とかでしようか」

「どう大変だと思うんだい？」

「そのままの意味です。お父様に振り回されて大変そうですね、と」「その父親だが、あんたの上二人の兄は年頃からか父親に反発しているね。反抗期なんだろうが、○○○○○は自分の父親のことをどう思つて いるんだい？」

「お母様を好いて いる方ですね」

「それだけじやないだろう。他に父親が好きだとか、嫌いだとかはな いのかい？」

「お母様を粗雑に扱わなければ、思うことはないです」

「なら、兄達はどうだい？」

「お母様を好いて いる方ですね」

「口ボツトのような返答を望んで いるわけじやないんだけどねえ」

「お母様を困らせなければ、よろしいと思 いますわ」

笑顔で返される。

「言葉を変えただけで意味は同じだよ……」

家族の男共には興味がなさそつたが、他にも同様の質問を繰り返すと、家の使用人や友達に教師、それらにはある程度興味があるのだと判明した。とはいへ、この子の関心は母親中心である。

会話は続き、母親が手籠めにされそうになつた件は子供カミラがらふらと避け、遂にわからなかつた。子供に対して、強く迫るわけに

もいかない。一応、子供カミラが母親が幸せであればそれでいいと極論じみたものがうつすらと見え隠れしていたのは収穫だろうか。

また、一人つきりで話してようやく違和感もわかつた。この子の母親には失礼だが、この子はどこか人形染みていた。意思ある人形が子供の真似をしようとしている。そこに違和感を感じたのだろう。それがわかると、胸の引っ掛けりが解消された。

（あの母親が付きつ切りで面倒を見ているんだ。危うさはあるが、悪いようにはならないだろう）

母親を無理やり物にした大虚け者おおうつけものの父親に傾倒しているなら不味いが、その逆だ。

カーミラは満足した。もう話をすることがないと、子供カミラとの会話を適当なところで切り上げる。散策は終わりである。帰りがけに子供カミラから家の電話番号をねだられたので、メモ用紙に控えて渡し、解散した。

しかし、そこからカーミラの苦労の連続であった。運命の分岐点とでも言えばいいだろうか。何か困ったことがある度に子供カミラから連絡がくる。母親のことだと、母親のことだと、母親のことだと。甘い蜜には虫が寄る、カーミラはその駆除をお願いされた。

父親か兄に、使用人に頼れとも思つたが、過激な父親だと被害を拡大させ、兄らは正義感ゆえに汚れ仕事を嫌う。使用人ではどうにもならないこともあります、子供カミラが望むのは内々の処理だつた。聞いた以上、お節介から引き下がれなくなつたカーミラは子供カミラのお願いを引き受ける。

母の魅力に惹きつけられ、内外ともに暴走しようとする輩はカーミラが警告し、禍根を残しそうな者は子供カミラが父親へ打ち明け、ペんぺん草も残らない。

お願ひは続き、子供カミラが育つことに内容が危うくなつた。身内の裏切り者の炙り出しだとか、親を巻き込んだ子供の争いの立会いだとか。カーミラ自身、一族に一目置かれていることもあり、父親が介

入すると穩便に解決できなくなる事柄は全てカーミラにきた。一部、一族の恥部になることもあります。カーミラはおそれと他人を頼れない件が幾つもあつて気が重い。

「もしかすると、目をつけられていたのかねえ……」

そんな気さえする。

「老いぼれの婆を酷使するなんてうちの一家でもいやしないよ……」

カーミラは自室にて信頼の厚い従者より届けられた一通の封筒を手にぼやいた。

割に合わない。だからこそ、子供カミラと同じ学園へ通う孫の手助けをやらしている。子供カミラより孫の方が年上だが知ったことはなかつた。ただ、ただでは転ばないようで、孫が自分と同様、子供カミラにお節介を焼いている。そのふてぶてしさに呆れるばかりだ。

しかれども、年がら年中頼られるわけでもない。カーミラが持つてくる問題を解決したときには憎たらしい小僧に貸しをつくれる。すました顔の男が悔しそうにする様は痛快だつた。

苦労が多いし、本気で子供カミラが怨めしい時もあるものの、悪い日常ではない。

「にしてもあれだ。誰彼構わず、他人を利用するのを躊躇しないこんな性格なら、どこでだつて生きていくるね」

最早、子供カミラが善人でないことは理解している。良心に欠陥があるのだと。父親とは方向性の違いがあるものの、素で悪人だつた。少なくとも、善人とも普通の人のカテゴリーに入らない。母親という外付け良心でまともに見えるだけだ。物語ならば一種の悪役令嬢なのだろう。カーミラはつくづく厄介な子に関わってしまったとため息をついた。

朝日が昇る日中、カミラ達は海の海溝へ訪れた。しかし、晴れやかな天気と裏腹に内なるクルスの天候は悪い。嵐が吹き荒れている。

『くあーっ!! わたしの力なのに、審判の棘を利用して心象世界を創るとかナマイキい!! ——ああつ……!? 棘破壊するの邪魔しないでよお!!?』

訪れて早々、遠隔操作にて隆起した黒い結晶を全て破壊しようとする内なるクルスをカミラは止めた。

「隠密という概念をぶん投げないで。一発で異常事態だつて丸分かりじやないの」

『むむう……っ! わたしの力を勝手に使つたからには平穀無事になんて暮らしはさせないんだから!』

『どうどう、貴女の半身がこちらにある時点で予想できたでしょ』

『あー、もう……っ! わたしだけの特権だつたのにいゝ!!』

「貴女の力をどうすることもできず封印しているという話もあるし、神骸を剥奪、もしくは破壊を視野に入れてきているのだから、落ち着きなさい」

『殺し合いでねつ!!』

「断定しない。それよりも、あの筋骨隆々な漢達つてコリンズが話していた治安部隊に似てゐるのだけど、どう思う?」

『……プロテイン、キメてそう』

「そうね、大剣片手に大盾持つてゐるものね。並大抵の男性では碌に扱えもしないでしよう。でも、そうじやないわ。あれはシルヴァアの兵隊よねつてこと」

『まー、国の管轄だよね。そーなると、あのちびつ子が言つていた豆の木さんはカミラの知る豆の木さんなんだろうね』

カミラはジヤックが聞いていたら憤慨しそうなあだ名だと思いつつ、内なるクルスの言葉に領き、肯定する。

カミラとクルスが話をしている間にも、治安部隊は梯子の点検を終わらせ、辛うじて生えている苗木程度のヤドリギへ近づくと、それを使つて何処かへと姿を消した。

『う、一、ヤドリギが移動にも使われる……真似されたあ……！ 血涙の泉になくて、ヤドリギには機能がありそだつたからまさかとは思つたけどお……！ 成長後と違う部分あるとか聞いてない……！』

「正確な座標を把握してないと移動できないシロモノなのだけど、使い慣れてそうね。クイーンの研究、もしくは派生が当時より着実に進歩しているわ」

『む、……、なんか悔しい……』

「両方の機能を併せ持たなくてよかつたじやない。とはいって、棺の周りを移動されるのも面倒ね。突然現れても困るし、棺の周囲ヤドリギと念のため血涙の泉も処理してしまいましょうか。重要そうな個所の特定と襲撃、お願いできる？」

『もちろん！ この怨みい、晴らしてやるんだからあ……！』

一方的な怨みで悪霊と化した内なるクルス。彼女の指揮下により、墮鬼を使役して各地に点在するヤドリギの破壊が開始された。ただし、広範囲での大号令は継承者に感知される恐れがあるので、小規模での行動である。

内なるクルスが嬉々としてヤドリギの数を減らす最中、彼女は妙な気配を感じ、棺辺りから何かが移動しているとカミラに報告。カミラはクルスに墮鬼の使役を中断させ、そちらに足を運んだ。

気配を追つた先には、一人の少女が一体の墮鬼と交戦している。淨化マスクに黒い頭巾のブラッドヴエイル、妖精のような煽情的な薄着を身に纏っていた。武器は斧槍である。彼女は神骸の伴侶、継承者に

寄り添う存在だ。

カミラは知らないが、内なるクルスは記憶の底で覚えがあり、頭を悩ました。

『んんんく、なんだつけ。どつかで見覚えあるんだけどなあ……』

（二コラのような分身とか）

『近いといえば近いけど……』

（二コラの話で出なかつたのよね。何にせよ情報が欲しいし、会話をみてみましょう）

『大丈夫かなあ……』

不安げなクルスを横に、カミラは幅の狭い崖ばかりの道を移動し、伴侶との距離を詰める。伴侶が墮鬼を倒したと同時に、後ろから足音を立てて自分の存在を知らした。伴侶は音を察知し、身構え反転する。けれど、カミラを見るなり「継承者様?」と困惑。両手に持った斧槍を下ろした。

それから、会話できるほどに互いの距離が近づくと、伴侶は目を丸くするなり、その瞳に敵意が満ち、いきなりカミラへ襲い掛かる。伴侶の斧槍とカミラの女王討伐隊の剣が触れ、火花を散らした。

（悍ましい生き物と遭遇したかのような目をしているわね。これは気づかれたか）

『あー、あー、あー、思い出したよ！ そいつ、アレの娘だ！』

（あら、シルヴァの娘の子供？ 学生時代に懷妊したのね、お盛んだこと）

『違うよー。わたしがアレを乗つ取つた後も抵抗してて、わたしの力で鍊金術みたいに創つた娘。贖罪だと何だとか言つてたね』  
（……つくづく、シルヴァの娘は私と生き方が真逆ね）

脳内会話をしながら戦いを続けるカミラ達。火花が飛び散つた後

は剣で反らした斧槍がカミラの横を通り、カミラは伴侶を剣の柄で軽く殴打を入れようとするが、その前に、伴侶が長いリーチを生かし、斧槍を反転させて柄で殴打してきた。

けれど、カミラは斧槍の柄を片手で掴み、自身の方へ引っ張る。瞬間に手を鋼鉄化したこと、グローブ越しに鉄同士が接触した重い音が響く。

一方で伴侶は、カミラの巨漢の化け物と変わらない豪腕により、無理やり体を持つていかれ、前のめりになつた。続けて、伴侶はカミラから頭突きを喰らわされる。鈍い音が鳴り、内なるクルスが『痛そ』と言葉を漏らした。

伴侶は涙目になりながらも、コマがずれたように意識を飛ばすが、斧槍から手を放さない。それならばと、カミラは斧槍で伴侶を器用に持ち上げ、柄ごと伴侶を岩壁に叩きつけた。伴侶は強烈な勢いで体ごと壁に激突。一瞬、呼吸を詰まらせ、その衝撃で伴侶は武器から手を離してしまった。

砂埃が舞う中、伴侶は重力に従い、地面に崩れ落ちる。けれども伴侶は殴打の痛みにもめげず、「バケモノを滅さなくては」と鍊血を行使しようとした。しかし、追撃の手を緩めなかつたカミラにより、鍊血が発動するよりも先に斧槍でもつて伴侶は頭を殴打され、意識を失つた。

『おー、頭から血が出てる……死んじゃつたかな？』

「人の体つて意外と頑丈だもの、死にはしないわよ」

『んー？ そいつを担いでどうするの？』

「継承者のところへ行くに決まっているじゃない」

『そいつを連れてつ!?』

「いえ、縛つてそこらに放置するわよ。継承者と対話して、駄目そうならこの子を持ち帰りましょ。幸い、見張りに事欠かないわ」

『躊躇なく悪事に手を染めるカミラつてぐう畜』

「殺しにきたんだもの、当然でしょ？」

体のいい言い訳ができたと薄く笑うカミラに、内なるクルスも真似して悪い笑みを浮かべる。

その後、カミラは他の吸血鬼が救助し難い場所に少女を寝かせて上着で縛り、渴求の暴君等に預けては継承者のもとへ急いだ。

棺に辿り着いたカミラ達。二人は幾つもの棘に囲まれ、その中央にハチの巣のようなオレンジ掛かつた半透明の半球ドームを目の当たりにする。また、その中に焦れた様子の青年がいることがわかるだろう。

青年……男の継承者は人影を見つけると、慌ててドームの端まで移動し、へばりつく。けれども、思ったのと違う人物、顔も知らぬ女性が現われ、困惑した。

「君は誰だい？　いや、それよりも、黒いフードを被つた白髪の少女を見なかつたかな？　白い斧槍の武器操るんだけど……」

男の継承者は洞窟に響くような声で、一方的に捲し立てる。

「うん、誰かしら？　白かはわからないけれど、長物なら拾つたわよ」

カミラは目クラであることをいいことに、人がいたとは知らなかつたと何食わぬ顔で伴侶の斧槍を継承者に見えるよう掲げた。

「嘘だろ……それはネレイスの斧槍……!?　それをどこで見つけたんだ、教えてくれ!!」

「拾つたとしか言えないわね」

「そんな筈はないっ!!　彼女はそこらにいる奴等に倒されるほど弱くなんかないんだ!!」

「ふうん、その人は女性なのね、それも大事な人みたい。でも申し訳ないけれど、拾つたとしか言えないし、こんな目だもの、私に期待されても困るわ」

自身の身体的特徴を理由に、これ以上の問答は無駄だと悟らせる。男の継承者も理由があつて知らぬ存ぜぬと釈明されれば強くは言えない。

「うつ、あ……そうか、そうだよな、ごめん……取り乱した。君のような女の人に酷な質問をした、本当にごめん」

男の継承者は伴侶の事について問い合わせたい衝動を抑え、態度を改め謝罪する。知らぬ女性が現れたことに釈然としないとはいっても、隠密に優れた吸血鬼かつ伴侶と出会わないならここに辿り着く可能性はなくもない。

「別にいいわよ。ところで、ここで何があつたの？」

「ああ、実はさ、ここ等一帯の地域を根城とする堕鬼の主とその取り巻きが突然暴れ出してね。この近くにあつた血涙の泉を使い物にならなくしたんだ。それを……俺と共にいてくれた少女、ネレイスっていうんだけど、そいつ等を障害を排除するといって、俺の制止を聞かずに出でていつちまつたんだ。なあ、その斧槍を拾つた以外のことで何か知らないか？」

「んんんく……あとはガラス物を踏んだくらいかしら。今にして思えば、あれは浄化マスクかもしれないわね」

「ま、まだ他にはないか？」

「そうね、あとはそこ等で遭遇することのない一際強い堕鬼の気配を感じ取つたくらいかしら」

「少女の声を聞いたりなんかは……」

「貴方達は住み慣れているかもしれないけれど、人がうろつけるほど簡単な道ではなかつたわ。私は気配に敏感だから時間を掛けてここまでこれたのよ。そんなに必死になつて私に聞くくらいなら、貴方が助けに行けばいいじゃない」

「いや……事情があつて、ここから動けないんだ」「聞いても？」

「すまない。とある人から君の話を聞いていないし、情報を開示できないよ……」

「なら、今度は私の話。血涙の残りに困つていてね、新たに開拓中のだけれどアドバイスとかあれば助かるわ」

「君が、か？」

拾つた斧槍の他に女王討伐隊の剣を手にしている。健常者のように歩いてはいたが強いとは思えない。気配に敏感ともあることだ。話の流れ的に、直接戦闘は最終手段だと行き着いた。

「このご時世、目の見えない足手纏いは欲しくないでしよう？」

それは男の継承者に突き刺さる言葉だ。継承者はかつて仲間の足手纏いであり、卑屈に過ごす中、たまたま神骸を受け入れる器として適性があると判明し、話に飛びついて継承者になつた経緯がある。

「足手纏い……そうだよな、世間は厳しいもんな。あと、度々でごめん。長い間外出をしたことがないから、この中の事くらいしか知らないんだ」

「あら、日の光が苦手なの？ 本当の吸血鬼だとするなら、風の噂で聞きそうなのだけど」

「君の期待に応えられる存在じやないさ。噂にならないのも、ネレイスが——……そう、ネレイスが頑張つたからね……」

カミラは言葉の続きを待つが、継承者は顔を伏せて落ち込み、口を閉ざす。

伴侶が頑張つたというのは棺に近づく侵入者の撃退であり、心臓を破壊して灰にする行為である。この地の足を踏む者を抹殺し、継承者の噂の流出を防止しなくてはならない。

そのネレイスが堕鬼を追い、行方をくらました。総督府の関係者以

外でここに立ち入れた者はいないのだ。男の継承者は信じたくはないが、伴侶の生存が限りなく低いと理解してしまった。良くも悪くも、ネレイスとの交流だけが男の継承者にとつての心の寄る辺である。唯一の安らぎが儘くも崩れていく現状に顔が真っ青になり、嫌な耳鳴りがした。

「……ごめん。君と長々と話していると、余計な口を滑らしそうになる。申し訳ないけど、他所へ行つてくれないかな。それと、厚かましくて申し訳ないけど、君の持つているネレイスの武器も置いていって欲しい」

「了解。気にしないでいいわよ、慣れているもの」

気遣いの言葉を掛けるが、継承者に余裕はなさそうだった。

カミラは足元から斧槍を置き、踵を返す。これで神骸の伴侶を誘拐することが決まった。継承者は背を向けて洞窟から去ろうとするカミラへ言い残した言葉をかける。

「ごめん、一方的で悪いんだけど、この場所の事とかも口外しないで欲しい」

カミラは背を向けたまま片手を挙げ、了解したとの意を示す。それから数歩歩くと、カミラの後ろで「俺は一人か……」と、継承者のボヤキ声が風に乗つた。

そして、次の瞬間異変が起きる。継承者が膝をつき、苦しみだしたのだ。継承者の変調に気づいたカミラは振り返った。

『あ、暴走しはじめたっぽい』

（今になつて？ 心の支えを失つたから？ それとも、ようやくクルスの存在に気づいたのかしら？）

『どうかな。一見すると、精神的な支えを失つて封印の均衡が崩れたのかに見えるけど、アレの娘を心配して、湧き上がる衝動を抑えつけ

て会話してた可能性もあるから、あの個体だけだと判断つかないね』

異変を観察している間にも、継承者は脂汗を垂らし、体の変化が進む。継承者は目線でカミラに逃げろと訴えかけるが、カミラはじつと観察した。

継承者の体が盛り上がり、衣類がはち切れる。露出した肌は青い筋肉質の体であつた。顔も人間のものではなくなり、悪鬼羅刹のような形相の青い鬼となつた。

「オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、——!!」

継承者は唸りのような咆哮を終えると瞳から理性が失われた。棺の封印は解かれ、半透明の壁は硝子が割れたように霧散する。3メートルを超える鬼が狂氣を振り撒き、カミラ達へ襲いかかってきた。

(結局、殺し合いになつたわね)

『樂でいいじやん。まとめて壊しちゃえ』

(周辺の監視を頼んだわよ)

『おっまかせー！ 侵入者は排除しておくねー！』

そうして、鬼との戦いが開始された。

継承者だつたものは、丸太をも超える筋肉質の足に力を込め、地面を陥没させて風圧を突つ切り、一気にカミラとの距離を縮める。その迫力はダンプカーの如く。

カミラは猛進する重量物を身を翻して横に避け、ついでに女王討伐隊の剣を振るつて、鬼の腕を傷つけた。鬼の肌は鋭利に切れ、感触は悪くない。大型車の標準的速度でも十分に対応できる。カミラの横を通り過ぎた鬼は勢いのまま突き進み、洞窟内の壁にぶち当たつた。洞窟内が揺れ、天井から砂利が落ちてくる。

『んー脳筋っぽい。物理一辺倒つて感じ?』

(見るからにパワータイプだものね)

軽口を叩いている間にも鬼が反転し、地響きを鳴らしてカミラに迫る。カミラは真っ正面から迎え撃ち、鬼の豪腕から放たれる巨大な拳を女王討伐隊の剣でもって受け流した。洞窟内を轟々とする音の振動が駆け巡る。鬼は次々と拳を繰り出すが戦況に変わりはない。もとより、クイーンの初期能力は周辺国家を追い詰めた化け物である。カミラがその恩恵を受けている以上、質量差は物ともしなかつた。

カミラの頭上から怒涛の勢いで繰り出される拳。けれども、カミラは全てに対応し押し潰されず、遂に鬼の方に疲れが見え呼吸がする時がきた。技の反動だ。技後硬直にカミラはすかさず片足を骨ごと切る。鬼は後ろに飛んで仕切り直しをしようとしたが、間に合わなかつた。足は繋がっているが、完全に機動力を奪われた。着地後、片膝を立て、手を地面に置くことで転倒を防ぐ。しかし、深く抉れた足からとめどめもなく噴出する。赤い血がとまらない。

(継承者もこうなつてしまつては理性なき怪物ね、堕鬼化と変わらないわ)

殺す。その一点においては難しくなさそうだ。恨めしそうにカミラを睨んでいた鬼だが、可能な限り目を大きくひらくと苦しみ出す。カミラが相手の次の行動に注意していると、内なるクルスから叱咤の声が入つた。

『観察してちゃ駄目！　早くトドメを刺して!!』

内なるクルスの警告から間髪入れず、カミラは疾走、足の回転を上げる。地面を縫うように移動し、鬼の心臓目掛けて跳躍。斜めに剣を振るつては上半身を大きく切り裂いた。赤……ではなく、青い血が滝のように吹き出る。だが、確実な手応えだ。

けれども、上半身が映像を巻き戻すように肉体が再生される。鬼の

体が一層盛り上がり、鎧を纏つたように無骨になる。鬼が顔を歪めて笑うと、宙にいるカミラへより無骨になつた拳を振り上げた。

カミラはグローブがはち切れるのを構わず、左手をオウガ型に変形させ鬼の手を弾いた。音の大爆発が巻き起ころ。加えて、弾いた反動でカミラは後ろに吹き飛ばされた。地面上に二本の線の軌跡をつけ、土煙を巻き上げて長い線を残したのち、ようやく停止する。

（再生力もそうだけれど、拳の威力も速さもいきなり爆増するとか何事よ）

『大変、大変！　あいつの中、わたしの残滓とアレの欠片が両方暴走してる！　最初は暴走するわたしの残滓を抑えきれずについて感じたけど、カミラと戦つてアレがようやく気づいたっぽい！』

（よくわかつたわね）

『滅ぼしたいほど頭に入るけど、わたしはアレと一緒にいたし、残滓は昔のわたしからね。たぶん、棺が情報を遮断して感知できなかつたと思う。あとは、アレのことだから、暴走するわたしの残滓を抑えるのに必死だったと思うよ。完全に制御できるなら、それこそ道ずれでわたしの残滓とこの世から消えるだろうし。色々要因が重なつて反応が遅れたのかもね』

（貴女の残滓は何とかならないかしら？）

『アレが直接干渉しちやつてるし、半ば融合しちやつてるからね。今も送つてるけど言うこときかない。こうなつたらあれだね、わたしの力で壊しちやうのが一番だよ。具体的には、鍊血を使お』

（禁止ではなくて？）

『今回は仕方ないつて。ブラッドヴェイルに混ぜるから、トドメの時に使つてね』

あーあ、仕方ないと内なるクルスが嬉々として口づさむ。武力戦になつた際は、継承者を一度殺してどうなるか調べるつもりだったが、ああも鬼の再生力が高いと一息に破壊するしかない。

(難儀ね……)

とはいって、単なる物理的な戦いでどうにもならないのも事実。鍊血を行使することに決めた。力の行使により鍊血に反応した者達がヤドリギから飛んですぐさま駆けつけないでと祈るばかりだ。

時間が止まつたかのような脳内会話が終わり、カミラと鬼が双方動き出す。お互い距離を詰め、カミラは剣を、鬼は拳を振るう。嵐のような剣と拳の応酬、カミラは鬼に幾つか腕に傷をつけ、出血させるが入りが浅い。今回はカミラに分が悪かつた。剣が軋んで悲鳴を上げている。武器破壊されそうだ。

(……よろしくないわね)

『回避に切り替えだね。次くるよ』

鬼は拳を引っ込めて、上半身を下げ、地面を横一面に削る回し蹴りを放ってきた。カミラは腕に飛んで回避。鬼はチャンスとばかりに、崩れた姿勢からでもカミラを片手で捕まえようとしてくる。それはカミラも承知の上だ。カミラは体を捻ることで捕まるタイミングをずらし、鬼の拳の上に乗った。

だが、鬼は笑う。カミラは嫌な予感を受けた。内なるクルスの警告もくる。冥血が膨れ上がっていると。

カミラは鬼の手を蹴つてすぐに脱出。距離を置く。すると鬼は青い放電に包まれた。けれど、终わりではない。青い放電を纏つた鬼の指が二本伸びてきた。追撃だ。

カミラは伸びてきた指を剣で切り落とす。さらに鬼は反対の手をカミラへ向け、おかわりを送った。カミラはこれも対処、全ての指を切り落とした。しかし、同時に嫌な音が響く。小さな鋼鉄の欠片が弾けて何処かへ消える。女王討伐隊の剣が刃こぼれしたのだ。体勢を立て直した鬼が口角を上げて顔を歪めた。

「やつてくれたわね」

『でも、さつきみたいに一瞬で再生していないよ。肉の復元だと回復が遅いみたい』

「なら、剣」とくれてやるわ』

カミラは全力で駆けた。音を置き去りにして。意外にも生地も靴も丈夫で壊すことはなかった。カミラはそのことに感謝する。鬼は視界からカミラの姿を見失い、カミラは剣を振り抜き、一閃。剣は半ばから碎け散つてしまつたが、代わりに鬼の片足を宙に切り飛ばした。鬼は予想だにしない攻撃に、前のめりに体勢を崩し倒れた。対して、カミラは女王討伐隊の剣を捨て、地面に捨てられた伴侶の斧槍を回収する。

「こういう長物は得意じゃないのよね」

不満を漏らすと、内なるクルスから悪い一報が入った。

『カミラ、アレの娘が起きて、こっちに来てるけどどうしよう?』

(暴君達は?)

『別の吸血鬼のお相手中』

なんとも間が悪いものだ。

(痛めつけたのに根性あるわね。いいわ、こっちに移動させといて。決して、他の吸血鬼に接触させてはならないわ)

『うえいつさく〜!!』

カミラは斧槍を握り、突撃。一方で、鬼は足が切り飛ばされたことで肉の再生が追いつかず、しゃがんだまま。そこにカミラは、鬼の顔面を狙つて、伴侶の斧槍を投げつける。

斧槍は音無く突き進む。鬼はカミラの槍投げ動作に気づいており、両腕で顔と胸を覆うことで飛来する斧槍に備えていた。

斧槍は鬼の腕に突き刺さる。だが、左胸に衝撃を受け、体が揺れた。ありえない。そんな顔で腕の構えを解く。

左胸を見てみれば、ステインガー型のブラッドヴエイル、鋼鉄の蠍のような尾が背中の後ろから左胸を貫通して青白く燃えていた。力ミラに視界を移せば、カミラのスカートの中からステインガー型が生えていることがわかるだろう。

即死だ。が、鬼は己なら動ける。そう思つて、鋼鉄の尾を引き抜く動作をしようとするものの、手が動かない。それどころか、自身の根本的存在が脆く砕け、足元から崩壊する感覺がした。

『うえつへつへ〜、昔のわたしにすら通用する破壊因子の味はどうかなー？ 再生できないだろう……!!!』

(……最高に上機嫌ね)

『邪魔者と嫌いな奴等が苦しみもがく様つて大好きだもん！』

(貴女つて性格が丸くなつても邪悪な存在だつて、改めて思わしてくれるわ)

二人が脳内会話している間にも、鬼の体を青白い炎が燃え広がつて全身を包んだ。ブラッドヴエイルに宿つたクイーンの力が継承者の存在を破壊する最中、彼の伴侶ネレイスが戦いの終わりである現場に辿り着く。

力ミラという敵対者と鬼がいる。されど、ネレイスは鬼が誰であるかを直感的に理解した。

「継承者様あつ!!」

壁に体を預けるネレイスは、甲高い悲鳴を上げて駆け寄ろうとする。しかし、余裕なく慌てたせいで足がもつれて転んでしまう。その間にも、鬼は心臓から崩壊し、胴、手、足、頭という順で消えゆく。鬼の体が炎の中に呑まれて消失すると、薄く明滅する青い核が出現した。

青い核は神骸である。けれど、神骸はステインガー型に突き刺されており、無限の再生を許されずに青白い炎の中、なすすべなく消えた。そうして、8つある内の1つの神骸が世界から退場した。他でもない、クイーンとその手の者によつて葬られたのはある種の皮肉だろうか。

ネレイスは何もできずただ見ていることしかできなかつた。継承者も、神骸も、己の使命すら破壊された。突然現れた女によつて粉々に踏み抜かれた。己の全てを失つたネレイスは、例えようもない心境に、脳の処理が追いつかない。

そしてカミラは自失呆然する伴侶のもとまでコツコツと歩み、横にしゃがむ。伴侶の顔を持ち上げ、継承者がいた場所をよく見させた。

「死んだわ」

「ううう……あああああああ——————っ!!!!」

伴侶の心からの慟哭が洞窟内を反響する。カミラに無理矢理事実を突きつけられ、はち切れる寸前だつた感情が爆発したのだ。

ネレイスは目に涙をいっぱいに溜め、頭を搔き筆る。継承者を外敵から守れず、また神骸を受け継ぐ者に寄り添うという己の存在意義に等しい役目を失い、大事な存在が手から零れる光景しか見ることしかできなかつた彼女は、ぐちやぐちやとなつた思考の中、急速に精神が磨耗していき、考えることを拒否して気絶した。

少しばかりメンタルブレイクさせるつもりだつたカミラは予想以上の効果に満足する。

『あ、あくまん……』

(たん? 私の血は青くないわよ)

『わたしが邪悪な存在つていうけど、カミラもカミラで素で悪人だよね。わたしと同等な気がするよ』

(継承者が死んでませんと言ひ張られても困るじゃない)

『建前の気がしてならないのです』

力ミラはぼやくクルスを置いておき、気絶した伴侶を肩に乗せてお米様抱っこをする。斧槍も回収してから洞窟を出て、内なるクルスに審判の棘に干渉を任せ、継承者を失った棺ごと洞窟を崩すと、何食わぬ顔で海溝から立ち去った。

本来、処刑人に継承者を処断されて見守ることができず墮鬼化したネレイスだが、奇しくも力ミラから過剰に精神過負荷を与えられ意識を失つたことで墮鬼化を免れることとなる。

総督府の地下、血の泉に囲まれた玉座の前までジャックは一人で訪れていた。呼び出し人は玉座に座るシルヴァである。

「霧の牢獄の血を賄うこの場所はいつ来ても壯觀だな」

「おお、ジャック、待っていたぞ。忙しいところ、来てもらつて悪かつたな」

「別にいい。おっさんだつて、国を覆う結界を維持するのにここから動けないんだ。呼ばれたなら来るさ」

「で、用件なんだが、この数日嫌な気配を察知していたりしてないか？」

ジャックは面を食らつた。前振りや前座の雑談もなく、率直に用件から入るのも珍しい。早急に解決する案件と認識し、意識を切り替える。

「気配か……さつぱりだな」

「連れの方はどうだ？ 何か恐ろしい存在を聞いていたりしていないか？」

抽象的な言葉にジャックは頭を悩ます。新種の墮鬼ロストの報告もなければ、継承者が暴走する兆しもない。むしろジャックよりシルヴァの側近達の方が詳しいだろう。墮鬼に関することならミドウだ。ジャックがわかるのは現場目線だ。下手に唸つてもどうしようもないでの早々に答えを出す。

「ないな、エヴァからも特に何も。それは軍人としての感か？」

「いや、戦士というよりも俺の娘が何か良からぬモノを感じしたみた

いでな。警鐘を鳴らすんだ

「クルス・シルヴァがか。彼女の献身のおかげで俺達の侵食は遅れている……それ以外に何か厄介事があるのか？」

「無意識な娘と直接会話できるわけではないから上手く言えんが、何かを非常に恐れているようなんだ。2回ほど神骸を制御しようとする手が緩んだ」

「何らかの予兆か、嫌な感じだな」

「ああ、そうだ。そういうこともあつて総督府の警備を減らした。棺の巡回に回したんだ。何者かが暴れたなら連絡がくるはずだ」

ジャックは目を見開くと目頭を指で抑え、頭が痛いと訴えた。棺に関わることはジャックの管轄もある。口を挟む前に仕事場を荒らされるには思うところがあつた。秘匿性を高めるため、治安部隊サーベラス全員にジャックが吸血鬼狩りだと周知させていない事情もある。

「はあ……事後報告はやめてくれ。おっさんの杞憂の可能性もあるんだ。それに反政府組織の活動も活発になつてきている」

「何もなければ俺の思い過ごしだとわかる。俺達継承者が創られてから初めて起きた異変だ。見逃したくないのだ。わかってくれ」

過ぎたことを追求しても仕方がない。不承不承ながらもジャックは「承知した」といつて了解の意を示す。そうして棺の周辺の見回りが強化された。

普段、治安維持部隊サーベラスが棺の周りで見かけることは滅多にない。それこそ原作で自由に動き回る主人公達がサーベラス隊と特定の場所以外では出会わなかつたように。しかし、今回の出来事で定期的に人が巡回するようになる。海溝から継承者と伴侶が消えた事実は近い内に気づくだろう。

天気の良いこの日、オリバーは訳知りな吸血鬼を連れ立つて廃屋の屋上へ休憩する。オリバー一行はレジスタンスの支部に身を寄せていた。

切っ掛けは訳知りの吸血鬼レヴァントがレジスタンスの工作員であつたからだ。彼が労働奴隸になつていたのは、とあるグループに所属していたものの、血涙の蓄えを狙われ、壊滅させられ囚われたからである。

「改めてお礼をさせてください。オルガさんのおかげで、皆が路頭に迷わず済みました」

「いや、いや、やめてくれ。オレが紹介したのはオリバー達のグループだけで、他に救助した人達とは別れたんだ。それに、オリバーとあのやさぐれたねーちゃんの武力をお目当てにしてつてのもある。他の奴等もなんだかんだで使えるしな」

「ええ、生物探知の鍊血を使えたり罠だつたりと個性ありますよね」「だよな。メンバーも前とあまり変わらずでの行動だしな……ただよ、本当に良かつたのか？ オレ達レジスタンスはシルヴァーと戦争をしている地域もある。血税を払わないで自治区でやつしていくつてな。もしかするとそつちに駆り出されるつてこともあるぞ」

保護区に潜伏しているレジスタンスもいるが、そちらは武力で活躍するよりは商人だつたり、医者だつたり、技術方面を求められている。オリバーは戦闘に優れているが、特定の職となると一から勉強しなければならない。加えて、オリバーは保護区で活動し続けるつもりもなかつた。

「構いませんよ、昔なら悩んでいたのでしょうかけどね。今は人に頼られる程度には頑張りたいと思います」

「ああ、それなら問題ない。オレはアンタを頼りにしているし、支部の奴等も遅くない内にアンタを頼るさ。実際、あのやさぐれねーちゃん

を動かせるのはオリバーさんくらいなんだ。好かれてるねえ」

「オリフィアさんも、もう少し他の人の話を聞いてくれると嬉しいんですけどね」

「厭世的<sup>えんせい</sup>だからなあ。故郷に帰れないって諦めてるし、これからも精神的な支えになつてやつてくれ。それから一つ聞きたいことなんだが、名も知らないめくらのねーちゃんはそんなに美人だつたのか?」「目元を布で隠しているので顔までは……ですがいつかは血涙のお礼をしたいと思つています」

「んー、そうか。今度はやさぐれねーちゃんにはバレないようにな。ただでさえ、手紙を破り捨てられているんだ。ああなると不機嫌が極まって仲間の連携に支障が出る。理不尽だろうが、色男の宿命だと思つて頑張つてくれ」

もつともオリフィアを裏方に回せばいい。けれど、彼女個人の能力が武力方面に振り切つていて、オリバーと実力が並ぶことを考えると遊ばせるには勿体なさすぎた。

「ははは……、注意しておきます」

力なく笑いながら頷く。その日から人生が変わった契機もあって力ミラから宛られた手紙を何となくとつておいた。なのだが、オリフィアに見つかりあっさりと破られてしまった。若干のトラウマある。

それはともかく、オリバーがレジスタンスの勧誘を受け入れたのは労働奴隸を生み出すシルヴァーの政策への不満や過去の償いもあつた。強い者だけが安寧と暮らす日常を変えたい、そのためには力がいる。オリバーの当面の目標はレジスタンス内で発言権を得ることだ。

後日、総督府の者が不可解な場所で設備点検していたと情報があり、秘密基地があるかの調査でオリバー達は力ミラ達がいる海峡まで駆り出されることとなる。ちなみにクルスは気づいていない。オリバーの服装が違っていることもあるが、顔や気配まで覚えていなかつ

た。

晴れやかな天気と対照的にミアと二コラの口数は少ない。仲が悪化したのではない。別れの日なのだ。

切つ掛けは二コラの秘密の告白だ。ミアと二コラはカミラがいなくなつた後、少しずつお互いの思いの丈をぶつけていった。徐々に加熱し、久々に姉弟喧嘩だつてした。

本物の弟も助けたいミアと末期の患者のように死を待つばかりだと理解している分身。分身二コラは子供らしからぬ落ち着きで、ミアに本物を会わせることはできないと何度も説得する。ただ、頑なであつたばかりに最愛の姉を泣かせてしまつた。

泣いて、泣いて、時間が経つとミアも少しは冷静になる。辛い話は一旦保留にし、再開してから今までの思い出に切り替えた。ミアと二コラは過去の言わずじまいだつた想いを改めて吐露する。新しい発見だつてあつた。

口にする思い出話もなくなり、就寝する。翌日の朝になると二コラが唐突に別れを切り出した。

当然ミアは別れに反対し、時に縋り、分身二コラに考え方直すよう改めさせる。けれども、二コラは改めない。思い出話をしたことで、小さな箱庭で満足する姉に成長する機会を奪つたのではないかと疑念を持つたのだ。また、最期に本物と二人で話したいという思いも芽生えた。

氣まずい中、日数をかけて二コラが自身の思いの丈をを言葉にしていると、遂にミアが折れ、お互い離れることになつた。

「二コラつて酷いよね。どうしてもお姉ちゃん離れしたいっていうんだもん」

「ごめんね、ミア。僕はいつまでも一緒にいられないんだ。だから

もつと広い目で世界を見て欲しい」

「こんな世界なんて辛いことばかりよ」

「そんなことないよ。だつて、宿舎で生活していたミアは友達と樂しそうだつた。今から僕がジャックと話してまた入れて貰えるようにお願ひだつてできる」

「ごめんなさい、それは止めて。今の私の手は血で汚れているから、綺麗なあの子達と会うのは……その……辛い。きっと劣等感で抜け出してしまうわ」

ニコラが目じりを潤ませ、申し訳なさそうな表情を浮かべる。けれど、謝らない。一緒にいてくれたミアの想いを踏み躡りたくはなかった。

「そんな顔しないでニコラ。たまに隠れて会いにくるニコラと一緒にようと行動したのは私自身なんだから。大変な毎日だつたけど、楽しかったのよ?」

「そうだね、幸せな毎日だつた。本物の僕に嫉妬するくらいにね」「今のニコラもちゃんと私の弟よ。優劣なんてないわ」

「そう? えへへ、そつかあ、嬉しいな……」

分身ニコラは頬を緩ませる。ミアと過ごす内に、自身が本物でない罪悪感があつたのだ。

「ニコラはこれからどうするの?」

「今の僕じゃあ、辿り着けるかわからないけど、本物の僕のところに戻るよ」

「道は……教えてくれないわよね。ごめんなさい、未練だわ」

「……うん」

ミアが棺の場所を見つけたなら別だが、ジャックとの約束もあり、ニコラは人に棺への道を教えることはしない。何より、危険な道中に

なる。ニコラを見捨てる選択肢を取れない姉では共倒れになる可能性もあつた。

「僕には行かなくちゃいけない場所がある。けど、ミアは行く宛てある？」

「そうね……、ニコラが世界のために頑張ってくれているんだから、私も少しばかり他人に親切をしないとね。人の縁、繋いでみるわ」

「うん、それがいいと思うよ」

会話が途切れる。お互い沈黙し、静かな時間が横たわる。離れてあと、もう会う事はないのだ。別れが惜しい。

「僕はミアの騎士になりたかったな」

「もう、十分に私の心を守ってくれたわ。私の騎士様」

「……ありがと。それじゃあ、ミア、行つて。見守つてるから」

「……そう、よね。弟離れできるって、証明しないと不安だもんね。

私、行くわ」

「うん。お姉ちゃん、ありがとう……さよなら」

「ええ、私こそ今までありがとうございました……さようなら」

ミアはニコラに背を向け、前を歩いていく。ニコラは歯を噛み、拳を握り締め、耐えるようにただ見守つた。

ミアの歩く速度が徐々に速まつていく。銃剣を担ぐ手に力が籠る。決して振り返ることはしない。

ミアの姿が見えなくなり、悲しさ、寂しさ、嬉しさが混じり合つた複雑な想いを胸にニコラは涙を流す。だが、これから起ることも理解していた。長いこと姉と一緒に暮らしていたのだから。

一方、ミアは姿が見えないと確信した場所で涙を拭い、大きく呼吸を整える。弟には恰好つけたが、未練たらたらだ。今からニコラに見つからないよう、棺の場所まで追いかけるのだ。いくら弟に言われたからといって譲る性格ではない。会わせてくれないのなら、会うまでも

だ。偽物と本物どちらも大事である。騙すことになるのは心苦しいが諦めたくはなかった。

そうして、ニコラとミアの追いかけっこが始まる。

ニコラとてこの厳しい世界で伊達に生きてはいない。弱いからこそ、相手の視線に敏感だ。わざと建物に入り、どこからか感じる姉の視線を遮る。小さな体躯を生かして子供しか入れない抜け道で外に出たり、姉では入れない狭い路地を進んだりする。

かくいう、ミアも必死だ。通れない道は遠回りする。第一にニコラに見つかってはいけないのだから。これはある意味勝負である。見つかってしまえば、ニコラは姉から離れるのを諦め、残りわずかの時間で過ごして死ぬだろう。それでは本物の手がかりがなくなってしまう。ゆえに、ミアは不利な条件でニコラを追つた。

追いかけっこは長いこと続き、道路を角に曲がったと思ったニコラが出てきた。ミアは慌てて身を隠す。ニコラは俯き、地面に汗を零し、息も絶え絶えの様子で安全そうな建物に入った。休憩するようだ。

ミアの方は無茶な移動を強いられたものの余裕はあつた。しかしミアはニコラを追う必要がある。部屋で横になつたせいで姿が見えなくなつたニコラの動向に注意しつつ、うかつに眠らないよう休憩を入れることにした。

（大丈夫、建物全体や出入り口は見えてるし）

それから10分。ニコラはまだ動かない。

20分が経過。相当疲れているのだろう。慎重に部屋を覗くところに背を向けて横になつているニコラが見えた。

30分が経過。今日は寝てしまう可能性もある。ミアはどうするか悩んだ。

35分が経過。もう一度ニコラの様子を探つた時、ミアは違和感を覚える。ニコラが身じろぎ一つなく、微動だにしていないのだ。服に染みる汗が酷い。ミアは迷い、意を決してニコラがいる部屋に侵入す

る。するとそこには雪のよう半解けとなつたニコラがいた。お腹に大きな文字が描かれてある。

——僕の勝ちだよ。

ミアはその文字で全てを察した。ニコラが特殊能力行使したのだ。半解けニコラの満足気の顔が憎らしい。今ほど周辺を感じする鍊血が体に備わつてないことを恨んだことはないだろう。

ミアはあらん限りの声でめいいっぱい叫んだ。そして肩で息をすると、銃剣ブローディアを力なく手から落とし、両手で顔を覆つて、その場に座りこんでは静かに泣いた。乾くほど泣いたというのに涙が止まらなかつた。

でいく。

海溝から離れた場所、その建屋にある石のベットの上にてネレイスは目覚める。けれど、ネレイスにとつて見覚えのない場所だった。風に運ばれて微かな磯の香りを感じることもない。あの悪夢は夢でないのだと理解する。

起きなければならない。例えそこに希望などないとわかつていても。再び現実を目の前に突き付けられるまでは母の願いを叶えなければならぬのだから。

そして体を起こし、いつも目の前にいた継承者はいなかつた。いるのは悪夢を引き起こした女性ただ一人。近くにいるのに気配を感じ取れなかつたものだから、心の臓に悪かつた。

「起きたのね、体調はどうかしら？」

敵である女性に気遣われ困惑する。彼女の目的がわからない。

継承者の仇が目の前にいる。しかしながら、負の感情から発する行為そのものを忌避しているのだ。母を苦しめた存在と同じになるつもりはなかつた。加えて、トラウマと圧倒的な敗北を受けている。目の前の女性が纏う、何処か覚えのある気配も恐ろしい。

再び謎の衝動に駆られる。が、何かをするほどの意欲はなかつた。狂うことことができればよかつた。けれども、その機会も失われ、今こうしておめおめと生きている。心身を捧げる使命もなくなり、自ら敗北を認めると、空虚な気持ちになつてしまいネレイスはどうすればいいかわからなくなる。

湧き上がる衝動がうつとうしい。そんな気力はないのだ。ネレイスは目の前の女性から目を背け、生氣のない顔で病人のように窓の景色を眺めた。空は青い。

霧から向こうは真っ赤だが、ネレイスが生きるこの国の空は青かつ

た。

『ちえつ、ザーンねん。あつちに殺る気の欠片もないね!』

(あんな仕打ちしたものだから、殺し合いにならないだけまだマシか  
かたき  
しら)

『仇だー! つて襲つてくれた方がさらつと終わつたのに……こいつ  
を待つ意味ある?』

(私のことを継承者と言いかけたのよ、友好的な行動もしかけた。この子みたいな存在が複数いると知つてしまつてはね……今後も同様の行いをすると考えれば、この行為は必要なことなの)

『これからの方針かー、今のところ行き当たりばつたりだもんね』

一日が経つた。

『え、何、石化? 動く彫像? シルヴァ<sup>ア</sup>の娘みたいにレリーフにもなつてないのにぜんぜん動かないんですけどー! カミラがおねむしないと至高の癒しタイムが伸びるんだぞ、こらーつ!!』

(脳内イメージのボードゲームで私と遊びながら言う言葉じゃないわ  
ね)

『だつてえ、現地集合とモニター越しで遊ぶぐらいの違いはあるし  
……』

(言つている内に彼女、動きそうよ)

『はーい、中断中断』

ネレイスは外の景色を眺めたまま「感情というものは長続きせず、疲れるものですね……生まれて初めて実感いたしました」と前置きし、カミラの方へ顔を戻して見据える。

「そうは思いませんか、継承者様」

何も知らないと通すか、知つてゐる前提で話を進めるか。カミラは

迷い、後ろを取つた。

「わかるのね？」

「はい。その節は突如襲つてしまい、ご無礼をお許し下さい」

「過ぎたことよ」

カミラは内心残念がる。単体の感知範囲は狭いようだが、神骸持ちであれば反応してしまう彼女達の存在は厄介だ。創られた人数は内なるクルスが覚えているものの、シルヴァの娘がクルスの離れた後も量産していたらまらない。

神骸と伴侶、この二つを対処する必要があつた。ネレイスが寝ている間にクルスが気配の調整しているが、それでも感知された。気配を消せる確証もない現在、伴侶と継承者の存在は何かと都合が悪い。

過去、カミラ達は結構なことを仕出かしている。敵対勢力がいるか不明だが、そちらに渡つてしまふとだいぶ面倒なことになる恐れがあつた。

「つかぬことをお聞きしますが、右足の骸を受け継ぐ継承者様は暴走してしまつたのですね？」

「ええ、彼を囲う壁が壊れて、突然襲つてきたわよ」

「……でしたら、継承者様を討伐されたのは然るべき行いなのでしょう。継承者様は人のために尽くしましたが、だからといって脅威となつてしまつた存在を放置する訳にはいきません。厚くお礼を申し上げます」

「感謝されることはね。いいのかしら、私は貴女の仇となる者よ？」

「貴女様でなくとも、いすれば処刑人が手を下してはいたことでしそう」「感情を押し殺して話しているようにも見受けられるけれど、暴走した後も彼を守りたかったのではないかしら。それを思えば、今もなお私を倒さない理由がわからないのよね」

「見守る行いが私の責務、例え命乞いがあつたとしても暴走する兆しがあるのであれば、静観する以外にできることはありません」

「つらい役回りね」

「……それが私の使命です」

言い聞かせているようにも感じられた。真っ直ぐこちらを見つめるネレイスの心情は計り知れない。油断はできないが、好機でもある。ネレイスの行動次第では継承者も伴侶も殲滅するという選択肢から離れられるのだから。

「話を戻すわ。処刑人だったわね。人物名とか所属する組織とか、その他もろもろ説明して下さる?」

「はい。——処刑人、ジャック・ラザフォード様。その方の所属は総督府。男性です。女王討伐時期に活躍した英雄といわれております。また、その方も継承者であり、目の神骸をその体に宿しています。表舞台から幕を下ろした一方、現在は裏方に従事し、世間を騒がす吸血鬼狩りとしても名を馳せているようです。相方がおりまして、名前はエヴァ・ルウ様、女性でございます。喉の神骸の継承者です」

話すことが義務といった様にカミラは少々面を食らう。ストレートに答えてくれるとは思いもしなかつた。言葉を濁すとかではなく、重要そうな機密情報を丸々ぶつこ抜いている。

「助かるけれど、それ秘匿情報とかだつたりしない?」

「総督府でも全体的に公表されていない事実です」

「貴女に罰則があるのではないの?」

「私は継承者様に対して等しく味方でありますので、求められたならば答えます」

これはカミラも迂闊な事を喋れなくなつた。

「総督府について詳しいのね。貴女も総督府に席を置いていたりするのかしら?」

「確認も調べてもいませんので判断しかねます」

「総督府では何をしていましたの？ 詳しくお願ひ」

「そうですね……ラザフォート様が繼承者様に会わせるからと仰られましたので、総督府に身を置いたのち、右足の神骸を受け継いだ方と共に海溝の地へ落ち着くことになりました。総督府では私と同じ姿をした姉妹達がいたのですが、吸血鬼研究所に連れられ、過酷な実験の末、3名がその役目を終えています。私は神骸を受け継ぐ方が現れるまでは書類の整理だったり、研究所へ視察に行く方と同行し、姉妹達の様子見だつたりの生活でした」

ネレイスが情報を持つていて理解した。けれど、人体実験で伴侶を壊す行為はどうなのだろう。シルヴァ辺りならば伴侶の生き様を周知しているはずだが、とカミラは考える。

「その吸血鬼研究所の総括は誰？」

「ジユウゾウ・ミドウという殿方です」

「……有名だものね、彼。吸血鬼研究の第一人者で彼なしでは研究が十数年遅れると言われるほどに」

マッドサイエンティスト。その男が総括ならば人程度のものは消耗品であっても不思議でない。大崩壊以前、孤兎を引き取り傭兵として送り出すのだから尚更。カミラが蛇蝎のごとく嫌う人物だ。

吸血鬼になつたばかりの当時、己の体に興味を持たれ、ミドウから幾多の迷惑を被つた事もあって怨敵である。失敗しようが成功しようが、最悪暗殺も視野に入れるほどの相手だった。

久しぶりに嫌な名前を聞いて感情がざわつく。けれど、長くは続かない。ネレイスの次の一言で場の空気が冷えたのだ。

「あなたは私の繼承者様を殺しました」

「そうね」

「彼の生は報われたのでしょうか……？」

「自ら進んで想いを受け継いだのでしょう。貴女もいたことだし、寂しくはなかつたのではないかしら。それで報われなかつたかは貴女の判断よ」

対して、カミラはシルヴァの娘の死に際の際、想いを拒否している。クイーン討伐の終焉、その死に際に手を伸ばしてきたので蹴り離したというだけだが。悲痛な顔だつたのでそういうことなのだろう。その後、とんでもないのがくつづいてきたりした。

「最期を共にすることができず申し訳なく思います……不甲斐ないばかりです」

「今も死にたいのかしら？」

「これからどうすればいいのかわからぬのです……信じられないことですが、貴女様は人類の悲願である神骸をこの世から消し去つてしましました。そして、それを成した貴女様は今後どうするのでしょうか？」

「考え中よ、情報が足りないの。貴女には有益なことからくだらないことまで、全てを話してもらうわ。構わないわね？」

「私は継承者様に対し等しく味方である存在です。求められるのであれば答えます」

淡々とした受け答えだ。好意などないことは見て取れる。むしろマイナスだろう。だが、カミラにはそれで十分だつた。考えることはあるだろうが、今は棚上げしておく。

間違つてゐるかは置いておいて、記憶に新しくなつたことは、神骸の伴侶やその目的と行動、血英概念の確立や修復など。分身ニコラとは違つた情報が得られた。ただ、どうしてもカミラが不思議に感じたのが過激になつていくミドウの行為が緩和されないことだ。シルヴァやジャックといったストッパーはどうしたのだろう。

「話を蒸し返すけれど、吸血鬼研究所の実験が年々過激になつてゐる

わよね。幾人の伴侶を半身不隨にした上に、命を使い潰しているし、総督府内から研究所へ糾弾はなかつたの？」

「されではいます。ですが、姉妹だけでなく、他の皆様方も自らの意思で協力していますので。実験における手続きも不正はないと聞いています。要因を挙げるとするならば、日々減っていく血涙や資源により、皆様の不満が溜まつているのでしょうか。総督府における研究機関への強制力がままならぬのが実状です」

「中枢部内でさえも倫理を欠いて現状を解決して欲しい人がいるつてことね、なかなかに地獄じやない」

クイーン討伐時期よりも国全体のモラルの低下が起きているようだ。カルンシュタイン姉弟の生活やオリバーの話を合わせて考えると、そのうち内部崩壊する可能性もあるのではないか。

これまでの話をふまえ、伴侶から内なるクルスへと話相手を変える。

(さて、場当たり的な行動を終わりにして明確な目標を決めましょうか。でもその前に、クルスのやらかしました感はなんなの?)

『……言わなきや駄目?』

(教えてくれると嬉しいわ)

『あいつが人の想いの欠片を直せる、血英が修復できるって聞いて思つたんだけど……』

(ええ)

『たぶんだけど、神骸集めて、そこらにあるヤドリギにまとめてINすれば……カミラの肉体を修復した時みたく“アレ”を蘇らせます……ついでにアレからわたしの残滓を完全に取り払うこともできます……要は普通の吸血鬼にもどつて暴走しません』

(んんんく…………それは……やつてしまつたわね)

『うん、やつちやつたねえ。他人の想いの修復なんて頭になかつたし。つていうかどうでもよかつたし』

(確認までに、4つでも修復できるの?)

『できるけど、4個なら丁度半分にされるね。本来の年齢の低下、記憶の欠落や体の基礎能力の弱体。寿命なんかも縮むかな？ 今のところ短命じゃなかつたら熟女で死ぬ域』

（回収して、入れ物での保持はできるかしら？）

『んー、もう一度接触してみたいとわからないね。あと、わたし達が神骸を受け入れるのはなしつて方向で。同居なんて、わたしが許さないから普通に弾くよ。むこうがしつこいなら壊す』

（大崩壊でも起きそうな、そんな恐ろしい真似はしないから安心なさい。差し当たり、シルヴァの娘から力を奪えるのね？）

『直すの？ 自分で言つておいてだけど、わたし、嫌だよ？』

（生き餌で父親が釣れないか考えていてね。早い話、シルヴァやジヤックに気遣うのは止めにするわ。色々と考えただけれど、どうしたって私達が外の世界で行つた所業を知れば敵対するでしょうし。私達発見器もどうにかしたいわね）

（伴侶達があんなにも健気に継承者のために行動するのって、母親を想つてのことだと思わない？）

『あ、ーあ、ーあ、ー、聞こえません』

（初めはシルヴァの娘の復活なんて半信半疑で効力は薄いけれど、後から効いてくるわよ。そういう訳で準備していくね）

『決定事項とか鬼過ぎる……』

（何も伴侶達の殺害を禁止とはいわない。状況次第よ。シルヴァの娘の復活も。これなら譲歩できるでしょう？）

『…………メイド服』

（メイド服？）

『趣味全開のメイド服着て、給仕でわたしを喜ばせて。時間は経つちゃつたけど、作法は覚えているよね』

（…………あの固定砲台以来、味を占めたわね……いいわ、呑みましょ

う。作戦の幅が広がるくらいなら安いものよ)

### 『よし、取引成立』

内なるクルスは不承不承ながらも、カミラためだと言い聞かせて半ば承諾した。カミラも嫌な思いを受けたが、脳死して殺すだけの日々より良いだろうと承諾。

(敵は潰すし、中立には後ろを預けない。関わり合うと厄介になる者は無視するのが定石なのだろうけれど、ミドウなのよね……場合によつては妥協もなく、とことんやるわ。まだ明確に私達の存在に気づいていないだろうから、その優位を生かしましょ)

そうして話が一段落すると、意識を切り替えてネレイスとの話に戻る。ネレイスには考えにふけ込んだカミラが答えを出したように見えた。

「ネレイスと呼ばせてもらうわね。目的を定めたわ。貴女、私に手を貸しなさい。役目をあげる。継承者の神骸を受け取ることよ。伴侶を生み出した貴女達の母親を蘇らせ、且つ、クイーンの力を排するわ」

それはネレイスにとつて想像を上回る提案に息を呑む。欲しいもの目の前に出され、欲望を刺激するそんな提案。心の動きが乏しいはずなのに振り回されたばかりだ。欲求が首をもたげる。

「お母様を……？　本当に可能なのですか……？」

「この力が通用するものだと確信したもの、貴女も力の一端が目に焼き付いているはずよ。それを蘇生に変換させるわ。でもただとは言わない。協力する条件を提示するわ。他者への私の情報の秘匿と敵対者の排除。立ち塞がるだろう姉妹を想うならば説得することね」

全てはネレイス次第である。彼女がここで断れば伴侶達への交渉

が難航し、殺害率が高くなるだろう。それはネレイスも薄々感じている。

「……ですが、自らの願いを持つなど……それは原罪を、お母様が犯した間違いを繰り返すことにならないでしょうか？ 伴侶は寄り添うだけの存在なのです」

「ネレイスが望まずとも、私は貴女の母親が犯した失態<sup>ハタツ</sup>こと躊躇する。そこに変わりはないわ。そしてその時にネレイスがいるかいないかよ」

「どうして私なのでしょう……？」

「貴女の母親の復活の際、伴侶がいなければ蘇生が失敗するかもしない。一度は別の固体で成功しているのだけれど、ネレイスの母親は体が分割されすぎていてね、精神を呼び起させるか判断つかないの。その時に血縁や身内にいて欲しいのよ」

「総督府に協力を持ちかけるというのは……？」

「駄目よ、私はこの力を広める気はないもの。知られると狙われる力だわ、これは」

「何故、お母様を蘇生しようと行動を起こしたのです……？」

「蘇生はついで、裏切れない味方が欲しいの。母親のために行動している伴侶には特に有効みたいなのよ。今判明したわ。その気がなければ、貴女からの質問を浴びていなくていいでしょうし」

「私を試したのですか？」

「謝罪はするわ。ごめんなさい」

「本当の目的はなんなのです……？」

「本筋は変わらない、神骸の消失ね。それに色々なものが付随して形を変えているだけよ。ネレイスの母親を蘇らせるという具合にね。それで、そろそろ答えて欲しいのだけれど？」

伴侶を集め目的もあるが正直には話さない。ゆえに、全てはネレイスの次第なのだ。

けれど、ネレイスは迷いの顔のまま答えを出せないでいる。

『煮え切らないねー』

(母の蘇りにいい反応をしてくれていて、会いたい気持ちもあって、ますますどうすればいいのかわからなくなつたのでしようね)

とはいへ、繼承者を滅ぼしてから1日も経過している。移動時間を考えるならネレイスが答えを出すまで悠長にはしていたくはない。ヤドリギでの転移はできないのだから。

「迷つてゐるのね。であるなら、構いません。今は私の後についてなさい」

「何をするのです?」

「私達がしようする行いを見せるだけよ。悩んでいるのなら、今は従つておくといいわ」

その後、カミラは荷物をまとめた。仕度が終わると、伴侶を連れて次の棺を目指した。

火の降る街にてサーベラスの隊員二名は追つてくる墜鬼から全力で逃げていた。

「はつ……はつ……くそつ、何で今日に限つて墜鬼共の活動が活発なんだよつ!!」

「ツベコベ言わずに走るんだよお!!」

武器を持たずに隊員二人は走る。ひたすら走る。

瓦礫を走り幅跳びのように超え、落ちて斜めになつた道路を滑り、灼熱に燃える炎の床を走つていく。靴底が焦げることはない。耐熱の靴や装備を着込んでいる。とはいっても足を火傷する程度は負傷してしまつたので過信は禁物である。

隊員達は廃ホテルの角を曲がり、墜鬼達から視線を切ると建物の窓に飛び込んだ。荒れる呼吸を無理矢理手で抑え、息を潜めて待つ。地震のような振動と足音を鳴り響き、どたどたと走る墜鬼達が過ぎ去つていった。

音が完全に静まると、顔から手をどかし、吸いたくもない熱された空気を大きく肺に取り込む。

巡回しなければならない。なのに、巡回地点からかなり離されてしまつた。いつそ、このまま帰りたい気持ちである。

ミドウの部下に追い返され、探索地域が狭くなつて他の場所より仕事がかなり楽になつたと喜んでいただけに過去の自分を殴りたい気持ちだ。

「あー、やつてらんねえよ……! 高名な科学者が実験場にしてたつていう噂の場所、やたら強い墜鬼ばかりじやねーか! 墜鬼だから殺したつて無限に復活するし、棺に近づきさせたくないミドウの差し金なんじやねーの……!?」

「しかも暑い上に乾燥してるしな。帰つたら冷たい水をたらふく飲ん

で、水浴びしてえよ……」

嘆いている二人の下へ、もう一人の仲間が屈んだ姿勢で現れる。

「よう、お二人さんお元氣で」

「は？ お前なんでここにいんの？ カールはどうした？」

「はぐれた……」

「おいおい、大丈夫か？ 幾ら蘇る吸血鬼だといつても、相方が死んだら減俸ものだぞ？ 相手が黙ってくれていても、後遺症が残る可能性があつたり、記憶がなくなつたりするんだからな」

「いや、それがさ。ちょっと気になることあるーって言つて、先に行つちまつたんだ、あいつ。そしたら、墮鬼の群れに遭遇してしまつてさ、それで分断されてはぐれた」

「うつそだろ……ただでさえ急に押しかけてミドウ氏の部下をブチギレさせてんのに……ご愁傷様だわ」

落ち込むカールの相方を慰めながら二人。一旦態勢を立て直したが、頼りのヤドリギも滅茶苦茶に逃げたことでどこにあるかもわからない。妨害電波を発せられているらしく通信も上手くいかないのだ。金ぴかの鎧を纏つた人型墮鬼に圧倒され、逃げ惑い、消耗品すら使い切つた。そして、強力な墮鬼から逃げ切つたと思えば、今度は墮鬼の群れに遭遇である。

墮鬼は人間の頃より獣程度まで知能が低下している。知恵を使って上手く立ち回れば今ほど苦がない筈なのだ。しかし、その獣が罠に掛かってくれず、誘導にも引っかかってくれない。腕に覚えのある兵士でも手に余る墮鬼まで出現した。想定を上回る困難な任務に彼らは途方に暮れるばかりだった。

「——がつ……あつ!」

「感がいいのかしら? けれど、運が悪かつたわね。塵と消えなさい」

カミラはヤドリギから現れた治安部隊の一人を伴侶の斧槍で貫き、心臓を破壊した。斧槍を引き抜くと、斧槍を躍らせ、振るう刃先で屈強な男の肉体を分割する。男の体は瞬く間に崩壊し、物だけがその場に散乱した。

カミラ達は火の振る街に来ていた。棺の中で距離が近いということでもないが、ネレイスの証言により廃れた街中に棺があるということでこちらを選んだ。身を隠す場所も多く、街中ということで何かと言ひ訳をしやすい。

加えて、ネレイスによれば、地理的にミドウの研究所があるそうだ。既に捨てられた話だが、内なるクルスが何か気づくこともあるだろうと、そこに決めた。

結果、内なるクルスの言う事を素直に聞かない堕鬼がいた。金色の狩人というミドウの実験の過程で異形化した堕鬼だ。これには内なるクルスが激怒し、抑えていた気配が漏れ、ネレイスを怯えさせる。いつでも遊べるおもちゃに名前を書かれていてご機嫌斜めになつた。強制的に従わせることもできるかもしれないが、カミラが原因を特定したいこともあって強制は破棄。他にも問題があり、クルスから街中に電気や周波数を発しているものがあると知らせがあつた。堕鬼は置いておき、まずはそちらを優先する。

機器は隠しカメラで順次に破壊。通信機を妨害する電波装置もあつたりしたが、不都合はないので放置。また、棺の周辺にあつて欲しくないヤドリギを堕鬼に処理させ、味方の堕鬼に金色の狩人を研究所から引っ張り出させたり、カミラ自身は洗脳などを受けていそうな堕鬼の処分していく。

研究所は氣になるが、神骸を二の次にしてまで立ち寄る理由なく、あつたとしても薄い。ネレイスの信頼を勝ち取れていない現状、ここは我慢だつた。

それからは、味方堕鬼にどうなつているかもわからない研究所の内

部を荒させつつ、偶然鉢合わせを装つて、金色の狩人と遭遇をする。

特段苦戦もなく、カミラは見たこともない強力な個体だと四肢を切断して生け捕り。「ミドウの実験を受けていそうよね、何か知つている?」とネレイスに聞き、「被験者かもしませんが、そうではないかもしれません」とネレイスが判断がつかなく、カミラはすぐさま解体に移つた。

命を凌辱する行為にネレイスが引く中、カミラは血濡れになりながらも内なるクルスの指示通りに金色の狩人を弄繰り回した。その後、「機械が埋め込まれていたわね」と言つて、金色の狩人は放置する。

ネレイスを連れて金色の狩人の姿が見えなくなると、近場で待機していたクイーン側の堕鬼が金色の狩人を回復させ、現在サーベラス隊員を襲い暴れ回るとなつたわけだ。

しかし、時間を掛けていた間にトラブルが発生。内なるクルスにより、何者かが反復横跳びのようにヤドリギからヤドリギへと不要な転移を繰り返しているということだ。不確定要素は取り除かなくてはならない。

ヤドリギが減つたことで周囲一帯の瘴気が濃くなり、不穏な気配を感じたカールが厳罰覚悟で探しを入れたのだ。

カミラは一度、ネレイスと一緒にカールの様子見をした後、里斯ボーンキルするがごとく、ヤドリギからカールの出現と同時に彼を殺害したのだった。ネレイスから理由を問われた際には、神出鬼没で棺の接触現場に居合わせそうちからと答える。散乱した武器は回収しない。

その後も、鬼フェイスのプレートメイルを着用した者。ミドウの実験体を暗殺したり、面倒事を地道に減らしていく。派手さはなく、ひたすら地味な立ち回りだった。

やがて、あらかたの問題の処理も終わり、一息つく。海溝よりもするべきことが多い。

軽く休憩しながら、次の相手となる継承者がいる棺を高層建築物の上から眺める。高い位置にいるのに、熱風が体を温めてくれる。遠目から見たドームは海溝と違つて建造物で隠すように配置されていた。

「棺の近くに伴侶がいるわね」

「私には見えませんが、貴女様にはわかるのですね」

「それで、どうするの？」

「どう、と申されましても……決めかねています」

カミラは布越しにネレイスを顔を覗く。ネレイスは迷い子のようにカミラを見返した。

「気持ちは追いついていないのね。やつてから後悔するといいわ」

カミラは少しくらいなら待つていてあげるとネレイスに武器の返却を行い、ネレイスは促されるまま姉妹の説得へと向かつた。

ネレイスはカミラに付いていつてもわからぬことだらけである。他人の物であるカメラを見つけて破壊。堕鬼であつても吸血鬼であつても邪魔になつたり立ち塞がるなら殺害、気になるからと生物を解体するし、万人に受け入れられないと思われる行動ばかりだつた。能力も未知数である。カミラのスタンドプレーを見ていただけで、気持ちを定めるにはまだ足りない。

少なくとも、カミラが個人的理由から神骸を邪魔だと想い無力化させようと行動しているのはわかる。あくまでも個人だ。他者を想う母とは違う。

（ですが、感謝はするべきなのでしょう。役目から開放されたことで、考えることが増えましたけど……）

今の立ち位置に甘んじず、他の姉妹を助け、使命を全うできるように補佐する。使命の遂行を思えばそれが適切かもしない。他にも案を探すが、使命でしか生きる価値を見出せないせいで、考えを広げるというのが難しかつた。

(結局のところ、他の姉妹達も私と変わらぬ軌跡を辿りますし、こちらの方が無用な被害を抑えることができるはずです……)

母の欠片を集め、且つ、クイーンの力を取り除く。それが駄目でも神骸の破壊は確実にできていた。どちらにせよ、伴侶の役目は遠くない内消える。

(耐えられるでしょうか……？ 姉妹達は、信じてくれるでしょうか……？ 私の話を)

継承者に固執する分、他者への興味を割くりソースが少な過ぎて、姉妹でも手を取り助け合わない自分達に不安を覚えた。母親に興味を持つたのは、全てを失った自分自身だからかもしれない。

そろそろ自分と瓜二つの姿が見える。ネレイスは離れた場所から見守る伴侶へ声を掛けた。

「テーベお姉様、久しく、顔を合わせます」

「ネレイス……？ どうしたのです、あなたの寄り添う方はこちらにはいませんよ？」

「込み入った事情があるのです。与太話に付き合つて頂いては貰えませんか？」

「……よいでしょう」

このまま追い返してもすぐさま継承者を守ることはできない。何より、テーベは姉妹の個人的事情から声を掛けられたのは初めてだ。テーベはネレイスがどうして話しかけてきたのかが気になり、会話する姿勢となる。

まずは第一関門突破。早く継承者の下に向かうのだと言つて融通の利かない場合もある。

「私達の終わりが近づいています。神骸を完全破壊できる継承者様がお

出になられました」

ネレイスの言葉にテーべは息を呑む。自分達の根幹を揺るがす事実だ。

「……真偽のほどは?」

「私の目の前で継承者様が神骸と共に亡くなられました。その後の再結合も確認できませんでした」

「下手人は今どこに?」

「この付近におられると存じます」

「ネレイス、貴女が連れてきたのですか?」

「いえ、テーべお姉様も知つての通り、私達は継承者様の居場所を特定することが叶いません。後についていったのです」

「ふむ、その方より先回りしたのですか? 継承者様を倒す方相手に上手く立ち回りましたね」

「違います。その方に言われ、テーべお姉様を説得にきたのです」

ネレイスの言葉を受け、テーべの優しげな雰囲気が一変。態度が硬くなる。ネレイスは嫌な予感を覚えた。

「説得、……説得ですか。ネレイス、貴女の言い分が事実であれど私の行動指針は搖るぎません。只、継承者様と共ににあるのみ……」

テーべの様子から聞く耳を持たぬのだと悟る。説得は失敗だ。

テーべが斧槍を構え、攻撃的な視線をネレイスに浴びせる。ネレイスはテーべの気持ちがわかつた。役目を頑なに守ることで自身の心を守ろうとしているのだと。母の願いから目的に沿つて動く自分達から役目を取り上げるのは死の宣告にも等しかつた。

しかし、気持ちを理解できるからと、ネレイスとて黙つて攻撃を受ける訳にはいかない。

テーべの突きが迫りくる。ネレイスは斧槍でテーべの突きを絡み

上げ、双方ともに斧槍を高く掲げる。

だが、テーべは絡み返し、斧槍を振り下ろしてネレイスの斧槍を地面に叩きつけた。ネレイスの獲物だけ地面に刺したのだ。

武器を手放してしまうと危機感を持ったネレイスは柄の部分に体を預け、無理やり横に回す。斧槍の大回転の振り回しにテーべはたまらず後ろに下がつて避けた。

互いに斧槍を構えた。仕切り直しだ。互角である。さもすれば相討ちすらあるだろう。

ネレイスは苦心する。今のテーべには自身の言葉は届かないだろう。戦いの空気となり、説得できる状態ではない。一進一退の攻防。ネレイスではテーべを無力化するのも難しい。

双方相手の出方に注意を払っていると、テーべは背中に最近慣れたおぞましい気配が塗りたくられた。

「交代よ」

静観していたカミラが見切りをつけ、二人の前に現れた。慣れたもので、ネレイスは唐突の出現でも呑まればしなかつたが、テーべは初の遭遇である。

カミラの気配が前回より抑えられていても、テーべは湧き上がる感情の奔流に耐え切れず、カミラへの殺意を露わにし、ネレイスを無視してカミラへ攻撃を仕掛けた。

『牛かな？ 赤い布を見ると攻撃的になるところとかそつくり』

（真っ直ぐ体に向かって来ているじゃない。闘牛士だつて直接体に布を巻いたりなんてしないわ）

『あ、その布、絶対に外れないから大事に可愛がってね！』

（そこそこ大事にしてるわよ）

軽口を叩いている間にも、テーべの攻撃は迫る。冥血を消費して技

の威力を高め、さらに鍊血を行使し、刀の居合いに似た一閃をカミラに放つた。

血の技による赤い熐光を撒き散らし、テーべはカミラの上半身を叩き切ろうとする。けれども、カミラは手をオウガ型にして刃を掴み、技を阻んだ。甲高い音が鳴り響く。

カミラはそのまま手を引いてテーべから無理やり斧槍を奪い、横に捨てる。

武器を捨てたことでテーべの手もつられ、テーべのわき腹ががら空きなり、カミラは膝蹴りを放ち、テーべの腹部にめり込ませた。

「かはっ」と、テーべがえずき、硬直したところで、カミラはテーべの背後に回つて組み付き、首に片腕を回して一気に締め上げた。

きゅつと締められ、呼吸を奪われたテーべは失神。『荒事屋みたいだねー』と内なるクルスに感心される中、動かなくなつた彼女の首から手を離し、力を失つたテーべを支えた。呼吸を吹き返しているので死んではいられない。

それからネレイスを呼び寄せ、テーべを預ける。

ネレイスはしつかりとテーべを抱きかかえ、実感する。預けられた姉妹が重く、温かいものだと。姉妹が生きていてくれたことに心の底から安心したのは初めてかもしれない。

カミラはテーベを渡し終えると、テーベの武器を持つて、一連の流れを見ていたであろう恐ろしい形相をした継承者のもとへ歩みを進めた。

体長3メートルは超えているであろう雌猫の異形。尻尾を逆立て、自身を睨む継承者を前にカミラは壁一枚挟んで対峙する。

「君達が傷つけた子、テーベって言うんだけど、今その子どんな感じなの？」

語氣を強めにカミラを責めた。

猫型異形のエミリー。崩落した建物が邪魔で全ての出来事は見ていないが、大事な伴侶が容赦なく腹部に膝を入れられた上に、組み付かれた後動がなくなり、平静ではいられなかつた。

「安心なさい、吐血もなく、骨も折つてないわ。今は意識がないくらいよ」

エミリーは安堵した声を漏らす。幾らか冷静さが戻ると、どつちが先に仕掛けたかを聞いて、自分の家の子が原因だと知り素直に謝罪をした。

ここまでやり取りをじつと眺めていたクルスは、棺というものが基本的に情報を遮断するものだと感覚で理解する。クルスは思つたことそのままをカミラへ伝え、カミラはそれを了承した。

カミラに予定の変更はないが、会話は続けることにする。

「堕鬼になつてゐるのにも関わらず、理性が丸々残つてゐるのね。結構な事実よ、これは。普通なら、異形化する前から暴走してゐるのだが

「嬉しくないことだけど、特別だからね私つて……もちろん、君もそういうやないかな？」

「何故かしら？」

「だつて、伴侶を連れているし」

エミリーは離れている伴侶達に目をやる。見知らぬ者を追い返さないのはネレイスの存在が大きかつた。

「あの子は拾いモノよ。彼女、大事な人を亡くしてしまったみたいですね。縁があつて保護している最中なの」

「そうなの？ ジやあ、ラザフォードさん達みたいな処刑人じやないんだ。てつきり、私を処分する君達をテーベが止めたんだと思つてた」

「処刑人ではないけれど、ジャック・ラザフォードとは仕事仲間だったわ」

「だつた？」

「クイーン討伐に参加したつてことよ」

「それ、定義広すぎ。あの戦争に参加する人は沢山いたでしょ。でも、だとすると、君は一体何をしにここに来たの？」

「ジユウゾウ・ミドウって知つてる？」

弛緩してきた雰囲気だったが、ミドウの名前が出たことでエミリーの体が固くなる。真顔だ。

エミリーにとつてミドウは悪逆の主人である。孤児である自分達を引き取り、戦争に送り、さらには吸血鬼にさせて、眠る仲間を人質にした怨敵だ。挙句の果てには化け猫にもなつたのだから積もる憎悪はあるある。

化け猫の顔に憤怒を浮かべるエミリーだが、カミラにとつてその表情はわかりづらい。そもそも見えないわけだが。

けれども、会話の流れや空氣から察することはできた。エミリーから明確な怒りが伝わってくる。わかり易い態度のおかげでミドウのことを悪く話してもよさそうであった。

「私、アレから散々迷惑を被ったの。貴女もわかるでしょ？」

「……そうだね、とてもよくわかる。ヤクモ兄ちゃん達のことがかつたらズタズタにしてやりたいくらいだ」

「らしくなく感情的になつて、総督府に加入しなかつたのよ。そういうわけで組織の事情には疎くてね、吸血鬼研究機関の、ミドウの嫌がらせになりそなことだつたら何でもいいわ。教えてください？」

「いいけど……私はこの姿になつてからずつとここから離れられないの。だから、あんまり期待しないでね？」

「もちろんよ」

話が一旦途切れると、エミリーが伴侶達を気にかけた。カミラとしてはこのまま話を続けたかつたが仕方がない。

「……話の前にあの子達を連れてくるわ」

エミリーが指摘する前に行動することにした。

カミラはネレイスのもとへ行き、軽く現状を説明した後、ネレイスにテーベを背負わせ、カミラ自身は彼女達の武器を持つ。

それからカミラはエミリーの前へと戻り、伴侶達を横へと置いた。エミリーはテーベに目立つた外傷がないことに一安心する。

氣も落ち着き、エミリーはカミラが知りたいであろう情報という名の悪口を始めた。

カミラは昔、ミドウを調べたこともあつて既知な部分があつたが、実体験者から語られる内容は生々しい。その中でも氣を引いたのはミドウが継承者でないことだ。

神骸を受け継ぎし者は基本、自身の最期の場所を決めてそこで残りの余生を過ごす。自由に出歩く例外は、暴走の兆しで継承者達を処断するジャックとその受け取り手のパートナーだけである。

ミドウ本人も情報には氣を使つていてエミリーが知るのはやらされた実体験ばかりであつた。それでも、ミドウが他人を使う前提で神骸を実験物として受け取つたか、本人が人柱になるから受け取つたか

で彼の立場を揺るがす事実にはなりそうである。

なお、この嫌がらせ。問題となるのはこれからエミリーをこれから殺すことであろう。前回と同様、異形化したことで神骸と密になり、それ単体を剥がせない。神骸集めもあるし、行動に変更はないのだが、さて、カミラはどうするか。

「いろいろ話ばかりしてたかも、何かごめんね」

「私はお願ひする側だもの。感謝こそすれど、文句はいえないわね」

「ありがと」

エミリーはカミラから伴侶達に視線を移し、テーベを見る。

「君達に聞きたいことはあるんだけど、その前に。テーベをこの中まで連れてきてくれないかな？ 時間も経つて、いつ堕鬼が襲ってくるかわからなし、心配なんだ」

「貴女、閉じ込められているのではなかつたのね」

「その気があるんだつたら自由に出歩けるけど、神骸について知つちやうと閉じこもるしかなくてね。ミドウだけじゃなく、悪意ある人が利用するかもしれないし」

「私達はいいのかしら？」

「テーベを置いたらすぐに外に出て欲しいかな。実はまだ話せることがあるんだよね」

「不気味に笑うのね」

「酷いなあ、憂いなく口を軽くしたいだけじやん。話さないってことはないから安心してよ」

「……わかつたわ。ネル、武器を預けるからその子を貰うわよ」

ネルという名前に要領を得られず、カミラの顔を見てぼんやりしていたネレイス。やがてカミラの意図に気づき、静かに頷いて、膝枕をしていたテーベを抱き上げカミラへ捧げる。

カミラは地面に2本の斧槍を刺し、テーベを受け取ると、お姫様

抱っこをして棺の方へと歩いていった。エミリーもカミラに合わせるよう後ろへ下がる。

壁と対面。エミリーに暴走の気配はない。正面の壁は周囲の壁よりも薄く半透明だ。カミラは薄い壁を潜り、そして抜けた。

1歩、2歩と進む。クルスの思考錯誤もあって真っ先にエミリーに異変が起ることはない。だが、3歩でエミリーの様子に異常が表れる。海溝の継承者と同じだ。苦しみ、燃やしつくさんとばかりにカミラへ殺意を放つた。

『確定だね。この中で戦えば、他のアレに気づかれる事はなく処理できるよ』

（僥倖。危惧していた展開は遠のいたわね）

クイーンの力の放出により場所特定から即座に総督府側が対応することはなくなつたと薄く喜ぶカミラ。そこへ、クルスがわたしはおうさつしたかつたけどねー、と口を溢した。

この互いに温度差がある中、エミリーは戸惑いながらも殺意を押さえ込めようとする。

「う、嘘…………なんで……意識がなくなるまで……時間がかかるはずじゃあ…………うぐう…………っ!!!」

湧き上がる破壊衝動に呑まれそうだ。溶岩で煮込まれるように体が熱く、自我が溶けていく。意識が朦朧としてきた。

暴走が何故始まつたのかわかりようもなく、考える余裕もない。たある日突然、人が死期を悟るように、唐突に人生の終わりがきたのだと理解する。

逃げて。そう大声を放とうとしてた矢先、エミリーの目にブラツドヴエイルのステインガー型が視界に映り、気づいた時には自身の心臓を貫いていた。

青い血液が地面を汚す。

ステインガー型を誰が放つたか伸びた尾を追えば、ブラッドヴェイルを持たないはずのカミラがスカートを巻き上げ、尾を生やしていった。

カミラが目元を隠しているがゆえにエミリーには表情がわからぬ。判別できる限りでは、悪意は見られず、無感動で、感情もなく、起こつてしまつた出来事を淡々と処理するようなそれだつた。事情を知つてゐるからこそ即座に対応できる行いに見当違いの考えがよぎる。

——なーんだ、やつぱりラザフォードさんと同じ処刑人じやん。テーベは私を守つてくれようとしたんだね……。

意識が暗くなる中、最後にいじらしい子への温かさで心の隙間が埋まる。

——でも、これでようやく眠れる……心残りはあるんだけどね……。

最後くらいはヤクモ兄ちゃんに会いたかつたな、と呟いて、目覚めることのない夢に落ちた。

エミリーの死に反応したのか、カミラに抱かれたテーベは目を覚まし、左胸から青い血液を滴らせるエミリーにテーベは顔を真っ青にする。

状況がわからずとも、棺の中にはエミリー以外いるはずがないことを知るテーベは抱かれた体勢のままカミラの胸に手を向けた。

テーベの動きに気づいたカミラは、抱えた状態のテーベを真横に回転させて離す。テーベは不自然な姿勢で執拗にカミラを狙い、炎の鍊血を放つたものの、服の端を炙るだけで燃えさせることはなかつた。だが、その争いが、エミリーに起きた変化の対応を遅らせる。

『カミラ、大変！ アレが分裂しようとしてる!!』

心臓を貫かれた化け猫はその質量を残したまま、背中からもう一体の化け猫を生み出す。分裂し、一際大きくなつた化け猫が上空へと跳んだ。

化け猫は上空に浮かび上がりながら2本の尾に人ほどの大きさの火の球を練り上げ、高いドームの壁に張り付くと、尻尾をカミラとテーベに向け、敵味方なく火球を交互に連射し始める。

カミラとしてはテーベが死ぬのは構わない。テーベの運が悪ければ灰化すらありえる。しかし、背後からネレイスの“テーベ！”という叫び声を聞いて、一時守ることに決めた。

カミラは片足を変質させ、杭のように鋼鉄化した足を地面に突き刺し、アイヴィ型ブラツドヴェイルをテーベの周囲に展開。地面から突き出た幾つもの剣の絨毯でテーベに飛来する弾幕を遮る。己に迫る火球は腕を盾に耐え忍ぶことにした。

着弾するごとに広がる爆発。灼熱の爆風が服を焼く。触れた時点では灼熱が渦巻くのが厭らしい。下手に触れていれば顔面に直撃を受けるところだつた。以降も化け猫の連射は止まらず、爆発が重なり、煙を瞬く間に広がつた。

カミラは戻したステインガー型で縦に一閃。化け猫の攻撃を中断させる。

ステインガー型のはらいに巻き込まれ、煙が晴れる頃には、浄化マスクは吹き飛び、服の一部は焼き焦げ、靴はアイヴィ型の膨張によつて弾け、カミラは見るも無残な格好になつた。また、地面のあちらこちらにクレーターができている。

幾度となく火の球をまともに浴び、肌は煤けているが、持ち前の耐性によりダメージはそれほどもない。むしろ、久々の痛みに闘争本能が刺激され、気分が高揚する。

『あーん、もうつ、カミラの服がボロボロだよ！ せつかくわたしが選んだのにい!!』

(どんでもない熱量ね、伴侶を炙り殺す気かしら？　おかげ様で私の服もこんな有様だわ)

『次、次の服もわたしが選んでいいよねっ!?』

(……ほどほどにね)

戦闘中なのだから自重して欲しかった。一方で、内なるクルスはお構いなしにきやあきやあと黄色い声で喜ぶ。

それはそうと、アイヴィ型で四方に壁を作り、伴侶を守ることはできた。けれども、化け猫の攻撃性能のせいで身動きが取れそうもない。ステインガー型を伴侶に巻き付けて行動することも考えるが、下手をすれば爆風で焼死してしまう。

(神骸、分裂した方に移っているわよね?)

『そうだねー、海溝の時みたいに強化されたつていうおまけ付きだよ。カミラが昔、ラストジャーニーで急激に身体能力を向上させたのと似てるね。こっちの方がふれ幅が大きくて恩恵が多い分、死に戻りしても後戻りできないだろうし。でもつて、一撃で倒してもまた分裂するかも。だけど生命力が減ってるっぽいから、繰り返し倒していくばそ内の内限界をむかえると思うよ』

(アイヴィ型で面攻撃をすれば決着は早いのだけれど……)

『ん？　まだアレの娘を守り続けるの？　さつきの爆撃で運が悪かつたら焼け死ぬだろうけど、どうせ復活するし、一度くらいいいんじやないかなー？』

クルスは軽く言うが、周囲にヤドリギがなく、棺の情報閉鎖された環境では蘇る確率は薄い。カミラはテーべがここで死ねば滅ぶだろうと予期している。ゆえにネレイスがどうしたいのか、カミラは棺の外にいる者に意識を向けることにした。

「お願いします、ティーべお姉様を生かして下さい！　私達が生きるには思い出が大事なのです……！」

「姉想いね、高くつくわよ」

「……お望みのままに」

ならば話は早いと、カミラ達はアイヴィ型を囲う四角から三角錐に形を変えて、刃の温度を下げ、熱気で疲弊しているテーべを隔離する。守りについてはこれ以上必要ないだろう。この先は相手の出方を見ることにした。

化け猫も化け猫でカミラ達を様子見していた。並みの吸血鬼よりも潤沢に使用できるとはいえ冥血にも限りがある。さきほどは大盤振る舞いだ。効果が薄いのなら続けるつもりはない。化け猫は行動を変え、壁を横に駆けながら鍊血を使用し、炎を纏つたクナイを3本同時に投擲した。

投擲したクナイはカミラへと真っ直ぐ突き進み、3本まとめてカミラの鋼鉄の手で受け止められ、そして、返される。

一本ずつ順次に返されたクナイを化け猫は全速力で駆けて避けるが、最後の一一本は間に合わず、足に被弾し、危うく落ちそうになつた。けれど、爪を立て、両手で踏ん張り態勢を立て直す。

化け猫にとつて地上は死地だ。ステインガー型の速度に対応できないのだから、分の悪い近接戦闘はしない。それに大きな隙を見せても追撃がこなかつた。高所にいる限りは安全だと再認識した。

であるならと、化け猫は余裕を持つて火の玉を練り、直径5メートルはあるであろう火球を投げ込む。しかし、その大きさゆえ、火球は落下の途中でステインガー型に斬られ、化け猫をも巻き込む大爆発を引き起こした。

大爆発の波動により棺の壁が揺れ、爆風の余波が棺内で反芻する。化け猫は大爆発の煽りを受け、壁から手足を離してしまった。だが、宙で分裂し、抜け殻を足場にして天井の壁に張り付いた。攻撃範囲に入った抜け殻はカミラがステインガー型で処理を行い、肉塊を地面に撒き散らす。肉塊は燃えるように赤く燻り、崩れて消えた。

分裂したことで化け猫の体力はさらに減る。けれど、体力はまだ余裕だ。一方で、届かない場所から小出しに攻めてくる化け猫に、内な

るクルスが怒りのボルテージを上げていた。

『うつづああいっ……！　弱い癖にいい気になつてえ!!　暴走している  
んだから獸らしく攻めてきなよ……!!　なんで知恵を働かせてるの  
!!?』

殺してやるから早く降りて来いと内なるクルスはぶんすか怒り、地  
団太を踏む。

(……今更だけれど、クイーン討伐時期の最終決戦つて、クルスが高所  
からヒットアンドウェイで隠れながら攻め続けていたなら、あの時の  
メンバー、敗北濃厚だつた氣がするわ。いくらシルヴァアが肅清の棘を  
防げるといつても、長時間持続はできないのよね)

『や、趣味じやないもん。こう、真正面からころころしたい!』

(うーん、この残虐性。血を取り込む他に鑑賞するのも好きなのよね。  
なら、クルスの趣味に合わせて真正面からいきましょう。私も、この  
高ぶつた気分を発散させたいわ)

やつちやえー、とクルスから応援と期待を受け、カミラは動いた。  
まず、アイヴィ型を切り離す。短時間でしか形は維持できないし、  
気配云々あるが、最後にはクイーンの力が必要なのだ。構わず実行。  
次に片方のみの靴を脱ぎ棄て、自由になつた足で助走。その間にオ  
ウガ型を本来の大きさに戻し、より誇大化させ、跳躍。放たれた弓矢  
のように跳んでいき、攻撃有効範囲内まで距離を一気に稼いだ。

分裂し危機から逃れた化け猫であつたが、突如カミラが動いたかと  
思えば、あつという間に中距離まで距離を詰められて動搖する。相手  
はすぐ近くにおり、攻撃の有効範囲だった。

今から背中を見せるのは不味い。逃げるより迎撃することを選択  
する。背中から小太刀を抜き、2本の尻尾をカミラへと向けた。

化け猫が最初と同じように火球を連射すると、カミラはオウガ型を  
盾に真正面から火球を受ける。爆発の中を突き進み、灼熱をものとも

せず、誇大化した手で化け猫の頭を掴むと壁に叩きつけた。

化け猫はめげず、小太刀による鋭い剣捌きでカミラの胴を狙うが、ステインガー型に弾かれ防がれる。

化け猫を壁に押し付けているカミラは、空いた方の手で化け猫の肩を掴むと、一呼吸入れて無理矢理半回転し、化け猫と上下を入れ替えた。

丁度化け猫が真下になると化け猫から手を離して背中に乗り、蹴りを放つて、地面へと蹴り落とした。

化け猫は地面に対してもう一度伏せゆえに手足を生かして叩きつけられる衝撃を殺し踏ん張つたが、その間にもカミラは化け猫を蹴つた反動で天井に到達し、クルリと一回転すると天井を蹴つて地面に着地する化け猫へ急降下。硬直する化け猫へ誇大化したままの異形の手で襲う。

化け猫は横に転がつて避ける。が、息つく間もなく、土煙を巻き上げて地面から直角してきたカミラの突進を受け、誇大化した異形の手で壁際にはじ付けられた。

これでは分裂で逃げられない。一度棺を開放して逃走を図ろうとするが、棺の壁がなくならず、顕在したままだ。そうしている間に、カミラから重い拳を腹部に叩き込まれる。肉が振動し、固いものが折れる嫌な鈍い音が内に響いた。

カミラはもう片方の手も異形かさせると、殴った手と交代してもう一度殴りつける。顔を殴った化け猫の目のレンズが砕け、顔にヒビが入つた。

そして

殴つて、殴つて、殴つて、殴つて、壁に押し付けるように殴り続けて。

意識を失おうが、肉がすり潰れようが、肉片がそこらに飛び散ろうが、化け猫の息の根が切れるまで拳を繰り出し、カミラは無言で殴り続けた。ミンチされていく化け猫、体を揺らされ続け、命の蠟燭が消えるまでそう時間はかかるないだろう。

途中、テーベを隔離するアイヴィ型が解け、感情的になつたテーベ

がカミラを襲つたものの、カミラはテーベをステインガー型で捕縛し、拘束して宙釣りにした。

やがて、原型をとどめず何の肉かわからなくなる頃、化け猫の肉体が蒸発し、青い光を放つ。死体のあつた場所の上で結晶の塊になると、一つの神骸となつて現れた。

カミラはそこでようやく手を止め、再生する神骸をアイヴィ型の剣山で突き刺す。あとは内なるクルスの仕事だ。

刃に貫かれてもなお再生する神骸へ、クルスがうによによんと頭を喰らせ力を行使する。神骸は淡い光に包まれると、燃え、次第にその大きさを縮ませていった。

宙に浮く神骸が指先程度の单なる青白い宝石になり、カミラはそれを手に取り回収した。これで無力化した神骸は二つ目となる。

『あー、めんどー、めんどー。壊せば一瞬なのに、調整して細工を施すのつて纖細すぎー。妙に疲れたー』

（ありがとう、お手柄よ）

『ん、カミラのその言葉でやつた甲斐があるよー。それで、前に話した通り、小さな入れ物に入れちゃつても大丈夫だよ』

内なるクルスはぐーと伸びをする。機器の探知に、神骸の無力化及び加工。周囲の気配に気をやり、墜鬼の指揮など。慣れないことの連続や作業の同時並行。流石に疲れた気分だつた。

カミラは陰ながら支えてくれたクルスの代わりに棺に干渉し、外にいるネレイスを中に入れる。

「継承者様、浄化マスクが……」

浄化マスクを失つたカミラにネレイスは自身のマスクを外して渡そうとする。瘴気が濃いのだ。血の乾きによる暴走をさせるわけにはいかなかつた。

だがカミラは、ネレイスの浄化マスクを抑え、外そととする行為を

中斷させた。

「やめて、必要ないわ。ネレイスの想定以上に私の耐性は高いの。今すぐどうこうはならないから」

私の体に気をつかうならこれを受け取りなさい、とカミラはネレイスに神骸石を差し出した。

ネレイスはカミラを心配するが、カミラから断固として受け取らない気配を悟ると諦めて神骸石を受け取る。それから、カミラから渡されていたアミュレットを取り出し、嵌め込み部分に嵌め込んだ。

神骸石が周囲の明かりに反射して光り、ネレイスは石から伝わる温かさに目を細め、石の部分を優しく撫でる。

「……お母様の意思を感じます。それと、安らかです。本当に暴力の化身たる力を取り除いてしまうだなんて、感謝の念にたえません」「クイーンの意思を完全には取り扱えないわ。わずかに混じつてる。本番は本人の復活の際ね、油断はしないで」

「はい、仰せのままに」

「それはそうと、この子、テーベと言うのよね？」

カミラは二の腕ごと拘束したテーベを引き寄せてネレイスに見せる。

「はい、テーベと呼ばれています。私より先に創られた姉でございます」

「途中まで元気だったのだけれど、さつきから抜け殻みたいなのが。どうにかして頂戴」

言うが早いが、カミラはテーベを地面に下して開放し、彼女から離れる。ネレイスはカミラと入れ替わるようにテーベと接し、寄り添つた。しかし、ネレイスが語りかけても無反応だ。この前の自分と同様

であり気持ちは理解できた。

けれども、カミラのオーダーはテーベに感情を戻すことである。ネレイスは思案し、自分の手にあるものは何か考え、とあることを思いついた。

ネレイスは所持していたアミュレットをテーベの手に握らせる。すると、テーベの瞳に光が戻ってきた。テーベは石から伝わる温かさに、子供のように両手でアミュレットを固く握り、静かに泣き始める。カミラはその二人の様子を眺めていると、気の抜けたクルスから警告が入った。

『……んむー、金ぴかが頑張つて追い払つてるけど、追加の人員あつて、筋肉達磨達が来ちゃうよ。どうする？』

（いい時間だもの、逃走するとしましようか。クルスは休んでおいて、後の処理は私がしておくわ。墮鬼の指揮も譲つてくれる？）

『ふえー、いいのー？ だつたら、甘えちゃおつかなー？』

（ええ、任せなさい）

そうしてカミラは証拠隠滅などの事後処理を施し、二人の伴侶を連れて休める場所へ足を急がせた。

最近、総督府の頭を抱えさせる問題が発生した。墮鬼の活動が活発になり、中でも狂い咲く毒蝶や崩壊都市の下にいた浸潤の処刑者など、取り分け強力な固体の行動範囲が不定になつていて。また、弱小墮鬼はこれまで道理だが、毒蝶らの強力な固体がいる地域に限り下僕化し、その強力な固体と戦つている際には乱入してきたりして討伐が難しくなってきた。逆に言えば、組織立つて行動しているので発見が容易になり逃げやすくはある。

けれども、保護区などの拠点を持つ総督府は軍隊蟻のように通った道にいる生物へ捕食及び殲滅を繰り返す墮鬼を放つておけず、その脅威にサーベラス隊は立ち向かい、灰化したり、墮鬼の仲間入りするなど被害を拡大させていた。

様子見はできなかつた。強力な固体がいる集団はヤドリギを破壊しまうからだ。必ずではないものの、瘴気が濃くなるとヤドリギの枯れを加速させ人の住めない地域となつてしまふ。ゆえに対処しなければならなかつた。

単なる治安部隊ではどうにもならず、上級隊員が毒蝶らの目の前にやつとの思いで辿り着いても、毒蝶らにネームドのついた理由を教えられる。強力な固体さえ倒せば統率が取れなくなるはずなのに、討ち取れず、度重なる凶報を受け、総督府は遂にジャックまでをも動かした。

要請のあつたジャックは最初こそ表舞台は自分の仕事ではないと蹴つたが、増える犠牲と士気低下により動かざるを得なかつた。もちろん、ジャックに引けをとらない者はいる。だが、本拠地や支部から人を動かせば、背後からレジスタンスの襲撃を受ける可能性があつた。

ジャックはやもえず治安部隊と合流し、強力な固体の一體、最も保護区に近い狂い咲く毒蝶の討伐へ向かつた。

現場に到着すると上級隊員らが切り込み隊として攻め、ジャックと

エヴァアは後ろに続き、並みの隊員がさらにその後ろへと続く。鋒矢の陣形で弓で射つた矢のごとく突撃していった。

敵味方共に屍を積み重ねながらも総督府側は前進。ジャックとエヴァアは余力を残して毒蝶のもとへ送り届けられ、毒蝶と対峙。激闘の末、毒蝶を見事討伐した。

倒された毒蝶は、最後に断末魔を上げながら、薪が白く燃え尽き漣になるように地へ伏し碎けて消えた。

そして、毒蝶が敗北したことにより他の堕鬼の統率は失われ、散り散りに逃げたり、堕鬼同士が邪魔になり連携がとれなかつたりする。それを契機に各自が毒蝶が討たれたことを察し、士気が向上。治安部隊は歓声を轟かせて、毒蝶一派を壊滅させた。

次第に戦いの音も落ち着き、勝利したことでサーベラス隊員が喜び合う。ジャックの横でエヴァアが労うが、ジャックは素直に喜べず、苦々しい顔を作った。

「堕鬼共め、無駄に知恵をつけるか……」

ヤドリギを狙われる可能性はあつた、少なくともジャック視点では。

知性を失い獸のような存在になつたとはいえ、死んだふりをしたり、死角で待ち伏せしたりと何かと悪知恵を働くかせていた。強力な固体となればヤドリギから出現する敵吸血鬼の対策として、逃走経路を塞ぐ意味でもヤドリギを駆除するのはなくはない話だつた。

繰り返しになるが、堕鬼は死ぬことがあつても滅ぶことはない。毒蝶もいざれ蘇るだろう。レジスタンス問題もあるのにさらに問題が積み重なつた。テトリスのように消えてくれればいいのだが、そんなことはなく、ジャックの気が重くなる。

それから時間が経過し、場所は保護区にある総督府支部へと移る。ジャックは脅威を受けたと報告するため、支部の長のもとへ報告に訪れた。

その後、支部長への報告を済み、ようやく仕事が終わると思つてい

た矢先に、ジヤックは申し訳なさそうな顔の支部長から先ほどの悩みが可愛くなる事実を聞かされる。

「棺にいた継承者が2名も行方知らずというのはどういうことだつ！」

ジャックが棺の管理から離れている間に棺の問題が発覚。いい様に使われていただけに、流石のジャックも感情を爆発させた。

ジエスチャーリーし、怯える。 ジヤックに睨み詰み寄られ、支部長は手を前に落ち置いてくれと

「近い、近いってラザフオード君！　あと、顔怖い！　眼力やばいって

ふざけている場合じゃないんだぞ!!

ひひいい……!! れ歴戦の勇士の気迫に耐えれるほど私の肝は太  
くないんですううううう!!

支部長に詰め寄つたジャックの腕を掴むエヴァ。

「ジャック、焦る気持ちもわかるけど、少し落ち着いて。拠点長もそんなに近いと話しづらいと思うわ」

ジヤックは深く息を鳴らし、普段より目を吊り上げたまま後ろに下がる。

「はあ……これでようやく頭が回るよ。まあ、巡回に人を送り込んだ  
とたんこれなんだし、棺の監視者として怖い顔になるのもわかるもの  
だよ。ああ、でも火の振る街はミドウ博士が管理だつたね。で、話の  
続きなんだけど、そのミドウ博士がとんでもないことになつてゐるね。  
棺の中にいるはずのミドウ博士は実は繼承者じやありませんでし  
た一つね。それでもう大変で、重要書類の改ざんに加えてミドウ博

士の手がけた墮鬼がサーベラス隊を殺しまくつてゐるんだから総督府も顔を真っ赤におかんむり。しかも、サーベラス隊の吸血鬼の支給品がミドウ博士のテリトリーで見つかつちやつたもんだから変な憶測が飛び交うし、ミドウ博士も身内が裏切つたんじやないかつて疑心暗鬼。その情報が錯綜中、最近の墮鬼が活発になつた原因つてミドウ博士のせいじやないかつて矛先を向けられたもんだから博士も博士で怒るわ、怒るわ。全体がもう大混乱だよ」

あまりにも頭の痛い出来事だ。ジャックは言葉がでなくなり、片手をさまよわせては苛立たしげに頭を搔き筆る。それから少しして冷静さを取り戻すと、頭から手を離すと話に戻つた。

「……この際、あのマッドサエインティストのことはどうでもいい。問題は行方不明になつた継承者達の足取りだ」

「いや、ごめん。なーんもわかんない。伴侶も掴まらないみたいでね……睨まないでくれないかな？ オジサン泣いちやう。唯一わかるとすれば、単独犯ではないつことかな」

「話してくれ」

「あ、ああ、もちろんもちろん。ミドウ博士んとこの隠しカメラ全部壊されちゃつたみたいでさ。しかもミドウ博士の自信作の実験体も全部倒されて、パア。灰すら残つてないよ。その実験体、継承者並みのスペックがある話しなんだけど、そうなると火の振る街には継承者が4人分いたことになつちやうんだよね。暴走した継承者つてクイーンの力に蝕まれてて、毒蝶とかの強力な墮鬼より強いのにどうやつて倒したの？ つてなる。だからかな、弱点を突いて突破したつてことで、ミドウ博士は吸血鬼研究機関を疑つてるよ」

支部長の脳裏に個人で動いた可能性がよぎるもの、目的も手段もわからなくなつてくるので考えを否定する。また、クイーンが蘇つて秘密裏に行動するというのも、ひたすら目立つて暴れていた大戦を思えば馬鹿らしい話だ。あれは人の言葉を解さない獣である。

「あいつを出し抜ける組織は限られている。他に考えるなら、シリヴァ派かレジスタンスくらいなものだ。だが、シリヴァ派が内部を混乱させる理由がないな」

「そりなんだよ。なもんで、レジスタンスが持つていったと考えるのが自然なんだだけよね。レジスタンス独自のブラツドヴエイルもあるし、ミドウ博士ほどではないにせよ、いい技術者を抱えている。ただまあ、ミドウ博士も自信過剰なきらいがあるし、倒された実験体もスペックを盛っているんじやないかなあ？」

「何にしても、レジスタンスの幹部を捕まえて証明しなければ話の進展はなさそうだな。もしかすると、見つかっていない左の神骸を奴等が所持しているかもしれん」

「あー……確かに持つてそうだねえ。決め付けたくはないけど、他に思い当たる組織がないし。まあ、レジスタンスの件は私ら支部の仕事なんで、ラザフオード君は引き続き、適合者探しやら封印したバケモノの監視とかその他もろもろかな。それと、今まで二人つきりの行動のところ悪いんだけど、何人か信頼できる部下を見繕つて引き連れてね」

「理由は？」

「いやいや、ここまで話しておいてそれはないでしょ。ラザフオード君達は屈指の実力者とはいえ、一人一つずつ神骸を持つているじゃないか。二つも行方不明なのに、今まで通りの同じ仕事内容でつて訳にはいかないよ。あ、これ上のお達しだから、超怖い顔をしたつてオジサンじやあどうにもならないから。どうしても一人つきりで仕事をたいつてなら、総督府に籠りつきりの仕事になるからね」

「……動きが鈍くなるのは嫌だつたんだが、仕方ないか」「君達はワーカーホリック過ぎだし、この際、総督府でのんびりしたりとかどうかなつて思うんだけど」

「ミドウが研究を辞めたら考えんでもない」

「……はは、堕鬼が降つてくるか、世界が滅んだ後のどつちかじやないかなあ。彼、吸血鬼研究機関の統括の座から下ろされはするだろうけ

ど、研究員のままでいてもらわないといけないし」

「だろ、諦めろ」

拠点長はジャックから視線を横にずらし、エヴァにたまには長期休暇でも取つたらと目で訴えかけたが、エヴァは微笑むばかり。拠点長はにへらと笑い、最近の若い子は精力的に行動し過ぎて休みづらいと愚痴を零した。

その後、幾分か話し、ジャック達は部屋を退出する。

拠点長は人がいなくなると、部屋の周りをぐるぐると歩き周り、考えに耽つた。血涙の量が先細り、日々怯えるばかりのシルヴァの政策。人道軽視の吸血鬼の研究に、この度の継承者行方不明や研究の長の不祥事。暗い未来に拠点長の胃がきりきりと痛んだ。

拠点長は大きくため息をつき、椅子を引き出して腰をかけて座る。今更どうしようもない。リーグした情報が少なくとも、魔が差し、隠れてレジスタンスに協力しているのだ。今回の件に巻き込まれ、バレないよう祈るしかなかつた。

薄暗い夜闇。オリバーは黒い制服と最新の装備を身に纏い、ミドウが廃棄したといわれる研究所に来ていた。装備はレジスタンス専用のブラッドヴェイルと槌だ。海溝で渴求の暴君を撃破したことと、オルガの口添えにより、期待の新人として支給となつた。

今回の任務は総督府が活発になつた墮鬼の対応に追われている内に、捨てられた研究所を探索することである。メンバーはオリバー、オリフィア、生物探知の鍊血を得意とする元乾ききつた吸血鬼、細身の男ペーターだ。ちなみに、オリフィアもオリバーと同等の質の装備で片手剣を持ち、ペーターは一般的に支給される装備で銃剣を所持していた。

「ペーターさん、どうかな？あの吸血研究の第一人者ミドウ博士が造った墮鬼がこの近辺で暴れ正在のことなんだけど」

「あ、ああ、ちょっと待つてくれ。今確認する…………オッケー。すぐ近くにいなみたいだ」

さつそくお得意の鍊血を行使し、銃剣を構えながら体から赤い粒子を撒き散らす。半径200メートルほどの勢力を把握したペーターは手持ちの手帳型電子地図に大雑把なマークを更新した。なお、これほど高い探知能力はレジスタンスでも珍しい程度に希少である。

「えつ？　ここが火の降る街なの……？」

オリフィアは二人の会話から目的地付近に着いたのだと理解した。火の振るとの名称がつけられているのに、明かりもなく暗い。暑くもないのだ。廃墟のような市街地と大して変わりはなかった。

全然景観が違う、というオリフィアに対し、オリバーは苦笑を浮かべて答える。

「なんでも舞台装置が無くなつて街が燃えなくなつたみたいだね」「……ふうん」

オリフィアの態度にペーターはまたかと呆れる。出撃前に説明があつたからだ。

「ブリーフィングくらいしつかり聞こうぜ」

「要是でてきた敵を倒せばいいんでしょ？　さつさと行く」

オリフィアは疑問が解消されると他のことは興味がないとばかりに、剣を片手に先行した。

途中、少人数サーベラス隊を発見したが、オリバー達は逆探知され

ないよう距離を取りつつ移動する。墮鬼との戦闘も避け、遂に荒れ果てた研究所へと辿り着いた。内部に侵入すると、中は何かが暴れたように戸を荒れていた。

「これは酷い。廃棄するからって、ずいぶん力任せに壊したものだね。何かしら持ち帰りたかったけど、無事な機材はなさそうだ」

「中は期待するなつて話だつたんだ、仕方ないつて」

会話をオーリバーとペーターへ、五感を澄ませていたオリフィアが警告を発する。

「二人とも、この先に人の気配を感じる。注意して」

「いや、入る前に一度探ししたんだけど……？」

「その探し、遮蔽物とかに弱いじゃない」

ペーターも絶対の自信があるわけではない。無駄打ちにならないように祈り、鍊血を発動させると薄つすらとだが引っかかるものがあつた。

「あー……マジか、いるわ。あんた、やっぱ本気になるとすげーのな。いつもその調子で頼むよ、ほんと……で、さ。奥に一人いるけどどうするよ？ リーダー」

「……会つてみようか」

答えを出したオーリバーに、オリフィアがじと目で視線を突き刺す。

「あの人はいないと思うよ」「いやいや、違うつて。こんな場所に一人でいるんだ、もしかすると研究の関係者かも、とね」

純粋に任務をこなそうとしていただけに寝耳に水であつた。嫉妬

深いのも考え方である。けれども、指摘されたことで少し気になつたのも確かだ。

オリフィアというとオリバーが動搖することなく否定したので機嫌を直し、それを眺めていたペーターは嫌な笑顔でにやついていた。対して、オリバーは力なく笑う。色男とからかわれるのはいつになつても対応に困るものである。

ともかく、今は敵地だ。気を抜くのもほどほどにし、気持ちを入れ替える。そして、何者かがいるであろう奥地へと目指した。

フロアの奥へ進み、裂け目のような細い道を直進すると岩に囲まれた広場へと出る。その広場の真ん中で、オリバー達に背を向け、腕を組み、考えに耽る大男がいた。

大男は侵入者に気づき、振り向く。大男は3メートルも背丈がありそうな巨体で、全身白いフルアーマーだ。顔はフルフェイスのせいで人相がわからない。

大男は、地面に突き刺さっている大剣の柄に手を添え、落ち着いた抑揚でオリバー達に向かつて語りかける。

「その吸血牙装はレジスタンスか、しかも新型ときた。そんな君らがこんな所まで何用かな？　まさか、忘れ物を取りにきたなんてつまらないことは言わないだろうね？」

「俺はオリバー、オリバー＝コリングズ。ここがミドウ博士の研究所だと聞いて調査に入った。そういう貴方は誰だ？」

愚直な、あるいは真っ直ぐな返答。後ろではそれはないだろという顔の二人に、ミドウは面白いモノを見たと毒氣を抜かれる。

「くくく、素直に答えてくれる奴は嫌いじゃない。いいだろう、礼儀に則り答えてやろうではないか。私の名はジュウゾウ＝ミドウ。いずれ、吸血鬼全てを一つの種から超越させる男だ」

「貴方があのミドウ博士？」

「そうだと言つている」

「そんな貴方がここで何をしている?」

「君達と同じ調査だよ。何処かの輩がずいぶん好き勝手してくれたみたいでね。髪の毛一本でも見つけて追つてやろうとしたんだが、物的証拠になる物が何一つ無いのだから困ったものだよ」

「高名な博士が部下を付けないで、一人動き回るのは危険ですよ」

「そうか、君は知らないか」

ミドウの問いにオリバーは訳がわからないといった様子だ。後ろにいる二人も同様である。

「姑のように五月蠅い者達がいてね。埃を見つけては、私を吸血鬼研究の総括の座から追い出したのだよ。いやなに、まだ確定していないのだがね。しかしだ、こうして部下を取り上げられたのも事実。おかげで身軽になつたものだよ。業腹だが、愚かなグレゴリオを倒せる者は君達レジスタンスだけになつたという訳だ」

「失礼ですが、貴方は総督府側では?」

「私は今の総督府を快く思っていない。君達の知る赤い霧の牢獄。それがグレゴリオ・シルヴァのせいだとしたらどうするかね?」「……なくはないでしょう。むしろ、合点がいく」

オリバーの硬い声音。シルヴァの印象が悪いことを示しており、ミドウは気分を良くする。

「だろう? しかも、初めに霧の牢獄を開いた頃よりも濃く、血涙もより必要としているんだ。視界も何物も、無機物すら通きない霧の牢獄は外の世界すら知りようが無い。今までは我々は衰退し、化け物に成り下がるだろうね。生物としての本懲を忘れ、墮落させるグレゴリオの政策は罪そのものだ」

「原因は、シルヴァは何を考えているんです?」

「それは君達がグレゴリオの前に立つて質問するといい。グレゴリオは総督府内の地下にいる。なに、総督府を陥落させれば流石のグレゴ

リオも防壁を解除せざるを得ないだろう。強力な防壁であつても、グレゴリオ自身は王座から動けない。血涙の補給を断つてやれば、顔を出さざるを得なくなる

「その時は戦争ですね……」

「質問に答えない代わりにこれを渡しておこう、君達の助けになるはずだ」

オリバーはミドウから投げ渡された情報媒体を受け取る。ミドウは満足した様子で、柄に添えた手を握り、地面に刺さった大剣を引き抜いた。その瞬間、気配が変質する。

肌が産立ち、息苦しく、両肩に岩を乗せたかのような重圧だ。友好的な振る舞いから打つて変わり、空気に緊張を孕んだ。

「ただし、実力のない者にうろちよろされても後々私が困るのでね。その情報を持ち帰りたければ死なないことだ」

ミドウは鍊血でダークマターのような球体を4つ手から射出。見たこともない攻撃にオリバー達は左右に分かれて避ける。その空いた道へミドウが突進して割り込み、反転して唯一の出入り口を封鎖してしまった。

力強く、身軽な動きにオリバー達は取り乱す。とても研究者とは思えない身体能力だ。

「さあ、最新鋭の力。それを私に魅せてくれ」

ミドウは意氣揚々と大剣をオリバー向け、挑発的な様でオリバーを煽つた。

体勢を立て直したオリバーはミドウの挑発を受け、大きく深呼吸すると重厚な大槌を両手で構え、駆け出す。相手は吸血鬼研究の最高責任者。能力は未知数だがやるしかない。

先陣を切つたオリバーは鍊血を使用し、自己強化を施す。一時的に

腕力を大幅に上げ、威力を増加させた槌を振るつた。一撃必殺。装備が揃つた今、オリバーは鍛錬した吸血鬼であつても防御ごと粉碎できる威力があつた。何せ渴求の暴君を倒した実績がある。

しかし、ミドウはあえて受ける。振るわれる大槌に合わせ、間に大剣を挟んでガードした。衝突の瞬間、インパクトが発生。洞窟内が耳をつんざくほどの轟音が轟く。

オリバーは振り抜くつもりだつた。だが、足の軌跡を多少残す程度に動かしただけだ。ガードした大剣でしつかり耐えられていた。

けれど、オリバーには仲間がいる。ペーターやはオリバーに合わせ、協力攻撃をし、射出した弾丸がミドウの頭部を捉える。弾丸はそのままミドウの頭部に直撃。しかし、メットに大した傷は入らない。ペーターはその光景を見て、悔しそうに言葉を吐き捨てた。

「ちくしょう、かてえ……つ！」

「任せる！」

今度はオリフィアが続いた。オリフィアは新型のブラッドヴェイルを剣に纏わせ、赤く赤熱かさせて生きた魔剣化させると、オリバーの後ろから彼の背中を蹴り、ミドウの首を直接狙いにいく。防御を捨てた攻撃特化の一撃だ。

ミドウはオリフィアの魔剣から発する微弱な音に危機感を覚え、オリバーを武器ごと強引に押し退けると、オリフィアの魔剣が接触する前に全力で横に避けた。だが、剣先がわずかに届き。首の装甲が首皮ごと斬られ、ミドウは軽い出血をする。

「ちつ、デカイ団体の割りに速い……  
「なかなかの使い手だ、だが……!!」

ミドウはすかさず大剣の機構を展開。刀身が伸び、冥血の燐光を纏わせる。凝縮する力により大剣が搖れ制御が難しくなるが、ミドウは腕力と握力で振動を抑え込む。間もなくして力が満たされると、冥血

が濃縮された大剣を横風に振り抜いた。

凪いだ大剣から赤く輝く巨大な斬撃の刃が放たれ、オリバーとオリフィアを襲う。特にオリフィアは危険だ。ミドウへの攻撃からまだ体勢が整っていない。直撃すれば、一瞬で灰化しかねなかつた。

オリバーはオリフィアの方へと飛び込み、彼女を抱きかかえると、ブラッドヴェイルを展開する。背中に形成された片翼がオリバーとオリフィアを包み、二人の代わりに強力な斬撃を受けた。

オリバーのブラッドヴェイルは防御特化型だ。赤い光を強く浴びた翼はたちまち深い傷跡を残したもの、所有者と庇護者を守ってくれた。

けれども、ミドウの攻勢は終わらない。初めの時と同様、錬血でダークマターの球体を4つ手から射出し、オリバー達を襲わせた。

オリバーの防御特化とて万能ではない。ダークマターの球体は生き物のようにうねり、四方から防御の隙間を狙つてオリバーとオリフィアへ飛び込む。

オリバーは傷ついた翼を動かし、正面と横の2発を防ぐが、背後に回つた一発だけは自ら被弾してしまつた。直撃した痛みにオリバーはぐあつと呻く。

「オリバー!」「リーダー!」

「敵に集中!　まだいける……っ!!」

仲間に心配されつつも、オリバーは防御特化を解除して槌を握り前に出る。防御特化はあるが2度目の強力な攻撃を防ぎきれるかわからぬ。負担が大きくなるが自己強化を重ね掛けをしようとしたしおうまくいかず、力が練れなかつた。それどころか初めの自己強化が解除されていた。

「残念だが、その球体を喰らつた者はしばらく錬血が使用できないんだ」

手札が激減した。しかも強力な攻撃を連発できるようで、伸びた刀身に再び冥血の燐光をまとわせ、力を凝縮させている。出鼻を挫かれた今、攻撃は届かない。オリバーは急ぎ、防御特化を展開し、オリフィア共々傷ついた片翼の盾に包み込んだ。

2度目の赤い光がオリバー達を呑み込む。

眩い光が収まる頃には、オリバーの防御特化型のブラツドヴェイルは切り裂かれ、これ以上無理だと判断したオリバーがオリフィアを庇い、背中に浅くない傷を受けていた。

なおも、味方を庇う姿をミドウは賞賛する。

「ほう、これは驚いた。2度も耐えたのは君が初めてだ。誇るがいいよ」

戦闘の続行は厳しいオリバー。また、想い人をかつてないほどに痛めつけられたオリフィアは激情に駆られる。魔剣化したままの武器を硬く握り、ミドウへ突進。飛び掛かった。

しかし、単調化した動きをミドウに読まれ、飛び掛けた所で腹部を殴打される。オリフィアは反動により勢いをつけて吹き飛ばされ、オリバーの元へ返された。

「次回はしっかりと対策をすることだ……会う機会があればの話だがね」

オリバーとオリフィアの幕を下ろすため、ミドウが一步を踏み出す。だが、仲間へ止めをさせるまいと、距離を詰めていたペーターガ雄たけびを上げてミドウの足に飛びついた。

ミドウは「煩わしい！」と大剣でペーターを突き殺そうとするが、ペーターは不敵に笑い、オリフィアへ「リーダーは任せた！」と叫ぶと、腹に巻いていた爆発物を起動させて白い発光と共に爆発を巻き上げた。

急な仲間の自爆に啞然とするオリバー。その間にオリフィアはオ

リバーに大槌やブラツドヴエイルを捨てさせ、自らもほとんどの装備を捨て、オリバーの下に潜つて無理やり背負うと一目散に逃走した。煙が晴れると、足に深手を負つたミドウが現れる。

蘇るとはいへ、記憶を失つたり後遺症が残る時もあるのだ。ペーターのような自らの命を顧みない相手は何をするかわからなく、苦手である。格下に怪我させられたのも気に食わない。

とはいえる。オリバーは装備に見合つた実力のある者たつた。レジスタンスに情報提供できたのでよしとする。最悪、信用に不安が残る子飼いの研究者の元で打倒、グレゴリオと奮闘するまであったのだから。その他に、レジスタンスの最新鋭の装備も手に入つたのはミドウにとって純粋に嬉しいことであつた。レジスタンスの幹部達に嫌われており、今まで入手できなかつたのだ。解析が楽しみである。

なお、現在転落人生の真っ只中だ。中でも総督府襲撃計画が白紙に戻つたのは痛い。神骸を入れる実験体が全て倒されるなど想像だにしなかつた。各地の実力者の調査を終えていただけに想定外のことだ。

だが、レジスタンスへ役立つ情報を送った。ミドウとしては、せいぜい総督府と共に倒れるよう願うばかりだ。

ニコラに姉離れされたミアは、気分が落ち込んだままだった。人の縁を繋ぐといつても伝手があるわけでもなく、弟分が不足した今ではやる気は起きない。何か画期的な案も思い浮かばず、今日も今日とて崩壊都市を当てもなく彷徨つていた。

「手当たりしだい人助けでもすればいいのかしらね……？」

偽善のような気がして気が引ける。だからと、助ける対象を選べばいいのかというのも何か違う。いつもならニコラが何かしら言つてくれたのだが、答えてくれる人はいなかつた。

いい加減足も疲れ、途中で発見した道の崩れた公園のブランコに腰を掛ける。小さなヤドリギもあるが、何者かに散られ、浄化作用はなさそうだった。

「八つ当たりなのかしら……？ 痒気が濃くなつちやうんだし、傍迷惑な奴」

近頃、転移に使えそうな小さなヤドリギが破壊されているのを時たま目ににする。そのせいか、墮鬼の活動が活発になつており、安全そうな寝床を探すのに一苦労であつた。

もやもやとして、それを誤魔化すよう体を揺らしてブランコを摇する。

血涙を譲ればいいのか、一緒に血涙を探せばいいのか、悩みを聞いて解決するのがいいのか、線引きが難しい。選択を誤つてしまえば、いいように扱われ、食い物にされるだけの者になつてしまう。

それに何よりも……

「……癪、なのよねえ」

これを機に何処かの組織に入るのもいいかもしない。弟を守りながら生き抜いただけあつて、腕には覚えがあるのだ。そこで自慢できるお姉ちゃんになればいい。

そう思つていると、崖を挟んで向かい側にある寂れた立体駐車場にて、浄化マスクをしていない女性の姿が目についた。若く、何かからか逃げているようだ。

ブランコから離れ、原因は何かと崖の端に寄り、辺りを探る。目を凝らせば、離れた位置に吸血鬼達がおり、若い女性を追跡するようにして追つているのが見えた。

「もしかして人間？ 珍しいわね」

施設にいた頃は日常的に目にしていたものだが、保護区の外では会うこともなかつた。あのままでは若い女性は捕まるだろう。合流しようにも、崖を挟んで対岸にいるミアでは間に合わない。

しかし、都合よく吸血鬼達の装備は近接武器だ。銃剣は見当たらぬい。加えて、自身の冥血は十分である。ミアに地の理があり、ミア側の標高は高く相手を見下ろしている。現状、向こうは手だしきれない地形である。

「人間なんて、大抵は施設から逃げ出した脱走者で厄介事なんだけどね。それはそれとして、自然と吸血鬼達に銃口を向けて狙いを定める私つて案外馬鹿なのかも」

賢く生きているつもりだつた。なのに、弟から離れた途端にこれである。もうなるようになれるだ。

相手は追跡に夢中でミアには気づいていない、攻撃するなら今だ。ミアはブローディアのトリガーに指を添え、若い女性を探している吸血鬼達へ先制攻撃を仕掛けた。

よく狙い、吸血鬼達の不意を突き、立体駐車場に辿り着いた者達を歓迎する。飛来した一発の銃弾が、4人いる内の1人の吸血鬼の足を

貫いた。

足を撃ち抜かれた吸血鬼は転倒し、地面とキスをする。

ミアは軽く息を吐く。最近、背後から狙つた狙撃を斬り捨てられただけに変な緊張をしていたのだ。無事に不意打ちが成功したことでのミアはちよつと自信を取り戻した。

ただ、呟いたりしない。発見される前に次の狙撃ポイントへ移動しなければならないからだ。

対して、不意を打たれ、突如仲間が倒れたことに騒然とする吸血鬼達。慌てて遮蔽物に身を隠し、倒れた仲間も引きずりこむ。射撃線の進行方向を予測し対岸へと視線を移すが、ミアは既に撤退した後だった。

ミアは真横にある崖から突き出た高層建築の建物へと飛び移り、階段を駆け上がつて最上階のフロアの壁に張り付いた。

壁際の端から吹き抜けの窓へとわずかに顔を出し、ミアは吸血鬼達がその場に縫い付けられたのを視認した。

状況が硬直し、互いに睨み合う。けれども、ミアにとつて好都合だつた。それだけ女性が逃げる時間を稼げるからだ。

次第に経過していく時間に吸血鬼の一人が痺れを切らし、立体駐車場から離れようとする。ミアはそれをチャンスとばかりに吹き抜けの窓から姿を見せ、一人抜け出そうとした吸血鬼の右足を撃ち抜いた。

これで二人目の機動力を奪つた。姿と居場所を察知されてしまつたが、敵は残り半数。十分な成果である。

ミアは窓から離れ、最屋のフロアから下層のフロアまで一気に駆け下り、2階の窓から飛び降りる。下はこちら側とあちら側の対岸同士を繋ぐ、一本の細道だ。

地面に着地したミアは、前に前転して着地後の硬直を許さず、細道を駆ける。

ミアは速度を緩め、ブラツドヴェイルを展開すると、鍊血で創造した地雷の複数をステインガー型に巻きつけ、立体駐車場の中へ投げ入れた。

残った吸血鬼の内、片方が皆を庇うよう前に進み、大剣を盾に守りを固める。だが、地雷の効果は爆発でなく、パラライズ。迸る電流が筋肉を萎縮させ、大剣を持った吸血鬼を痺れさせた。

あと残るは傲慢そうな吸血鬼だけである。

傲慢そうな男の吸血鬼はショートソードを片手に、立体駐車場から飛び降り、ミアの前へと躍り出た。

「なんなんだよ、テメエはつ!?

「家族に姉離れされて怒り狂つた姉よ! 大人しく八つ当たりされなさいつ!!」

「はああああああ!? 余所でやれやつ!!!」

意味がわかつても、訳のわからない珍妙な事案で少女に敵意剥き出しにされ、たまたまものではないと傲慢そうな吸血鬼は心から叫んだ。

一対一。対峙した二人であるが、戦いは長く続かない。実は保護区での生活が長く、このたび保護区から追い出された傲慢そうな吸血鬼は体も感も鈍っていた。彼を慕い、ついてきた仲間も同様である。

一方で、現役であり、ニコラのために幾度となく危険に身を投じたミア。複数対一でも負けたことはなかった。

少女と大の大人に単純な力の差はある。しかし、傲慢そうな吸血鬼は接近戦で挑んだのにも関わらず、技術でミアに翻弄され、フェイントに掛かり、足を撃ち抜かれ転倒してしまった。他の仲間は今だパラライズで痺れているか、足に怪我を負った者だけだ。勝敗は決した。

「すつきり……!」

「テメエはな!」

傲慢そうな吸血鬼は悔しそうにミアを睨む。ミアは「弱い者虐めするからよ」と言つて麻布から血涙を一つ取り出し、残りは袋ごと地面に置いた。

「あの子は私が貰う、これはその手切れ金みたいなものよ。少ないと  
は言わないわよね？」

「はんつ、姉離れなんだの言つといて人間狙いだつたんじやねーか  
「返事が聞きたいんだけど？」

「ちつ、こんなところで死ぬわけにはいかねえ。それに子供一人倒せ  
ないようじやあ、どつかのグループにあの人間を奪われるわな。ほ  
ら、見つかるかもわからねえ奴を連れてさっさと行けっ」

確約ではないが、折れた態度の吸血鬼に満足したミア。すぐさま方  
向転換し、傲慢な吸血鬼達に替わって、若い女性を追つた。

その後、ミアは若い女性を見つけ自殺しようとする場面を止めたり、  
保護したもの、お腹を空かせた若い女性のため食料を探したり  
と。

再び保護者になつたことで組織に入する意欲は薄まり、若い女性  
の居場所を見つけるまでは彼女と共に生活することに、ミアは決めた  
のだった。

分身のニコラは本物のニコラがいる雪山に到着していた。今と  
なつては懐かしい感触である。ここに辿り着くまでに力を使い、ただ  
でさえ儚い命を一層削つた。されど、もう旅も終わりだ。

棺の近くに見慣れない女性がおり驚いたものだが、軽く挨拶を済ませ、棺の中へと足を踏み入れる。「久しぶり、もう一人の僕」と呼びかけると、本物のニコラは何故ここにいるのかといった面持ちだつた。  
本物に話すことが沢山ある。自身は持つて数日の命だ。消えるそ  
の前にすべてを話すことができればいいなど分身ニコラは思った。  
最後は本物の自分に記憶を譲つて終わりだ。

自分の終わりが迫つているというのに、分身のニコラはどこか満足

していた。

ヤクモは戦場の中、瓦礫を横切り、不自然な直線上の道をただ真つ直ぐに歩いていた。街は赤く燃え、どこからともなく銃声が辺り一帯に轟いている。

走ろうとしても走れず、止まろうとしても止まれない。体の自由が利かず、マリオネットのように強制的に歩かされた。

道中、道に佇む金色の墮鬼がいた。金色の狩人である。

武器を持たないヤクモは逃げ出そうとするが、相変わらず己の意志では指一本動かせない。逃げ出したいのに、逃げ出せない。

けれども、金色の狩人は襲おうともせず、立っているだけであつた。顔が判別できるほどに距離が縮まるごとに、金色の狩人は砂のようになられ、中から一人の男が現れた。

それはヤクモの弟分であるミゲルだった。

ミゲルはヤクモに一言謝ると、眠るように目を閉じ、崩れて消える。声を掛ける間もない。ヤクモは得も言えぬ心境で先へ進される。

続く道の中、今度は先ほどとは違う人物が道中佇んでいた。鬼フエイスのプレートメイルを着用した者だ。ヤクモは知らないがミドウの実験体である。

その実験体も金色の狩人と同じく崩れ、中から一人の男が現れる。ヤクモやミゲルと同様、ミドウに孤児として引き取られた弟分だった。

その弟分も一言謝罪し、眠りにつくように崩れて消えた。ミゲルと

同じく大切な弟分なのに手も届かず消えてゆく様が心苦しかった。

その後も、新たな墮鬼や実験体が現われては、中からヤクモが探している弟分・妹分達が現われ、眠りにつくように消えてゆく。

まるで、もう会うこととはできないと言われているようだった。

何処かで生きていて欲しい。そう思っていた人物がほぼ全員目の

前に姿を現し、皆一様に眠りについていく。ヤクモはそれがどのような意味を持つのか察するものがあった。だからこそ、強制される歩みが止まつて欲しかった。

ようやく足が止まつたのは、ペレーキ帽を被り軍事服風の格好をした妹分の前だった。一番ヤクモに懷いていたエミリーだ。

エミリーがヤクモに近づき、片手で愛おしそうにヤクモの頬に触れ、双眸を潤ませる。

ヤクモは声を発したかった。どうしたのかと声を掛け、妹分の不安を解消したかった。けれど、エミリーはヤクモを安心させるように静かに笑うと、眠りについてしまつた。

ヤクモは固く拳を握る。

気がつけば、束縛から解放されたかのように己の意志で体を動かせた。

しかし、守りたかつた大切な者達はもういない。自身の感情の行き場がなくなつたヤクモは、ただ一人、暗くなつてゆく街の真ん中で慟哭をする。

そして、そこでヤクモは目が覚めた。場所はベッドの上であり、外はまだ真夜中だった。

「夢か……？」

体が気怠いがベッドから体を起こす。質感ある夢見であつた。沈黙した室内が孤独感を搔き立て、嫌な感じだ。

何かしていないと不安で、ヤクモは引き出しからエミリーとミゲルと自身が一緒に写つた一枚の写真を取り出す。いつもなら心温まる写真だ。

けれど、その写真に水滴が落ちた。

「おかしいな、こんな夜は一度や二度じやなかつたはずだ。なのに、なんで落ち着いてくれないんだよ……涙が全然止まんねえ……」

この日、ヤクモは眠れぬ夜を過ごす。

それからしばらく経過し、魔改装された教会の内部にて。BARの客席でヤクモは私物である酒類をハイペースで空にしていた。普段ならば、このような真似はおそらく勿体無さ過ぎて絶対しない。恐らく今回が最初で最後だ。

眠れぬ夜を過ごしてからというもの、寝たのか寝ていなかわからぬ浅い眠りの日々が続いた。体力が回復せず、朝を迎えると悲しみが一層深くなる。

また、睡眠が浅ければ思考が低下し、判断力も鈍る。ヤクモはルイの仲間の中で主戦力であるのだが、体調が安定するまでは自宅待機となつた。

現在、まとめ役であるルイはいない。皆の血の飢えをなくすため、いつもの血涙の源流探索に出ているところだ。他に、秘密裏に協力してくれるサーベラス隊員、デイビスも仕事で忙しく、最近顔を見せてない。協会にいるのは商売人ココと装備技師リンだけである。

リンが武具屋のカウンターから抜け出し閉店の看板を置いてヤクモの隣へと座る。いつも兄貴分として頼もしいヤクモが自棄になつている姿を黙つて見ていた。

「少し前から様子が変だつたけど、ヤケ酒なんてらしくないね。どうしちやつたの？」

「そう、だなあ……大切な物が両手から零れ落ちちまつた。そんな気分なんだ。ああしていれば良かつたかもしれない。こうしていれば良かつたかもしれない。日常の中、突然不安に襲われる。よくある話さ」

「愚痴なら聞くよ？」

「リンまで辛氣臭くなることはねえつて。明日になれば、いつもの俺に戻る。きつとな」

「だつたら、隣で一緒に飲むくらいならいいよね」

「へえ、意外だな。飲めるのか？ てか、リンの酒置いてあつたつけか？」

「隠してた訳じゃないけど、眠れない夜にはちょっとね。ココさんと都合してもらつたの」

リンはB A Rから蒸留酒と塩、柑橘類を取り出し、席を整えてヤクモの隣に座つた。

「ん、なんだそのラベル。見たことがないな、少し貰つてもいいか?」

琥珀色の液体は見慣れているが、知らない銘柄に興味が湧く。

「いいよ。そのグラスに入っているもの、空にして」

「おう」

ヤクモはコップの中身を飲み干し、リン差し出した。リンは蒸留酒の瓶を持ち、ヤクモのグラスへと傾ける。グラスに少量ほど入り、ヤクモはありがとなと言つて、貰つた琥珀色の液体に口をつけた。

「……少しキツイな。だが飲みやすい。キンキンに冷やされたのを抜きにしてもな。俺が知るテキーラの中でも度数がだんとつだ」

〔密造酒らしいね〕

「あー、道理で度数が高い訳だ。でも、いいな、これ。酔うにはもつてこいだ」

「うん」

リンは微笑んだ。

それからはヤクモとリンの酒盛りが行われる。

初めは呟く程度に日常の談話を看としていたのだが、口が緩くなり、次第に深い話に切り替わっていく。

ヤクモはエミリーとミゲル。妹分や弟分達の暗くも大切な思い出話を。リンは戦わなくなつた理由、うつすらとしか覚えていない夜又と呼ばれた頃の話を。

リンの仲間を裏切りたくないから戦場に出ない。ヤクモはリンの言葉を否定することなく受け入れる。リンはつい甘え、強い言葉を使ってしまうがヤクモは同調した。

いつしか立ち位置が逆転し、リンの鬱憤をヤクモが聞いていた。口にするのもはばかられる話であったが、それでも二人は楽しそうだった。

お互い知らない身内話を披露をし、話が進む度に主にヤクモの酒が消費されていく。けれど、ヤクモは構わず、酒瓶が空になれば新しい酒を開けていった。

飲みすぎて、二人の判断がだいぶ鈍くなる。ヤクモは個人的に好きな酒米の入ったグラスをリンに勧め、リンは素直に受け口をつけた。リンは飲みながら関節キスだと気づくが、呑気にどうしたと問うヤクモにリンはその場を誤魔化す。リンは酒で赤らんだのか、意識をして赤らんだのかわからぬままグラスをヤクモに返した。

酒もなくなり、思いつく話もなくなつた。お開きである。ヤクモが後で後悔するだろう空になつた酒瓶が周りに置き場なく置かれていた。

リンはすっかり酩酊し、赤い顔のまま部屋で休もうと椅子から離れる。だが、酔いも手伝つてバランスを崩し、よろめいた。

そこへヤクモが割り込んで、がたいのいい体でリンをしつかりと支える。

酩酊状態のリンは小首を傾げ、わけのわからない様子であつた。しかも何を思つたのか、ヤクモに寄りかかり子猫のように甘えた。ヤクモは困つた顔でリンに体を貸し、移動を手伝う。

二人で寝室に入り、ヤクモはリンを寝かしつけようとする。けれど、ふわふわした意識のリンは今の温もりを手放したくなかった。リンから離れようとするヤクモに抱きついたまま離れない。

こうなつてしまふと、物理的にも無理やり突き放すのは難しい。何せリンはかつて軍に所属し、味方に恐れられるほどの実力者であつたのだ。現在では裏方であるが、体格差などものともしない。

リンはヤクモが優しく寝かしつけようとしている内に絡みつき、

ベッドの中へと引き釣り込んでしまつた。

一方のココ。酒盛りする前からいたのだが蚊帳の外である。ヤクモとリンが寝室を通るのにココの前を横切つたはずなのだが、二人の眼中には映らなかつたようだ。

ココは呆れ、ヤクモとリンが残した酒瓶達の後片付けをしてやる。グラスなどを洗い、BARの整理が終わつて、煙草に火をつけると、寝室から耳にしたことのない甘えた声が聞えた。まさかの濡れた聲音にココは体を硬直させる。

ココはまさかと寝室へ目を向けた。が、まだ何も聞こえない。

やはり自分の気のせいだと、興味を失いかけた矢先。耳を澄ます必要もなく、静かな教会の中で女の濡れた声が断続的に聞こえてきた。自分の耳に疑つてすまなかつたと謝る。寝室からBARまでの距離はそれなりだ。ならば、近づかない方が精神衛生的によさそうだった。

「はあ、寝室の壁は薄い伝えてやらないとね。改装の見積書はルイでいいか」

突然の経費がルイを襲う。しかしながら、ココはヤクモとリンが説得してくれると信じていた。リンに恋愛経験がないのは知つている。まさかヤクモが役得だけ堪能することはないだろう。

「浮ついた話が一つもなかつたんだ、丁度いいかもね。大事な者ができるば、それだけ生きようとするだろう」

だからといって、生々しい営みを聞くつもりもない。ココは二人に氣を使つて教会の外へ出た。一服の続きをを行い、煙草を吹かす。

後日、肌の色艶のいいリンと若干うろたえつつも妙にリンに優しいヤクモ。それからココから渡された改装見積もりに戸惑うルイといい取引に期待するココの姿があつた。

ネレイスとテーベを連れたカミラは、予め見つけておいた水場のあ  
る隠れ家へ隠れる。そして、到着するなり、カミラは身を清めたいと  
伴侶達も強制的に水浴びに参加させた。半裸のまま、話し合いをした  
くなかったのだ。

水場を前にしたカミラはぼろぼろである服を脱ぎ、ネレイスも倣つ  
て服を脱ぐ。一方で、カミラを警戒したままのテーベは神骸石を大事  
に握り、水浴びを遠慮する。

けれど、カミラは拒否を許さず、テーベから器用に服やアイテムを  
強奪すると、全裸にして強制的に入浴させた。

無理やりな行為にテーベは苦言を呈する。

「……無理矢理行為に及ぶのは関心致しません」

「後で監視するのも面倒なの、貴女が合わせなさい」

マイペースにカミラは言い放ち、ネレイスとテーベに背を向けると  
顔から布を取つた。

テーベは不可解そうに、ネレイスは不思議そうにカミラを眺める  
が、カミラは素顔を見せない。否、見せられない。

「監視するという割には背を向けるのですね」

「ネレイス、任せたわよ」

「仰せのままに」

「ネレイス……」

言いなりの妹にテーベは眉を寄せる。

「テーベお姉様、の方は継承者様です。お気づきになられませんか  
……？」

テーベはネレイスに言われずとも繼承者と似た気配を纏つていることは感じている。けれど、繼承者にはなかつた不快感が拭えず、敬う気にはなれなかつた。

「……繼承者様と同等な気はするのですが、あの方に対する悪感情が拭えません」

「お姉様……」

ネレイスは悲しい顔でテーベを見つめる。

伴侶の行動としては、テーベが間違つていると理解しているのではが悪かつた。

「意外と好戦的なのね。それとも根が真面目なのかしら？　まつさうで綺麗なものでないと許容できないのね」

「あなたが望みとあらば態度を変えましょう」

「あのお方でもあなたでも、好きに呼んでくれて構わないわ」

「でしたら、あなたと呼ばせて頂きます」

「律儀ね」

反発気味だつたり、態度に角があるものの、最初に出会つた時のように殺しにくる気配はない。ならば、カミラはそれでいい。

対して、カミラとテーベのやり取りを見ていたネレイスは「お姉様……」と落胆する。自分がカミラを受け入れただけに、テーベも共感してくれるのではないかと勝手に期待してしまつたのだ。

それから静かな時間が続き、伴侶達が先に上がる。

長い髪に時間を取られ、伴侶達より遅れて終えたカミラは体を適度に乾かすと、目元を布で覆つてトランクケースの前に立つた。

前の約束守り、内なるクルスのお楽しみタイムだ。衣装を吟味する。

『ん、今度はこつちがいいかなー』

とある人間の女性と同じ衣装である。クルスが指定した服は前回と比べて袖がなく、前回の衣装よりは私服に向いているが露出度は上がっていた。

(……ねえ、他にもあるのだし、一度スカートから離れましよう?)

『やだし、こっちがいい』

(……どうにも、短いスカートは履き慣れないのよね)

『んー……どうしても嫌だつたら、伴侶の服でもいいよ。妖精っぽいし、カミラも着慣れてるよね』

(やめて、やめて。本当にやめて。時と場所を選んで。ネグリジエでももつと控え目で、就寝前はガウンを羽織っていたし、あんな格好で外出したことなんてないわよ)

『カミラって派手な露出苦手だよね。でもこの感じなら、もうちょつと際どいラインを攻められそう。ギャル服とかいけるね?』

(……何故かあるのよね。カーミラおば様は何を思つて用意したのかしら?)

おかげで着せ替え人形だ。お互い感情を隠せないせいで露出の下限ラインをどんどん探られる。

恐らく、次回は露出度の高い学生服風の衣装も指定されるだろう。できれば着たくない。だが、悲しいことに羞恥はあっても嫌悪感はないのだ。そうなるとクルスは遠慮しない。

しかし、カミラにはまだ手は残されている。お互い感情がわかっても、何を考えている今まで読めないので。そうであるなら、合法的に服を無くしてやればいい。

カミラは将来の選択肢を潰すため、ネレイスに話を持ちかけることにした。

手早く人間の女性の衣装を身に纏つたカミラは、可燃物を燃やして焚き火をしているネレイスへ近づく。その横にはテーベも一緒になつて薄着を乾かしていた。

「ネレイス、それからテーベも。伴侶を知る者からすれば、その格好は目立つわ。衣装が余っているから貴女達も着替えたらいどうかしら?」

伴侶達の薄着は伴侶を知らない者からしても目を引くのだが、今はどうでもいい。大事なのは遠慮せず着替えるということである。

しかし、カミラの想定とは異なって、伴侶達の反応は悪かつた。單なる着替えのはずなのにネレイスは怯え、テーベはあからさまに不満な目をしている。

「……なにか、問題があるかしら?」

「……申し訳ございません。この衣装はお母様から頂いた大事な物なのです……おはようからお休みまで共にあつた衣装なのです……ですから、他の格好をするのは承諾しかねます」

ネレイスの横ではテーベも大きく頷いていた。

まさかのライナスの毛布である。母から与えられた物を手放せず、精神安定剤として機能していた。余計な事をするところじれそудだ。カミラは口惜しく思うものの、引き下がることにする。

「そう、ならこれ以上言うのは止めておきます」

内心落胆した。真つ当な着替えが拒否されるとは。

そこでカミラの企みに気づいたクルスは意地悪な笑みを浮かべて笑う。

『残念だつたね?』

(もう……)

唸っていてもどうしようもない。カミラはネレイスからテーベに

視線を移し、テーベとの話を進めることにする。

伴侶達の服もいい具合に乾いたようだ。カミラは伴侶達の着替えを待つてから、話を再開した。

「單刀直入に聞きましょう。私に従うか従わないか、今この場でテーべの意思を聞かせて下さる?」

「……また難しいことをいいますね。私の繼承者様を殺しておいて降れとは……神経を疑います」

「あら、ネレイスから話は聞いていなかつたかしら?」

「神骸を完全に破壊できると聞いておりました。ですが、私が目にしたのは事実とは異なる出来事。一体、繼承者様はどうなつたのです?」

「壊れた器を破壊しきつて神骸から分離させたのよ。繼承者は蘇ることはないけれど、永遠に囚わされることもなくなつたわ」

「どれだけの方々が開放されたのでしょうか……?」

「知っていたの? 多少成長する程度には取り込んでいたみたいね。人柱を繰り返していくば、神骸を抑えられる期間が短くなつて、いざればクイーンの再来になつていたわね。それでも神骸を封じるには実行しないといけなかつたのでしようけど」

「ジュウゾウ・ミドウは私達を意思無き人形と思っているらしく、口が軽かったです。研究の方と話していたことをよく覚えてています。

繼承者様が現れない間は器の入れ替えが早く、それこそ1日単位で犠牲者が発生してしまつ時も……また、適性の高い方々でも、自らの意志で立ち上がりつて頂かないとさほど効果はないのです」

「人柱を立て分割しないとクイーンが復活し、人柱があつても、同じことを繰り返せばいづれはクイーンに相当する化け物が蘇る。八方塞がりね」

「どうしても、人類を長期的に延命できるのは繼承者様だけです。だからこそ、尊き意思を敬うのです」

「それで現状、解決できるのは私だけで結果も出している。嫌がる理由は何かしら?」

「……引っ掛けたりを覚えるからです。あなたが総督府の方々に協力を求めたのなら、きっと喜んで手を貸しますのに」

「狙われる力を晒すつもりはないわ。吸血鬼研究機関、何よりも貴女達を使い潰したジュウゾウ・ミドウに知られるのは危険じやない」

「それは、そうでありますば……」

テーベとてミドウの危険性は理解している。けれど、総督府だつて馬鹿じやない。重要人物であれば、それだけ丁寧に扱つてくれるんだろう。

テーベなりに常識に則つて判断しているのだが、カミラが何を恐れてそれほど慎重に動いているのかわからなかつた。

『人類希望の振り籠、エイジス島を跡形もなく更地にしたのが足を引つ張つてる件について』

（裏では一握りの人類のみを生かす計画を進めていたもの、一片たりとも手心なんて加えないわよ。けれど万が一、億が一、総督府がその情報を掴んだ場合を考えると最終的に手の平をひっくり返されるのよね。外交を思えば、私という極悪人はさつさと捨てたいでしようし。だからこそ、人となりを知つていて、かつ組織の中核にいるであろうジャックに接触しようと考へたのよね）

『人も研究も核となる人造生命体も何もかもを破壊し尽くしたし、大した証拠はないんじやない？ 慎重になり過ぎかなつて思うけどね。んく、あの時みたくまた暴れたいな、愉快痛快だつたもん。でも、首謀者が留守でいなかつたのは残念だつたね』

（日本中を探せば発見できたのでしようけど、深追いは流石にね。探すつもりで逆探知なんてされたくないもの、追われる日々はまっぴらごめんだわ）

これがカミラ達のやらかしの一つだ。

前作より一部抜粋

クイーンがクルスと名を騙つてカミラに隠し事をしていた時期、人

間対バケモノが争う最中、カミラはロシア中のバケモノを食い尽くすがごとく影で猛威を振っていた。

何せ、吸血鬼は伝奇的な存在であり、最悪人類に排斥される可能性もある。血液を必要とするカミラは独りでも生きられるよう奮闘していたのだ。

もちろんバケモノは弱くない。鍊血が確立されていない第一世代の吸血鬼に国から追い払われ、人間に拳銃10発で倒されていた頃よりはずっと強化されている。

しかし、クイーン討伐期間を挟んで強くなつてもなお、一週間と経たず復活したクイーンがフルスペックで各個撃破をしてくるのだから、狙われたバケモノはどうしようもなかつた。

その結果、吸血鬼が人類に仇名すというグレゴリオ・シルヴァアが恐れていたことがずつと後になつて起きる。

始め、外で目覚めたカミラは仲間を作らずバケモノばかりを狩り、生け捕りにしたバケモノを拠点に持ち帰つて、内なるクルスが創った施設に取り込ませた。この時カミラは内なるクルスがシルヴァアの娘だとも思つていた。そうしてバケモノから半永久的に血液を搾取し苦しみ続けた。無限に蘇る性質を利用し、原型を無理やりその場に留めさせて。

墮鬼とはまた違う、人類を追い込むバケモノをクイーンが食べまくればどうなるか。カミラが味方を作るのを嫌い、クイーンは下僕といふ提案をできず、クイーンのリソースが個人にのみ振られるとしたらどうなるか。誰であつても想像は容易だろう。

地下深くにバケモノが大合唱する血液精製所を創つたことで、クイーンのシルヴァアの娘を捨てたことによる弱体がなくなり、単騎でバケモノ軍団を殲滅できるほどに能力が増強され、やがてクイーンの全盛期すら超えるに至つた。

そして、それらが巡り巡つてロシアにいるバケモノ達を一致団結させてしまい、旧ロシア地区連合が準備していた“掃討作戦”がなされる前に、ハイヴという人類の拠点がバケモノ達により陥落してしまった。

また、その拠点を中心に活動していた武力組織を纏めるロシア支部長と洗脳を得意とする大車ダイゴが死亡する原因にもなった。更にそれが切欠で、カミラはその二人が首謀者の傀儡だと知る起因ともなる。

最後は、人類の反攻の出鼻を挫かれ、バケモノにハイブが陥落されたと世界各国がどよめき慌てふためく中、カミラは日本へ飛び、エイジス島の本格的な建設が始まる前に島を陥没させ更地にした。

ただ独善的な判断でそこにいた守り手も、善良な研究員も、世界各国から集められた代えの利かない人材や貴重な資源も何もかもを破壊の限りを尽くして。

そうして、人類は夢と希望を失い、人生を賭して計画を進めていた黒幕には虚無のみが残つた。彼らの物語は始まる前に潰えたのだ。ゆえに、人類へ深刻な出血を強いたカミラは心底表に出たくない。選ばれた僅かな者だけを生かす情報を掴み、日本に赴き、人々の最後の希望を首謀者の計画もろとも潰して全人類に喧嘩を売つたのだから好き好んで目立つわけがなかつた。

黒幕の計画を止めるにしても、手段を間違えたと言われ断罪されるのはわかりきつている。

そんな訳だ。

「貴女達の母親を蘇らせる件は交渉材料に弱いのかしら？ ネレイス、どこまでこの子と話したの？」

「神骸の完全破壊で話し合いが終わっています」

「待つて、待つて下さい。お母様が蘇るだなんて聞いてません……！」

「テーベが今首に下げているアミュレット、それに嵌つた石で蘇るのよ。安定させて復活させるにはもう幾つか数が欲しいのよね」

「悪用するために集め始めたのではないんですね……？」

凄まじい形相をするテーベへカミラはそうだと肯定する。

テーベは続けて、ネレイスに視線を移すとネレイス頷いてカミラの言葉を保証した。

するとテーべの眉間が和らぎ、敵対雰囲気もだいぶ落ち着いてくる。けれども、まだ煮え切らないようで答えを出さなかつた。

カミラはテーべの言葉からとつかかりを得、試しにテーべを揺さぶつてみることにした。

「何か勘違いしているようだから、その石、今ここで壊しましようか。その方がお互いすつきりしそうよね。私は最低限数が揃えばいいものの」

カミラは片手を前にずいっと差し出す。

テーべはカミラの行為にアミュレットを慌てて両手で隠し、身をよじつてアミュレットを隠した。

「だ、駄目です……！　お母様が蘇るというのなら、また話が違います……！」

「冗談よ。ネレイスに預けたのだから、いい加減に返して頂戴」

早く返せと手を揺らし催促するカミラ。

テーべは数秒悩み、そういうことならと首からチエーンを外してアミュレットを握つたままカミラの手に置いた。

「ねえ、貴女の手からソレを放して下さらない？」  
「わかっています……わかっていますから……」

真面目な顔である。別の言い方をすれば真剣な様子であるのだが、テーべの手は微振動するばかりで放す気配が全くなかった。

カミラは仕方がないとテーべの手首を掴んでは引つくり返し、反対の手でもぎ取ろうとする。

「返す氣があるというのなら、力を緩めなさい」「やっています……！」

『顔こわあ……余裕ないね。ね、これ襲つてこない?』

本人は至つて真剣だが放してくれない。呪術も罠も何もしかけてないので、あとは本人の意思で返すだけなのに手が固いままだつた。そこへ、見かねたネレイスが助け舟を出す。

「継承者様。私はいいですから、テーべお姉様にお預け下さい」

「聞けないわね。味方でもない人に預ける義理はないわよ」

徐々にテーべの握つた手を開くカミラ。アミュレットがもう間もなく回収できる……直前になつて、テーべが遂に折れた。

強気な態度は何処かへ行き、すっかり弱弱しくなる。

「お止め下さい……私から大事な物を奪わないで……！　今はつきりと自覚しました……、このお母様の温もりがないと不安で仕方なくなるのです……！」

「聞きたい言葉ではないわね」

「…………わかりました。今後、あなたに従いましょう」

「貴女の継承者を殺した女よ、そう簡単に納得できるのかしら」

「今になつて手の平を返さないで下さい！　継承者様は皆様に必要だからこそ大事ですが、私にとつてお母様は大切なのです……！　クイーンの束縛からお母様を解き放つて頂けるのでしたら、喜んで従属致します……！」

「そこまで言うのならば仕方ないわね」

テーべが認めたことでカミラはアミュレットを回収するのを中断し、掴んでいた手首と抉じ開けようとした拳から手を離した。

「そうゆうことよ、ネレイス。譲つて貰つて悪かつたわね」「いえ、テーべお姉様のお気持ちを理解できますので大したことではありません」

ネレイスは静かに首を横に振り、自分は大丈夫なのだと示す。

早急に解決すべきことは終わつた。次の棺の場所へ向けて、カミラはしばし休息を取ることにする。

本日一日の疲労により早々にテーベが熟睡。寝ているテーベから少し離れた所でカミラとネレイスはリラックスした状態で会話をする。

「さて、勝手に仲間扱いにさせて貰つたけれど、否定がなかつたということは答えが決まつたとみていいのかしら」

「はい、私もテーベお姉様と同じく貴方様を第一として従属致します。如何様にもご命令下さい」

ネレイスは頭を恭しく下げる。そこへ、カミラがネレイスの頬に触れ顔を上げさせた。

カミラと触れ合う肌に嫌悪感を現さず、ネレイスはカミラが行つた行為を静かに受け入れる。

「だいぶ、地に足がついた感じね。この受入れようなら、酷い拒絶反応は発症しないかも」

「……？」

「貴女にはこれから高い支払いをして貰うわ。ここではテーベを起こそでしようし、もう少し離れましょう」

カミラはネレイスの手首を掴み、就寝場所から離れ、明かりのない暗い夜道を歩く。声を出してもテーベに聞こえない所までネレイスを引つ張つた。

それから、ネレイスを座らせたカミラはネレイスの背後に回り、ネレイスの肩に両手を置くと、「後ろを振り向かないでね」と言い含めた。

「あの、継承者様……？ これから何をなさるのでしよう？」

ネレイスの肩に手を置いたカミラはしゃがみ、ネレイスの癖つけのある髪を首から後ろに押さえて首を晒す。カミラのその様は楽しげだ。

「私は吸血鬼よ」

「存じております」

「なら、わかるわね」

「申し訳ありません。よく、わかりません」

「貴女の血が欲しいのよ」

「でしたら、お待ちくだ……いつ!!」

自身の手の平を噛み破ろうとしたネレイスは背後から襲ってきたカミラに首筋を嚙まれた。もつと言えば、異様に伸びた二本の犬歯がネレイスの柔肌に突き刺さる。

牙が食い込んだネレイスの首筋から熱い血潮が湧き出、カミラの口腔に流れ込んだ。清き乙女の血液がカミラの舌に触れると、思つた通りの好みの味にカミラは顔を緩ませる。目を細め、口に溜まつたぬめつた液体をゆっくりと嚙下し始めた。

一方、ネレイスは何が起きたかわからなかつた。一瞬の痛みに体が硬直する。

吸血鬼といえど、強い肉体を代償に血を必要とする強化人間の意味合いが強い。牙を生やして人を襲うなど、正しく伝奇などに登場する吸血鬼であった。

体の中から自分を抜き取られる感覚が、冷たい灼熱が体の底から吸い取られ自分が奪われてゆく。ネレイスは捕食者に食われる始原の恐怖が何よりも恐ろしかつた。

最早、願い事による対価なのだとすら思い浮かばず、ネレイスはカミラから逃げ出そうとする。けれど、背後から抱きしめられて体を固定され、立ち上がるうとするが足を絡み付けられ、前のめりに倒れた。

献血とは違う、自身のナニカを奪う音が鳴り止まない。ネレイスは無様な様であろうとも、地面をもがき、カミラから逃れようとする。どうにもならず、姉に助けを求めようとして声を張り上げようとするが、カミラに手で口を塞がれてテーベに声が届かなかつた。

ネレイスはカミラと最初に出会つた頃のように理性を失くし、しばらく抵抗していたが、それも無駄だと知るとだんだんと気力がなくなり暴れるのを止めた。

無抵抗の間もネレイスはカミラに食われ続ける。首筋から血液を奪われる音がする。

気がつけば最初にあつた痛みもなくなり、じつとりと濡れた沁みる心地よさを覚える。変に身体が熱を持ち、肌が敏感になつて、抱き締められて圧迫されるのが気持ちいい。

次第に声が口から漏れ、目から涙が零れる。カミラに何かを口に押し付けられたかと思えば、血涙だつた。

中の血液を口に含む行為すら身体が高ぶり、口腔に絡みつく液体を喉を鳴らして嚥下する。飲むというだけなのに身体が喜ぶ。

何がなんだかわからず、ネレイスはカミラにされるがままであつた。そしてこの日、ネレイスはカミラの手によつて喰われる快楽を身体に刻みこまれた。

それからそれなりの時間が経過すると、若い乙女の血を堪能したカミラは行為の手を止めて、ようやくネレイスを開放した。しかし、ネレイスは氣絶しており、薄布がはだけたまま深い呼吸を繰り返し、胸を前後させて寝入つてしまつていた。

『これは酷い、血と乙女の汁で見事にぐしゃぐしゃだね』

（ふふふ……乱れれば乱れるほど血が美味しくなるわね。今後の約束も取り付けることができたし、次回も楽しめそう）

今のカミラは弾むように上機嫌だ。クルスからすればあまり面白いものではない。

『カミラの恋愛観破綻してゐるし、別にいいんだけど……家庭の事情で仕込まれて、男も女も喜ばせられるつて、カミラの家庭歪すぎだね』

（政治の道具だつた面も強いもの。幾人の女性を教師としてあれこれしたことがあるつて、教えたじゃない）

『そだつたね。お母さんの前では仮面を被つてゐるけど、お父さんは子供を道具としか思つてなかつたつていう話だね』

（そうね、お父様はお母様しか愛していないから。お母様の前では取り繕つているけれど、何かと縛つてきて面倒だわ）

『ハーデスとペルセポネみたいな関係でカミラのお母さんを落としたんだつけ。皆に愛されているお母さんを無理矢理物にしたんだから、恨まれて当然だね』

（おかげで家同士での確執も多かつたわね）

『で、お母さんみたいな人気者に許嫁を取られて負けヒロインと』

（許嫁がいた事実に発狂氣味だつたのに、よくその話を持ち出したわね）

『よくよく考えたら負けたし、いいかなつて。結局、女を武器にもしなかつたし』

（眞面目で堅物、そしてロマンチストだつたもの。いい人過ぎて、無理やり迫ると断固拒否するような雰囲気を持つていてね。距離が離れそうだつたのよ）

『無駄な教育が裏目に出てるし……それにしても、お母さんはよく気づかなかつたね』

（兄達の教育の失敗から学んだお父様は前々から画策してゐたみたいでね、その女性はお母様に信頼されてゐたのよ。私も普通でないと気づいたのはずっと後の事だわ。けれど、教育では教えてくれないことを学べたのだから意外と重宝したのよ？　お父様を裏切つて私の味方についてくれたのだし）

『あー、んー、闇が深い……やめやめ、気分が陰鬱としてきた。続ければまた今度にするとして、このぶつとんで戻らなくなつたの、明日動けるの？』

（移動の間は背負うわよ。あと、話が脱線して聞きそびれたのだけど、

伴侶の血から私達の気配を隠蔽できる結果は得られそうかしら）

『ばつとわかつたことだけ言うと、繼承者を探索する範囲割かしおつきい。身体リニューアルしてなかつたら大変な目に遭つてたところだよ……。でもでも、素材が手に入つたから伴侶になら襲われないまでに調整できそう。神骸持ちに關してはなんともいえなーい』

（鍊血の使用はどう？）

『身体の内から練り上げてるし控えたほうがよきげかな。棺を挟んで正体がバレないって言つても、あくまで話し合うならつて感じだし』

（戦闘スタイルはこのままね）

『もうちょっと融通が利くように弄つてみるね。わんわんハウinz型が持ち腐れになつてるし。あーでも、あつちで代用して使つてもいいのかも？』

（代用つてバケモノの力を？　影から出現させる疑似自立生物を、血を行使しないで言い訳しきる自信がないのだけれど……）

『ブランドヴエイルを持つてないのにオウガ型とか使つてる時点で今更だし。向こうは繼承者だつて言つてるんだから、その論法でごり押ししちゃえ』

（肉体ならまだしも影からなのよ？）

『じゃあ、影から鎖を伸ばしてそれっぽくしてみたりとか』

（んー、移動時間もあるのだし、その時に考えましょ）

『りょうかくい』

絶対に戦闘に必要というものでもない。本来のハウinz型からかけ離れた技の運用をどうするかは後回しになつた。

それに、ハウinz型より先に解決しないといけない問題がある。力ミラは眠つて いるネレイスの薄布に手を掛けた。

『あれ、そいつの服を脱がせるの？』

（綺麗にしてあげないとね、このままだと臭うもの。それに何もしないで寝床まで運ぶと、朝からテーベの詰問に詰問されるわ。折角なん

だから、秘密にしておいて背徳感を楽しみましょ)

相手の身と心がどろどろに溶けるほどストレスが緩和され血液が美味しくなる。腐っていた技術も久方に使え、嗜虐心も満たされ、実際に趣味と実益を兼ねた行為だ。

内なるクルスとの関係も悪くはないが、可愛い子が堕落していく様はやはり愉しい。

カミラはくすくすと艶やかに笑い、闇夜に紛れた声は愉快そうに響いて溶けた。